可児市埋文調査報告　42

柿田遺跡馬乗洞地点

２００９・３

岐阜県 可児市教育委員会

例　　言

1．本書は、可児市字柿田における柿田遺跡馬乗洞地点（21214-08846）の緊急発掘調査報告書である。柿田遺跡馬乗洞地点は東海環状自動車道･国道21号線バイパスにアクセスする市道建設に伴うもので、遺跡の有無や範囲を確認するための試掘調査を経て、最終年度には本発掘調査を行っている。調査面積は、総計で1,767㎡である。なお、3年にわたる調査の経過はそれぞれ本文中に記した。

2．試掘調査・本発掘調査の現場作業は平成13年度、14年度、16年度に実施し、整理・報告書刊行の作業はその後継続的に平成20年度まで実施した。尚、現場調査及び整理作業は、いずれも可児市教育委員会が直営で実施した。

3．発掘調査の体制は以下のとおりである。

教育長	渡邊　春光（平成13年度）　井戸　英彦（平成14～16年度）
教育部長	武藤　隆典
文化振興課長	長谷川　強（平成13年度）　藤田　禮三（平成14～16年度）
文化財係長	長瀬　治義
調査担当者	吉田　正人　松本　茂生
調査補助員	成尾　孝子　本田　博志　水野テツ子
作　業　員	伊佐治　誠　岩名　孝代　押井　正行　可児　定夫　北西　幸彦 香田　公夫　土田　晃司　水野　良雄

4．本編の編集･執筆、掲載写真の選択とレイアウト、遺構図面トレース及びレイアウトは松本茂生が行った。遺構図面の編集、遺物の整理は吉田正人、遺物に関する執筆（一部）は長瀬治義が担当した。また、遺物の整理及び実測、トレースは成尾孝子と本田博志が、遺物の撮影及びデータ作成、表の作成等を長江真和が担当している。

5．調査記録及び出土遺物は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）で保管している。

6．報告書に掲載されている地図及びそれに関連した図版に関しては、可児市長の承認を得て、同市所管の都市計画図を使用して得たものである。

目　　次

例　言
目　次

第１章　第１次調査
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　遺跡の立地と環境 …… 2
　第３節　遺構と遺物 …… 4
　第４節　まとめ …… 20

第２章　第２次調査
　第１節　調査の経緯 …… 21
　第２節　遺跡の立地と環境 …… 22
　第３節　遺構と遺物 …… 25
　第４節　まとめ …… 33

第３章　第３次調査
　第１節　調査の経緯 …… 34
　第２節　遺跡の立地と環境 …… 36
　第３節　遺構と遺物 …… 37
　第４節　まとめ …… 53

図版・写真図版 …… 54
報告書抄録 ……109

第１章　第１次調査

第１節　調査の経緯

１．試掘・確認調査の経緯と経過

柿田遺跡馬乗洞地点の発掘調査は、東海環状自動車道に接続する市道及び道の駅建設に伴うもので、北側に隣接する「柿田遺跡」に関して、（財）岐阜県文化財保護センターが先に行った調査でその全容が確定できなかったことから、建設予定地及びその周辺から関連した遺構が出土する可能性が高いと判断し、遺跡の有無やその範囲を確認するための試掘調査を行った。期間は平成13年10月1日から平成14年1月31日まで、約630㎡の面積について調査を実施した。

市道建設予定地について用地買収が終了した北側から順次行うこととし、遺跡の有無を確認しながら、調査対象となる範囲を決定するという方針を採った。

平成13年度実施の調査を第1次調査として、可児市柿田字月田地内の市道建設予定地に南北方向のトレンチ（試掘坑）を設定した。表土を重機（バックホー）による荒掘りの後、人力による精査を行っている。

道路予定地のほぼ中央部分に南北方向のトレンチ（幅2m× 長さ93m）を設定した。地山面まで掘り下げ、遺構や遺物の有無、土層の状況を確認した。調査地北側2/3は、丘陵地裾部分にあたり10cm程度の表土しかなく、中世の井戸跡と近世の暗渠（排水溝）が検出された。南側1/3については現況が水田であったことから、地表面から深さ1.1～1.5ｍまで掘り込んだところ、多数のピットが検出されたので、道路幅いっぱいまで調査範囲を拡張した。その結果、調査範囲全体で遺構が確認された。

発見された遺構は「柿田遺跡」の範囲内にあると推測されたので、今回調査を行った範囲の南側及び西側についても遺構の存在する範囲が広がっていると考えられることから、範囲以南の部分についても調査を行うことを決定した。

調査は、吉田正人が担当した。

関係法令等に基づく試掘・確認調査の諸手続きは以下のとおりである。

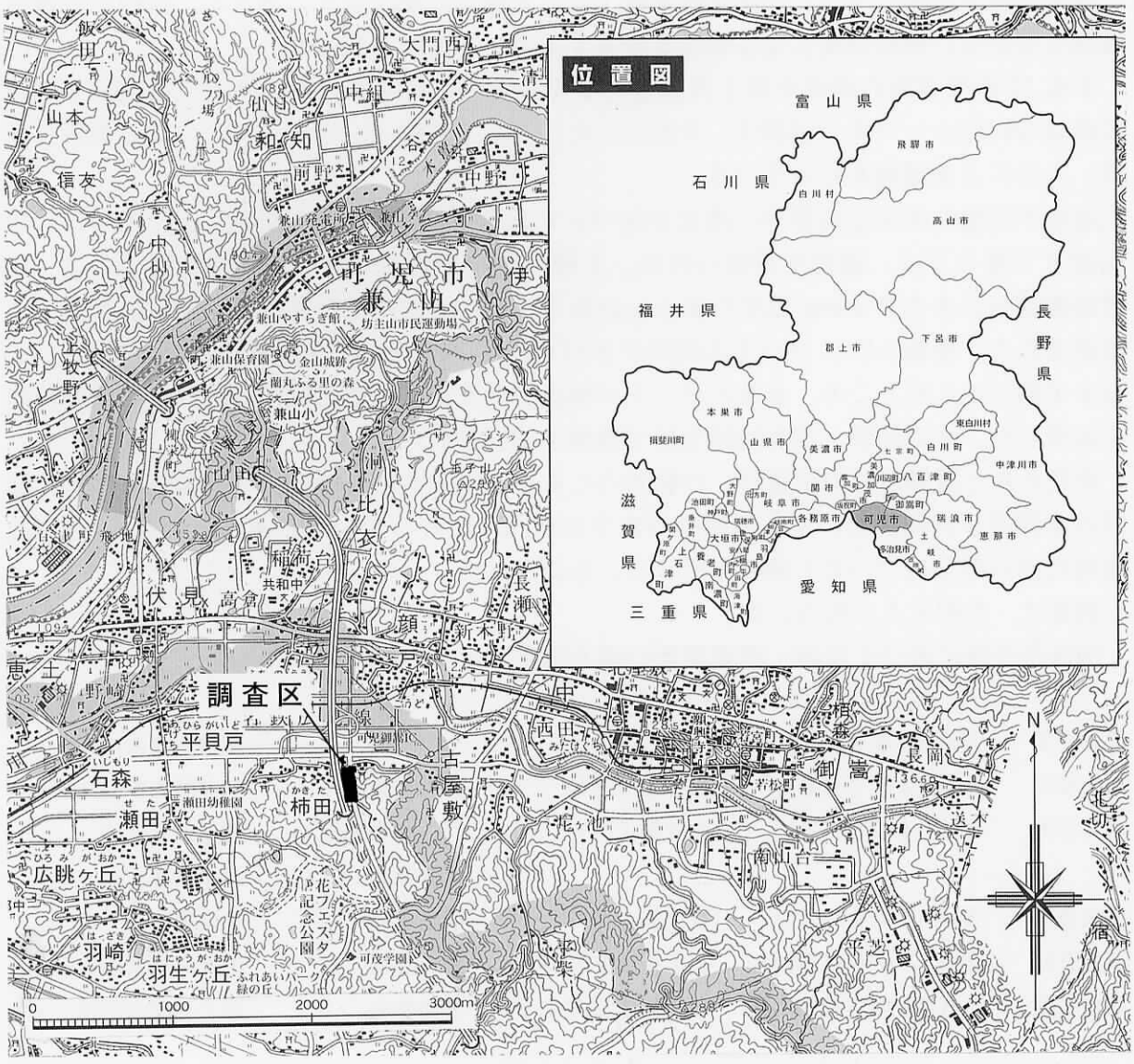
事業者発	平成13年5月11日		市教委宛	試掘調査の申請
市教委発	平成14年2月8日	教社第178号	県教委宛	発掘調査の終了報告
市教委発	平成14年2月8日	教社第179号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
			県教委宛	埋蔵物保管証
市教委発	平成14年2月8日	教社第180号	事業者宛	結果報告
市教委発	平成18年6月20日	教文振第67号の4	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成18年7月13日	社文第138号の10	市教委宛	出土品譲与通知

第2節　遺跡の立地と環境

1．立地と環境

可児市北東部の端に位置し、御嵩町に隣接している。北側を流れる可児川により形成された沖積平野と南側にある浅間丘陵地の麓に広がる扇状地上に存在する。沖積平野の北側には御嵩山地が連なり、南側の浅間丘陵地と挟まれるような形で、緩やかな勾配の平野が広がっている。

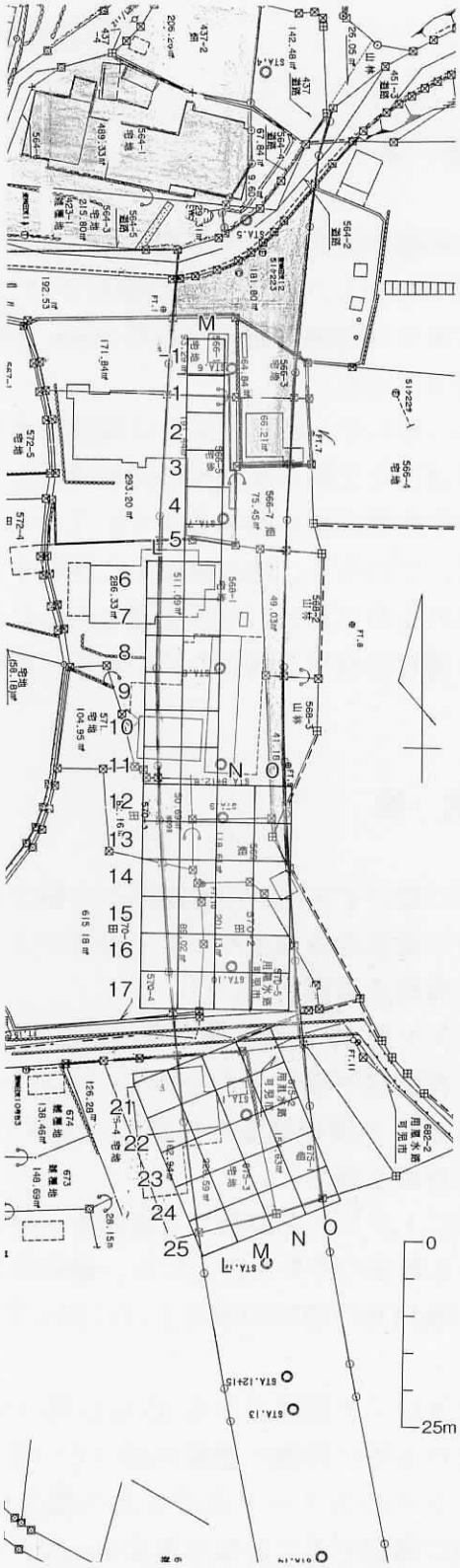
可児市から御嵩町にかけてのこの一帯は、古代において美濃国可児郡に属していたとされ、7世紀後半には行政区画として存在していたことが明らかになっている。「郡家」、「駅家」と呼ばれた郷が存在したことから、当時の行政拠点が置かれていた可能性が考えられる。現在の御嵩町字顔戸が郡家郷に比定されることから、東山道が近くを通っていたことが想定されている。



第1図　調査区位置図

調査区の北側の御嵩町内には平成９年に調査された「顔戸南遺跡」が存在し、古墳時代から中世にかけての集落跡、水田、道路状遺構（古代）が発見されている。さらに北側の可児川対岸には「金ヶ崎遺跡」が存在し、平成12年度の調査により、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などと並んで多くの墳丘墓が発見され、「顔戸南遺跡」に関連した墓域であったと考えられている。

調査区北西側では、平成11～13年にかけて東海環状自動車道可児御嵩インターチェンジ建設の際に行われた発掘調査で「柿田遺跡」が発見された。この遺跡からは集落跡、旧河道跡、水田等の遺構が検出され、縄文～近現代にかけて各時代の様相を確認することできる様々な遺物が出土している。また、これは北側に存在する「顔戸南遺跡」と一体の遺跡であると考えられ、特に弥生から古墳時代にかけての集落や水田の様子を知る上で非常に貴重な成果となった。南側には、「神崎山古墳」、「前山２号墳」、「杉ヶ洞古墳群」（いずれも古墳時代後期）等が存在し、古墳時代を中心に当時のこの地域の様子を窺い知ることができる様々な遺跡が確認されている。



第２図　平成13・14年度グリッド設定図

参考文献

財団法人　岐阜県文化財保護センター　『顔戸南遺跡』　2000

財団法人　岐阜県教育文化財団　『柿田遺跡』　2005

可児町教育委員会　『可児町神崎山古墳発掘調査報告書』1976

可児市　『可児市史』第１巻　通史編　考古・文化財　2005

第3節　遺構と遺物

1．層　序

対象範囲のほぼ中央部に幅２ｍ、長さ93ｍのトレンチを設定した。機械掘りと手作業を併用しながら、地山面まで掘り下げたところ、トレンチの北側約2/3は地山面が高い位置にあり、現況地表面から約10cm下げたところで地山に達した。堆積層は、表土のみの一層であった。

これに対して、南側約1/3は現況が水田となっており、南側の丘陵部が形成した谷の奥から運ばれた土砂が堆積する沖積地となっている。

そのため地山面に達するまでに1.1～1.5ｍの深さがあり、表土を含めて４層が堆積していた。このうち、地山面直上に堆積する暗又は黒灰色粘質土層（第５図④層）から、奈良時代のものと思われる須恵器を中心に、中世の陶片や着火用の木製品などが多数出土し、良好な遺物包含層が残存していることが確認された。

2．遺　構

市道の建設予定地区の北端部から幅２ｍのトレンチを南へ向かって掘り進めた。市道建設予定の範囲全体をカバーする必要があったが、最終的には全長約85ｍを掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。

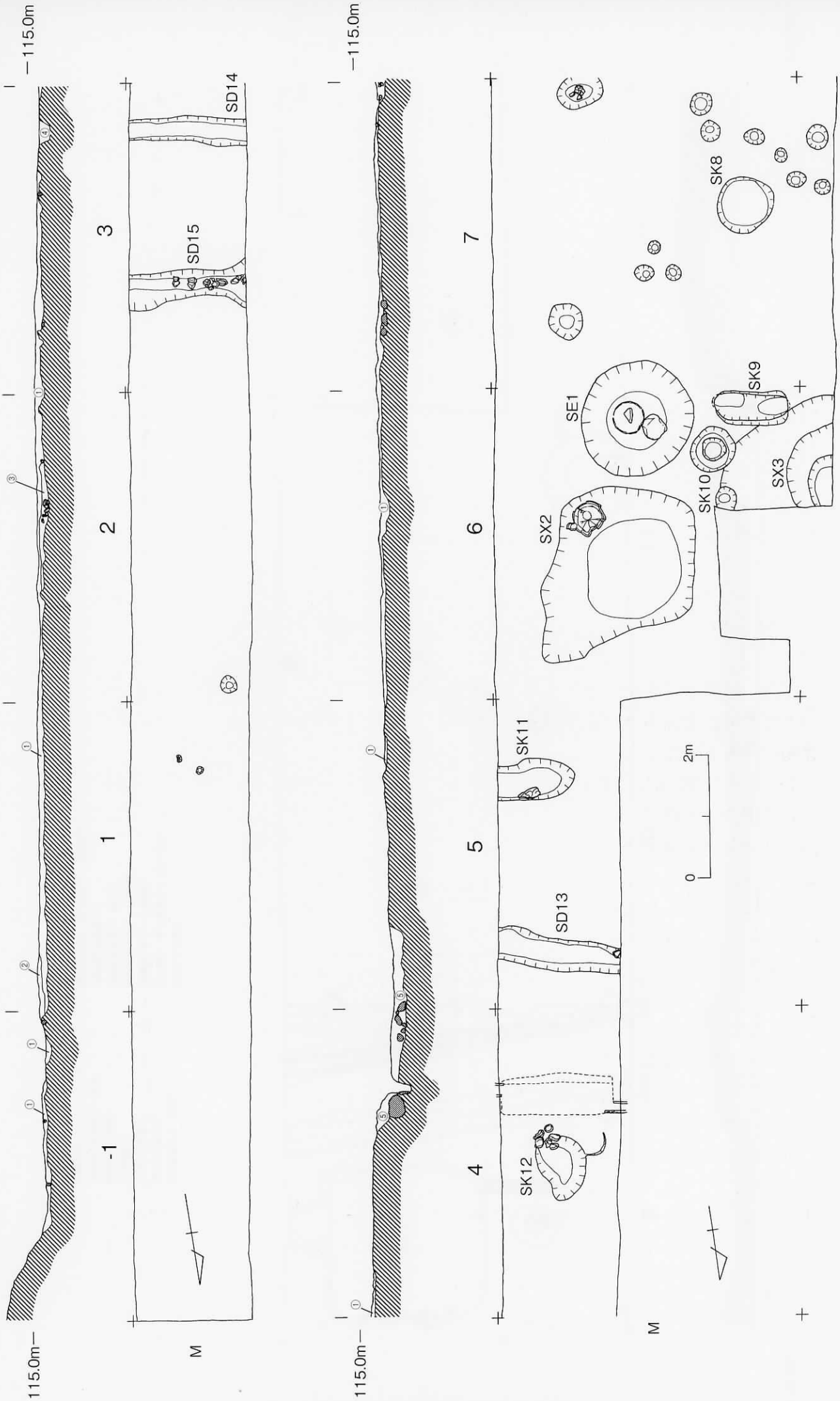
トレンチを30ｍほど掘り進んだところで、トレンチ内で検出された遺構が西側へ広がっている可能性が確認されたので、トレンチの開始点から25ｍより南側の部分については西へ３ｍほど調査範囲を拡張し、全体で５ｍ幅のトレンチ内部を遺構の残り具合を確認しながら掘り進めた。

最初にトレンチを掘削した範囲を「M」区とし、トレンチ開始地点から南へ５ｍごとに「1」から順番の番号を設定した。最終的に南北方向には「17」番までの区画が設定された。遺構の検出及び遺物の取り上げに関しては、この5×5ｍのグリットごとに行うこととした。

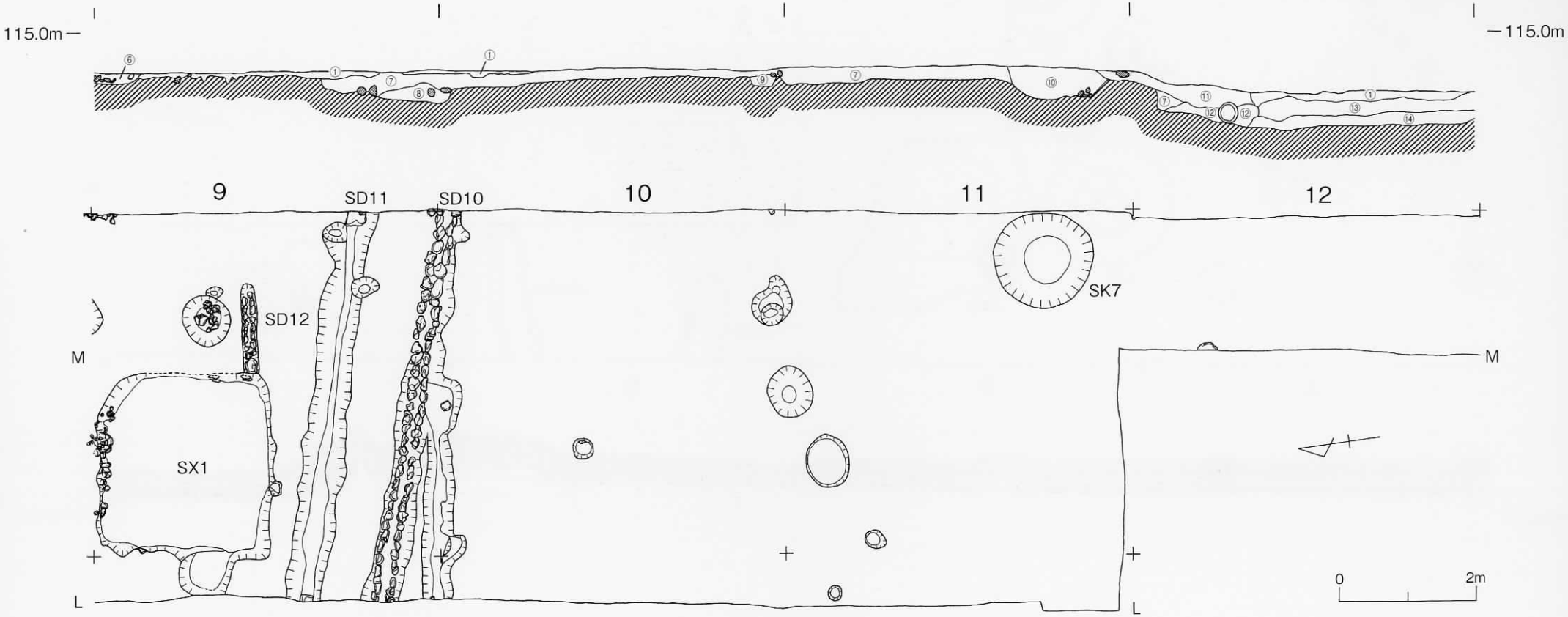
またトレンチ開始点から35ｍ以降（Ｍ７区以降）については、拡張後の５ｍ幅のトレンチよりも更に西側に遺構が続いているため、幅１ｍ分を更に拡張し、「L」区とした。

トレンチのスタート点から北へ幅２ｍ×長さ５ｍの範囲を追加で掘削したが、遺構、遺物共に確認することはできなかった。その部分についてはM区の「－１」とした。

調査対象範囲の南側１／３にあたるＭ12区以降については、地山面が大きく下がり、トレンチ内からピット及び土坑（ＳＫ）、溝（ＳＤ）が集中的に検出されたので、トレンチを拡張し、市道建設予定の幅17ｍの範囲全体を掘り下げて、遺構の残存状況を確認した。M区より西については引き続き「L」区とし、東側へと拡張した部分に関しては、５ｍごとに「N」・「O」区とした。（第２図）



第3図　平成13年度調査区平面及び土層図（1）



①黒色粘質土（表土）
②灰褐色粘質土
③黄土色粘質土
④淡褐色土
⑤黒色土（撹乱）
⑥暗黄土色砂質土（撹乱）
⑦褐色土
⑧黄土色砂質土
⑨淡褐色・黄土色混合土（砂っぽい）
⑩暗黄土色土（やや粘質）
⑪黄土色砂質土　小礫含む
⑫暗灰色粘質土　炭入る
⑬淡黄土色粘質土
⑭灰色粘質土（砂っぽい）　鉄分含む

第４図　平成１３年度調査区平面及び土層図（２）

調査区内の遺構の残存状況は、調査範囲の南北で大きく様相が異なる結果となった。トレンチ開始点からＭ11区までの北側2/3については、比較的新しい時代の遺構が検出された。多くはＳＫとＳＤで、ピットは比較的少ない。遺構の性格が明確では無いものも含め特徴的なものを以下に述べる。

ＳＥ１（第３図・第６図・第７図）

Ｍ６・７区から検出された直径1.8ｍの井戸跡である。内部を掘削すると、検出面より20cm掘り下げたところから14世紀前半～15世紀前半頃の山茶碗の小皿２点（遺物番号101・102）が出土した。さらに下へ掘り下げると70cmほど下がった部分から、井戸の残骸である木製の曲物が出土した。曲物の周辺には固定するための石が残っており、井戸の設置時に埋設されたと考えられる。（井戸の設置時の状況を確認することができた。）

最終的に曲物内部及び周囲の埋土（石も含む）を除去した。埋土は粘土状で水分を多く含む状態であった。残された曲物は非常に脆い状態で、取り上げた後、すぐに水につけて保管することにした。なお、掘削時に曲物を計測したところ、直径50cm、高さ40cmであった。また、ＳＥ１自体は深さ1.2ｍを測る遺構であった。（第７図参照）

ＳＸ２・ＳＸ３（第３図・第６図）

ＳＥ１周辺からは方形の遺構ＳＸ２とＳＸ３が検出された。２つのＳＸは一辺の長さ約２ｍで、その形状から周溝墓のようにもみえるが、埋葬に関連した施設は確認されず、また遺物も乏しい状態だったので遺構の性格は明確ではない。大きな土坑（ＳＫ）である可能性もある。

ＳＸ１（第４図）

Ｍ８・９区からはトレンチ内の半分を占める規模の遺構ＳＸ１が検出されている。これもＳＸ２・３同様に平面的な形状から周溝墓なのではないかと推測されるが、遺構の性格を明確にできるような要素は確認されなかった。ＳＸ１は一辺2.4ｍのほぼ正方形で、その東側にＳＤ12が東西方向に延びており、ＳＸ１がこれを切るような位置関係にある。なお、このＳＤ12は長さ1.2ｍ、幅20cmの比較的小型の溝ではあるが、内部に石組が残っていることから、暗渠であった可能性も考えられる。

ＳＤ10・11（第４図・第10図・第11図）

上記以外の遺構としては、溝状遺構（ＳＤ）、土坑（ＳＫ）、ピット数点が検出されたが、その中でも大きな遺構としてはＭ８・９区から検出されたＳＤ10・11で、暗渠と思われる。

北側に位置するＳＤ11は、幅60cmの溝内部に小石や礫を組み合わせた石組が造られており、石組内から擂鉢の破片１点が出土している。南側のＳＤ10も大きさ及び構造面でもほぼＳＤ11と同じであるが、途中から溝が二又に分かれている（計３本の水路がある）部分が異なる。また石組内からは擂鉢、徳利、茶碗等の陶器片が全体に散らばるように出土し、ＳＤ11の状況とは対照的である。ほぼ同時代の遺物が出土している点から、この２つの遺構は、同時期に造られたものと考えられ、時期は近世（江戸時代）と考えられる。

この暗渠に関しては、試掘調査を開始したころから確認され、その後幅５ｍまで拡張した際も、その拡張幅全体にわたって検出された。調査対象範囲内を東西方向に横切る形で設置されていることから、周辺の未発掘部分も含めて遺構全体が残存していると思われる。

Ｍ10区より南側の範囲については、数点のピットとＳＫ７が検出された。ＳＫ７はＳＤ10・11と同じ地山上にあり、それらと同じく近世の遺構と考えられる。（第９図）

Ｍ12区以降はそれまでの部分と大きく様相が異なる。現況が水田耕作地であり、丘陵地の谷奥から流れ込んだ土砂が堆積する地形であることから、地山の位置が低い。

Ｍ13区では少し特殊な状況を検出した。サバ土を用いた整地面が地山より上に造られており、過去に地形を改変する作業が行われたと考えられる。遺物については、整地面上から白瓷、山茶碗の破片が出土しているが、造成が行われた時代は特定できなかった。

Ｍ14区以南については1.1～1.5ｍほど掘り下げた結果、地山面から多数のピット、ＳＤ、ＳＫが検出された。このうち一部のピットが掘立柱建物（ＳＨ）の柱跡であることが確認された。

ＳＤ（第５図）

区画範囲内に計９ヶ所で確認された。特に南端部（16・17区）のＳＤ６及びＳＤ８は調査区内を東西に渡って横切るような規模の大きさがあった。ただし、浅いくぼみのような状態であり、自然流路跡の一部である可能性も考えられる。

ＳＤ１～５は、検出された範囲が調査区の西側に集中し、かつ互いに切り合うような位置関係にあることから、他の遺構と関連して人工的に配置された溝である可能性も考えられる。中でもＳＤ１は長さ６ｍ、幅80cmと大型で、ＬＭ15区内を東西方向に横切っている。このＳＤ１に直交するのがＳＤ５で南北方向に延びている。ＳＤ３はＳＤ５のさらに北に位置し、切り合い関係にある。ＳＤ４は、ＬＭ15～17区にかけて調査区の西端を南北方向に延びているが、途中でＳＤ１などの他の遺構に切られている。（なお、M13区で検出されたサバ盛土は除去し、地山面まで掘り込んでいる。）

ＳＨ１（第５図）

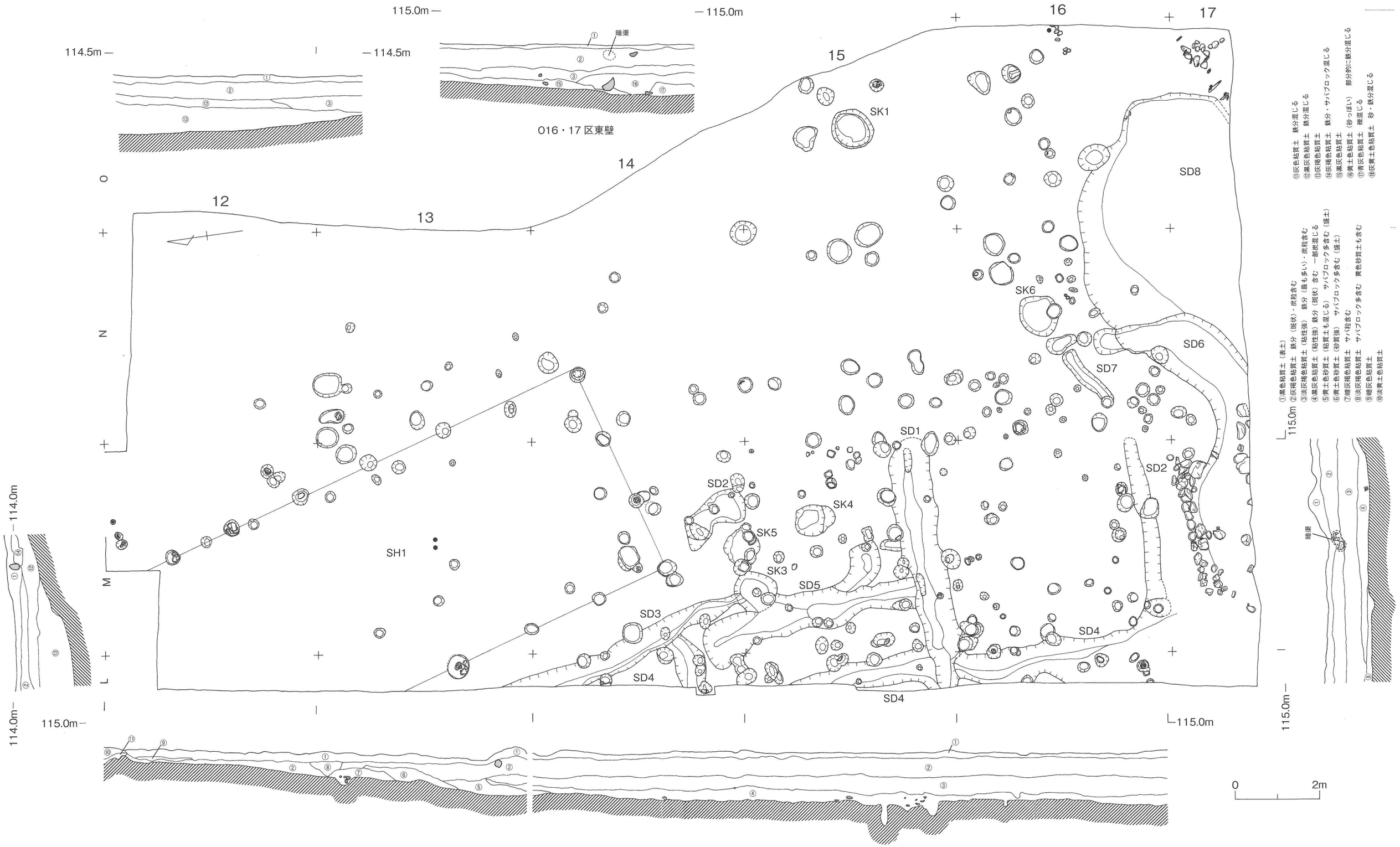
ＬＭ12～15区に点在して検出されたピット群について、柱穴として掘られたと思われるものがいくつか存在した。その中でも２点は実際にピット内部から柱痕を検出している。検出作業後、ピット内を掘削して柱痕が残存していたものを中心に、その位置関係を平面的に観察したところ、直径20～40cmのピットが約1.8ｍ間隔で方形を成して並んでいることがわかった。このことから、一連のピットの並びは掘立柱建物跡（ＳＨ1）であると判断した。

ＳＨ１は北西―南東を軸とする長方形を呈し、大きさは長辺が約11ｍ（柱穴７個分）、短辺５ｍ（柱穴４個分）。少なくとも６×３間の建物があったと考えられるが、今回の調査で検出された範囲は一部であり、調査区外に続いていることから、その全容を把握することはできなかった。

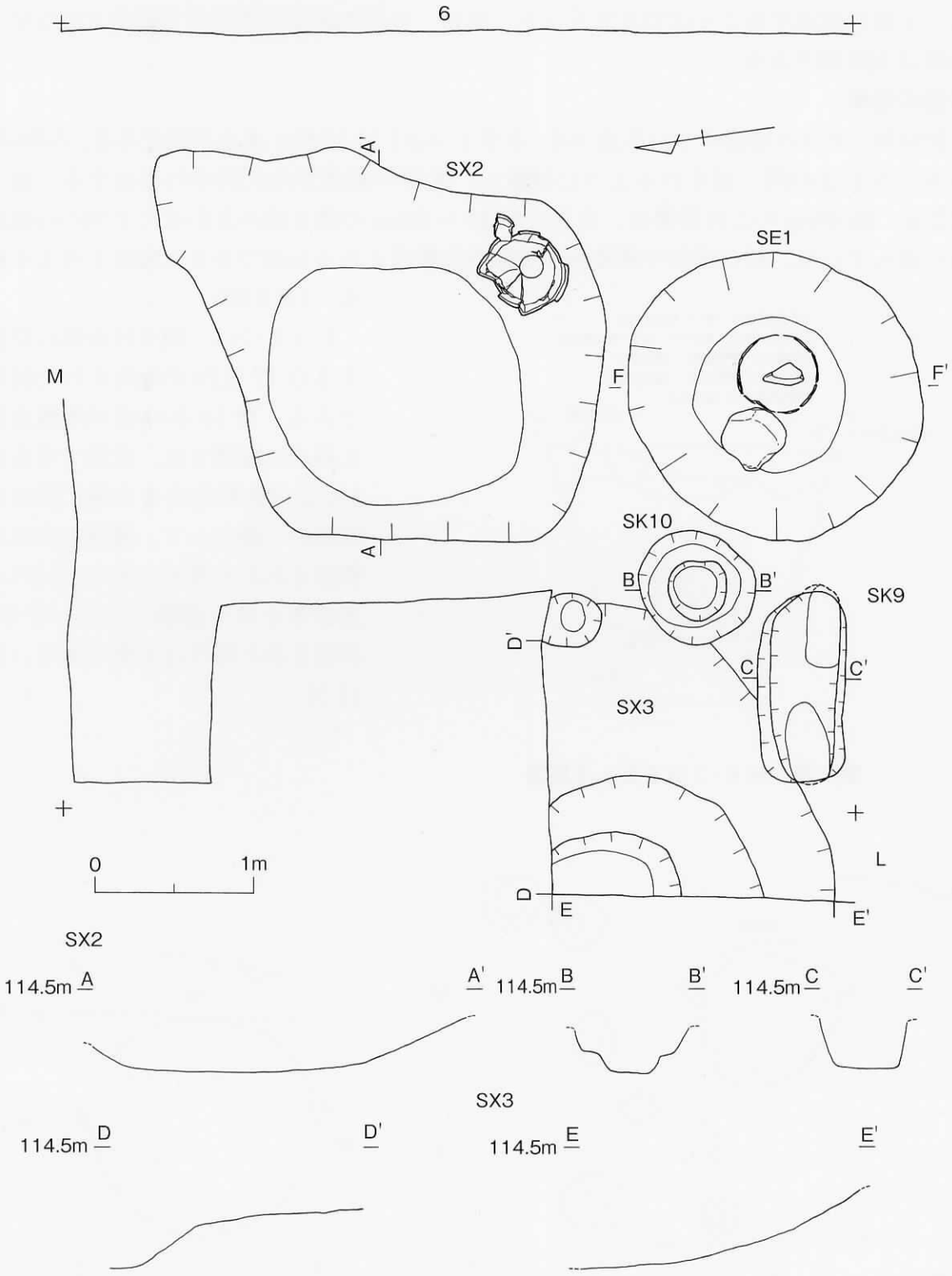
またＳＨ１が存在する場所の南側には、ＳＤ１～５を中心にいくつもの遺構が存在する範囲があり、両者が関連した遺構である可能性は高い。

ＳＫ（第５図）

ＬＭ12～17区の範囲内の８ヶ所で検出された。平面形態は円形（一部は楕円形）を呈しているが、その性格について明確なものは無かった。



第５図　平成 13 年度調査区平面及び土層図（3）



第６図　ＬＭ６区内遺構実測図

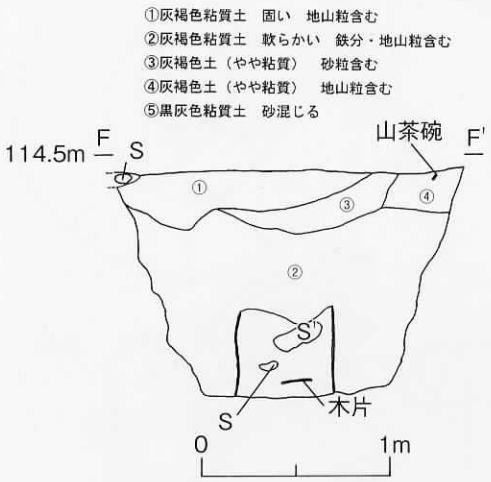
ピット

ピットに関しては、直径も大小様々で、互いに切りあっているものや内部に柱の一部が残存するものなど状況は一様では無い。ＳＨ１以外に建物跡を形成すると明確に考えられるピット群を確認することはできなかった。なお、今回の調査範囲全体で検出されたピットの数は286個である。

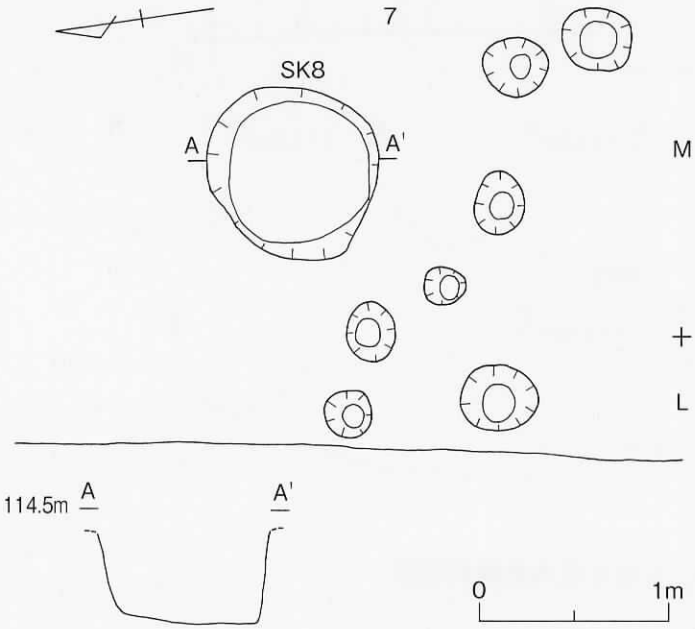
その他の遺構

上記以外に２つの遺構について述べる。まず１つはＬＭ17区にある石列である。石列は、ＳＤ６とＳＤ２の間に挟まれるように位置し、北東―南西方向に斜めに存在する。長さ約3.2 m、幅40cmのこの遺構は、大きさが10～20cmの礫を組み合わせた２列の石組が平行に並んでいる。石の配置や構造から暗渠内に敷設される石組である可能性が考えられる。(第５図)

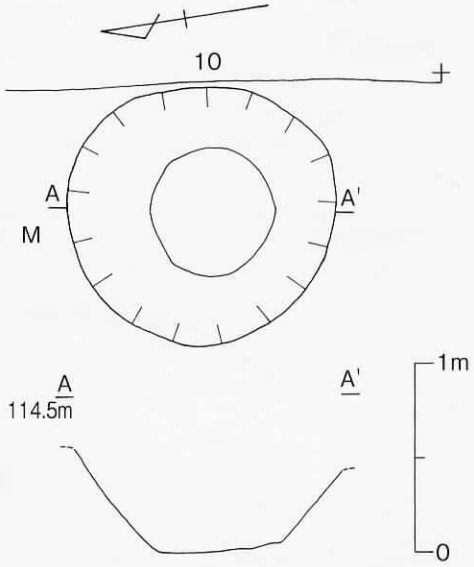
もう１つは、調査区南端に位置するＯ17区内で検出された杭列である。計10本の杭が南西方向に斜めに配置され、近接するＳＤ８などの比較的大きな溝に関わる施設の一部として、護岸のために敷設されたと考えられる。ただし、遺物等を伴う遺構ではないため、設置された時代は不明である。(第12図)



第７図　Ｍ６・７区ＳＥ１土層図



第８図　ＬＭ７区内遺構実測図



第９図　Ｍ10区ＳＫ７実測図

３．遺　物

遺物は、北側２／３と南側１／３で出土状況や時代、数量などが大きく異なる。

層位的には、北側が地山直上ないしは遺構内部であるのに対して、南側では堆積した２つの層及び地山面、地山より検出された遺構内部であった。遺物の出土状況は、そのほとんどが破片で、器種を特定できないものも多い。また洗浄後の整理作業の中で、接合後器種を確認できるものも含め、その一部を図化・掲載した。それでは以下に詳細を述べる。(表1)

土師器（遺物番号１～５）

いずれも南側の拡張区内で出土している。１～３は甕（２は壺の可能性もあり）で、いずれも遺構に関連するもので、時期は６世紀後半から７世紀である。４は何らかの土器の脚のような形状であるが、本来の形は不明である。５は土錘でほぼ完形であった。４・５共に時期は不明である。

須恵器（遺物番号６～41）

今回の調査で最も多くの量が出土しているのが須恵器片である。前提としてそのほとんどか破片であり、器種を特定できるものはその一部である。最も多くの遺物が出土しているのが地山直上の④層であり、区画に関しても南側（13～17区）からのものが多い。須恵器だけでも出土した遺物の数は数千点に及ぶが、遺構に関連したものはその一部である。報告書に掲載した遺物は、坏身（6～18）、坏蓋（19～24）、高坏（25）、平瓶（26）、甕（35・36）、壺（33・34）、長頸瓶（ミニチュアも含む：27～29）、盤（30～32）などがある。珍しいものとしては、円面硯（37）、風字硯（38）などがあった。

時期はいずれも８世紀前半から９世紀後半にかけての遺物がほとんどである。明確に遺構に伴うものは無いが、区域としては13区以南から出土し、ＳＤやＳＫに関連している可能性がある。

須恵器：墨書（遺物番号42～91）

多くが坏身（42～67）や坏蓋（68～81）であり、その底部外面や内部に墨で何らかの文字が書かれている。その他の器種では埦の底部外面及び内面（82、「高屋」、「易」に似た文字）、盤の底部外面（83～85、いずれも「垣田」。）、高坏の脚部（87、「酒」のような文字）などがあった。

坏身に関しては底部外面に墨で文字が書かれたものが多いが、文字自体を判別できるものはその一部となる。地域的な意味と関連して「垣田」（「垣」、「田」といった単独の文字が残ったものも含む。）と書かれた須恵器片が一定数出土している。

坏蓋に関してはその内面に文字が書かれ、坏身同様に不明なものも多く、一定の傾向はみられない。ただし、坏身と共通する部分として「垣田」と書かれたものがあり、組み合わせて使われていたと考えられる。また墨書だけではなく、ヘラによる線や記号を伴うものもみられる。

現在は「柿田」と表記される地名であるが、少なくとも古代には同じ読みをもつ地名が存在したとわかり、また地名を記した土器が出土したということは、「柿田遺跡」での出土遺物の状況と対比して、個人の生活空間で雑器として使われたというよりは、地域のコミュニティーの共有物ないしは公的な機関で特定の目的で利用されていた特別な土器と考

えられる。

このような事実を基にして、調査区内に残されていた建物跡の性格を分析・推測することが可能であり、非常に重要な出土品だと考えられる。

内部に「美濃」と刻印されたもの（41）、外面に「府」とヘラ書きされたもの（40）などが存在する。

白瓷（遺物番号 92 ～ 96）

遺物量としては比較的少なく、山茶碗同様に③層より下層に含まれるが、地山面に近づくほどその出土数は少なくなる。器種は碗と皿で、時期は 10 世紀である。掲載した遺物はいずれも 13 区以南から出土し、④層にそのほとんどが含まれており、遺構に伴うものは無い。

山茶碗（遺物番号 97 ～ 106）

報告書に掲載した遺物は碗、皿（小皿）の 2 種類であるが、実際に出土した遺物も概ねこの 2 種類となる。主に④層及びその上層である③層内から出土し、調査区の全域にわたる。103 ～ 106 は墨書がみられる。

98 は小皿で、ＳＤ 10 内から出た最も古い時代の遺物で、12 世紀末から 13 世紀初頭と思われるが、遺構の性格上流れ込みと考えられる。

Ｍ 10 区以降で出土しているものは小皿（99・100）と碗（103 ～ 105）で、自然釉がかかり、時期的には 13 世紀前半から 15 世紀にわたる。103 ～ 105 の碗はいずれも墨書であり、底部外面に文字が書かれていることはわかるが、文字そのものを特定することはできなかった。

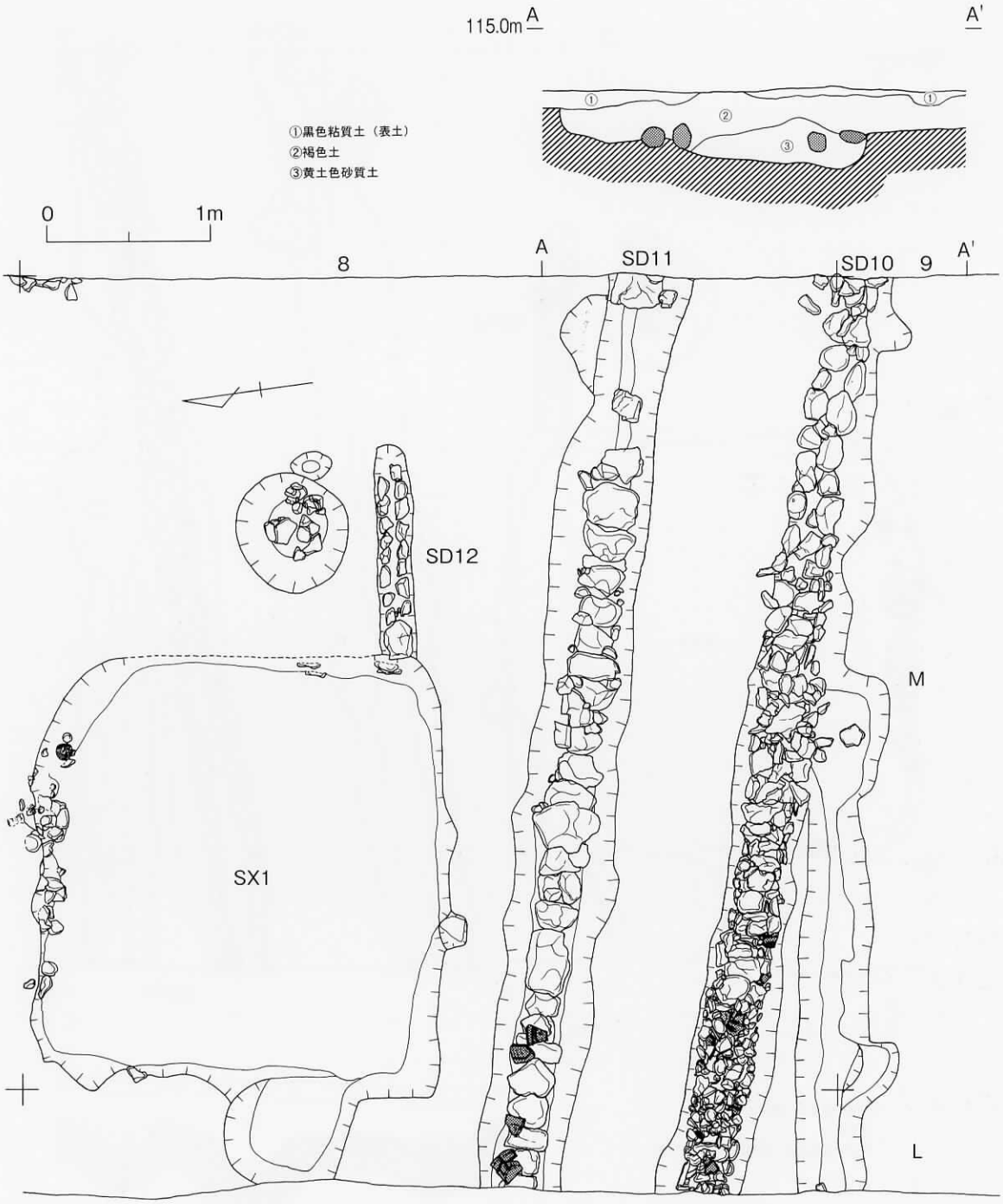
101・102・106 はＳＥ1、101・102 はＳＥの上層から出土し、時期は 14 世紀前半。106 はそれより下層（曲物が残存していた粘土質層）から出土しているが時期は不明である。器種はいずれも皿で、106 は底部外面に文字（「Ａ」のような文字、釈読不明。）が書かれている。

近世陶器（遺物番号 107 ～ 122）

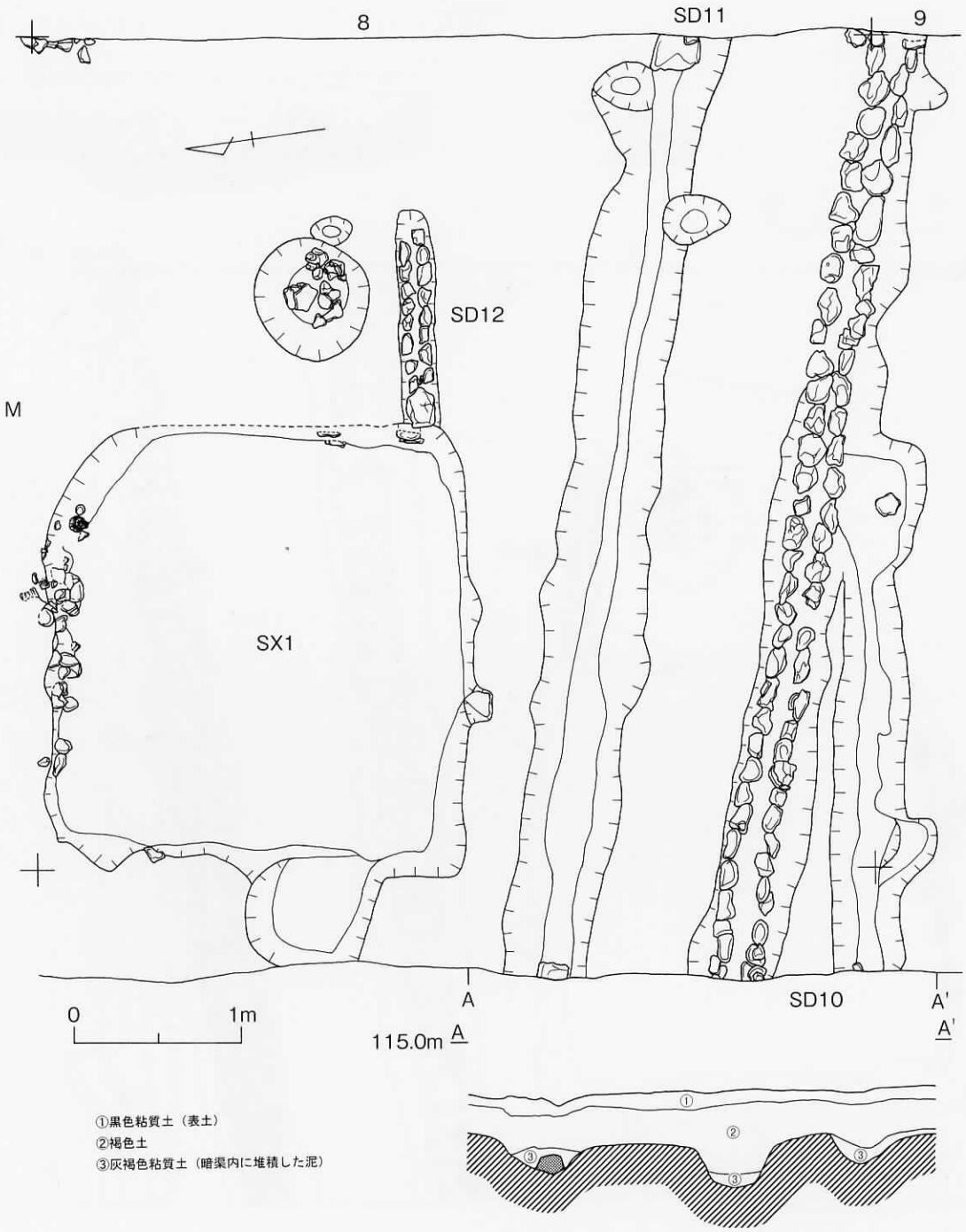
時代的には江戸時代（18 世紀以降）のものがほとんどで、報告書に掲載したものは大半がＳＤ 10・11 の内部から出土している。調査区全体からも表土に近い層から新しい時代の遺物が出土している。

ＳＤ 10・11 の内部から出た陶器片については、暗渠内の石組に混じって出土していることもあり、遺構の年代を考える上で重要である。出土遺物の器種は様々であり、主なものは碗、皿（灯明皿など）、徳利、擂鉢、有耳壺、土瓶などの生活雑器である。

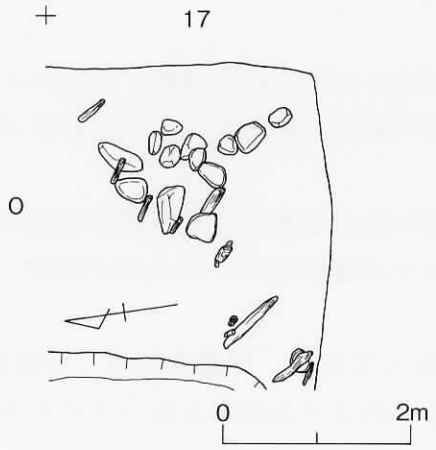
比較的古い時代にあたる 16 世紀末の灰釉折縁皿（113）はＬＭ 13 区のサバ盛土の上層で、これは流れ込みである可能性が高い。



第10図　暗渠排水溝（ＳＤ10・11）及び周辺遺構実測図（1）



第11図　暗渠排水溝（ＳＤ 10・11）及び周辺遺構実測図（2）



第12図　O17区杭列実測図

木製品

土器以外の遺物としては木製品があげられるが、実際に出土したものは火付け棒の破片、火種を移すための木片（燃えかす）、柱穴内からは柱痕が何ヶ所かから出土している。出土した柱痕の直径や材質等から考えて、この場所に建設されていた建物の規模を分類することができる。また、こうした具体的な用途や性格を解明できるもの以外にも、元の形状を類推することができない木片も含まれており、一定の分量が出土している。

石器（第33図の1～3、表4・5）

スクレイパー1点と磨製石刀1点、磨製石剣1点、砥石片2点、敲石1点が出土した。

いずれも③～④層の包含層から出土しており、流れ込みであり、縄文時代に属するものとみられる。

1は粘板岩製とみられる磨製石刀で、裂けるように割れるなど欠損が著しいものの、整形や研磨（表面が風化により保存不良部分有り）までされた成品と思われる。2は濃飛流紋岩製とみられ、石冠ではなく磨製石剣であろう。切先部分のみの破片であるが、やはり整形や研磨はしっかりしており成品である。横断面は凸レンズ形を呈する。3は砂岩製で、石斧というよりもスクレイパーであろう。刃部は部分的に研磨され両刃となっている。

参考文献

可児市教育委員会　『川合遺跡群』　1994
可児市　『可児市史』第1巻　通史編　考古・文化財　2005
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『廻間遺跡』　1990
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『松河戸遺跡』　1994
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『志賀公園遺跡』　2001
赤塚次郎・早野浩二「松河戸・宇田様式の再編」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　2001
財団法人岐阜県文化財保護センター　『顔戸南遺跡』　2000
財団法人岐阜県教育文化財団　『柿田遺跡』　2005

第4節　ま　と　め

平成13年度以前に岐阜県文化財保護センターで実施された「柿田遺跡」の結果から想定された可児市柿田地区から御嵩町一帯に広がる過去の痕跡に関して、その広がりの全容は未だ確認されていない。

住居跡、水田跡、自然流路跡、護岸遺構等の平地面に広がる様々な遺構群や南側の丘陵地の裾部分に存在する何ヶ所かの古墳などから、かなり広範囲で多くの人間が活動していたことが窺われる。

柿田地区は可児川を中心とした広大な水田地区となっており、発掘された「柿田遺跡」の状況から推測することで、この地区がいつごろからそのような様相となったのかを類推することが可能である。

平成13年度実施した試掘調査によって、現況地表面より約1.5 m下から、奈良から平安時代にかけての遺構が検出され、それに伴い多くの須恵器・白瓷・山茶碗の破片が出土した。

多数の柱穴が存在することからも、この地区に多くの建物があったことが想定されるが、それが単なる一般的な住居跡というより、公の機関が使用する性格を有する大型の建物である可能性も考えられる。

現時点で確認することができた事実は、調査範囲が限定的であることから、ごく僅かであるとも言える。

今回の「柿田遺跡」に関連した区域の発掘調査で得られた結果からは、県が実施した調査に関連したような縄文・弥生時代へと遡るような遺構・遺物はみられなかったが、少なくとも奈良時代以降の人間活動の痕跡を確認できた。このことからも柿田地区の古代以前の状況を把握する上で、今後も計画的な調査を実施していく必要があると考えられる。

第2章　第2次調査

第１節　調査の経緯

１．試掘・確認調査の経緯と経過

調査地は、可児市柿田字前山675番地1、同番3である。平成13年度同様、市道の建設及び今後予想される周辺の開発に備えるために試掘･確認調査を実施する方針を採った。

平成14年度試掘調査（第2次調査）は、前年実施した範囲（第1次調査）の南側を拡張する形で行った。第1次調査と同様に市道建設予定地内に幅2ｍのトレンチを南北方向に設定し、地山面まで掘り下げることで、遺構や遺物の有無及び土層の状態を確認した。

実際に掘削を開始すると宅地用の造成土が約1.2ｍあることが判明した。このまま2ｍ幅を維持しながら、トレンチ内で精査の作業を続行することは危険を伴うこと、前年同様に下層部に近づくほど多量の地下水が湧き出るなど、調査を実施する上で円滑な作業を進めることが困難になることが予想されたので、安全面及び作業効率を鑑みて、調査範囲を拡張し、予定地全体を掘削する方法をとることになった。

結果として、市道予定地（幅約17ｍ）全体をトレンチとして設定し直し、長さ約20ｍの範囲全体を重機と人力で掘削した。造成土（深さ1.2ｍの造成土）を剥した後、更に1ｍほど掘削し、現況地表面から約2.5ｍで地山に達した。造成土を取り除いた面から地山まで、人力による精査を行った結果、多量の須恵器片が出土し、柱穴、自然流路跡、石組護岸等の遺構も検出した。

期間は平成14年10月14日から平成15年1月24日まで､約360㎡の調査を実施した。

調査は、吉田正人が担当した。

関係法令等に基づく試掘・確認調査の諸手続きは以下のとおりである。

市教委発	平成15年1月29日	教文振第229号	県教委宛	発掘調査終了の報告
市教委発	平成15年1月29日	教文振第232号	事業者宛	発掘調査の終了報告
市教委発	平成15年1月29日	教文振第230号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
市教委発	平成15年1月29日	教文振第231号	県教委宛	埋蔵物保管証
県教委発	平成15年2月17日	社文第38号の37	市教委宛	文化財認定（通知）
市教委発	平成18年6月20日	教文振第67号の6	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成18年7月13日	社文第138号の12	市教委宛	出土品譲与通知

第２節　遺跡の立地と環境

１．立地と環境

可児市北東部の端に位置し、御嵩町に隣接している。北側を流れる可児川により形成された沖積平野と南側にある浅間丘陵地の麓に広がる扇状地上に存在する。沖積平野の北側には御嵩山地が連なり、南側の浅間丘陵地と挟まれるような形で、緩やかな勾配の平野が広がっている。

平成 14 年度の調査を実施した区域は、前年実施した試掘・確認調査で対象とした区画の南側にあたる。この区画は可児川左岸の馬乗洞といわれる谷部入り口付近で、沖積地部分に立地し、調査前の現況は水田を埋め立てた宅地であった。

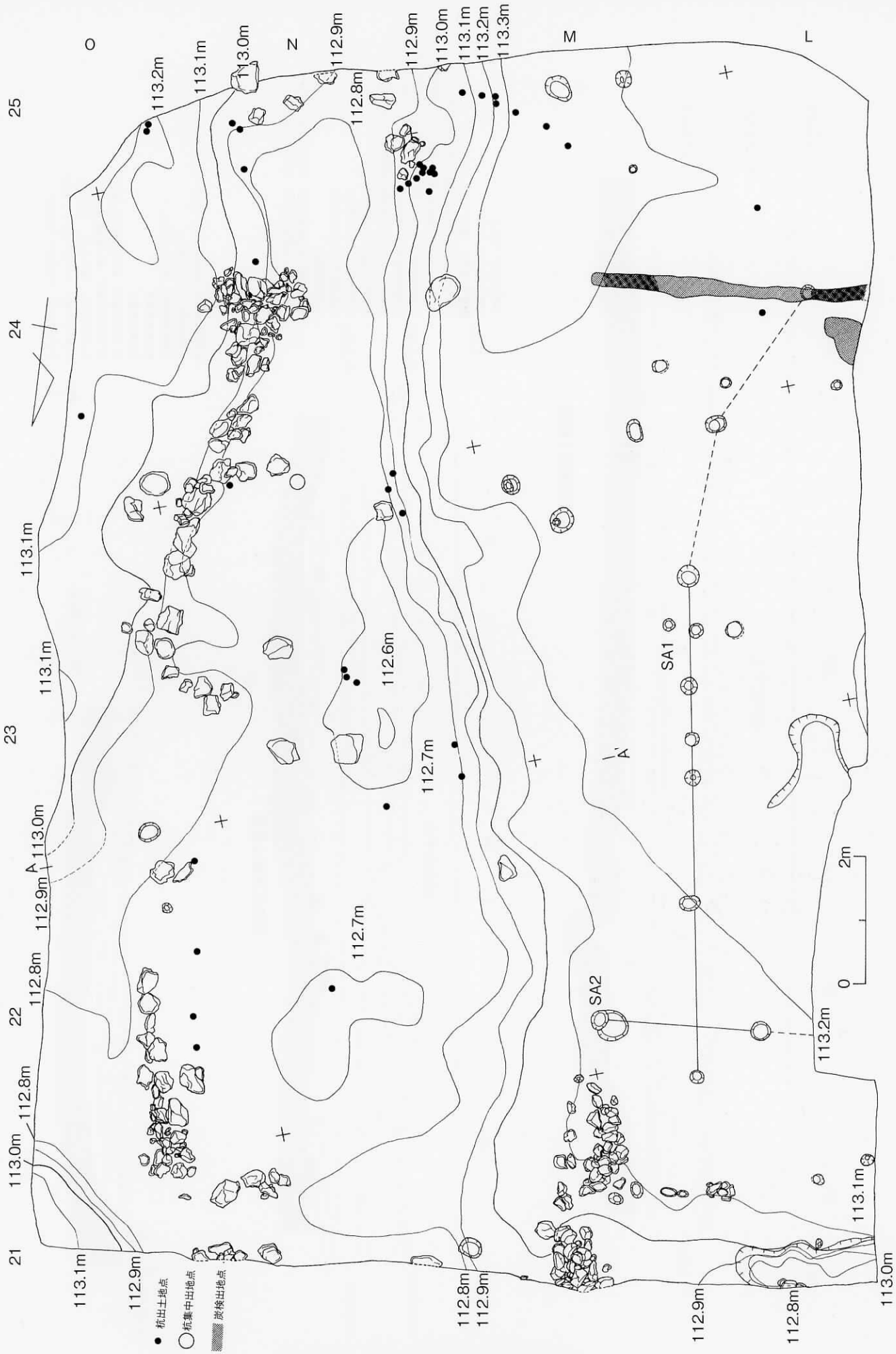
本年度対象とした市道建設予定地の範囲のさらに南側の丘陵地裾には、杉ヶ洞 3 号墳（6 世紀末～ 7 世紀初頭：出土した須恵器より）が存在する。直径約 16 m の円墳で、周濠幅約 2 m がめぐる疑似両袖式横穴式石室（全長 6.2 m、最大幅 2.2 m、盗掘、天井石なし、玄室･羨道、閉塞石残存）が現存しており、玄室入り口から周溝にかけて長さ 4.1 m、幅 0.6 m の排水溝が存在した。

石室内からは金環・馬具（しおで座金具）・刀子・鉄鏃、土師器・須恵器、管玉・臼玉・ガラス小玉などが出土し、確認された遺物の年代が若干異なることから、追葬が行われた可能性が考えられる。（出土品が 2 時期に分かれる。）

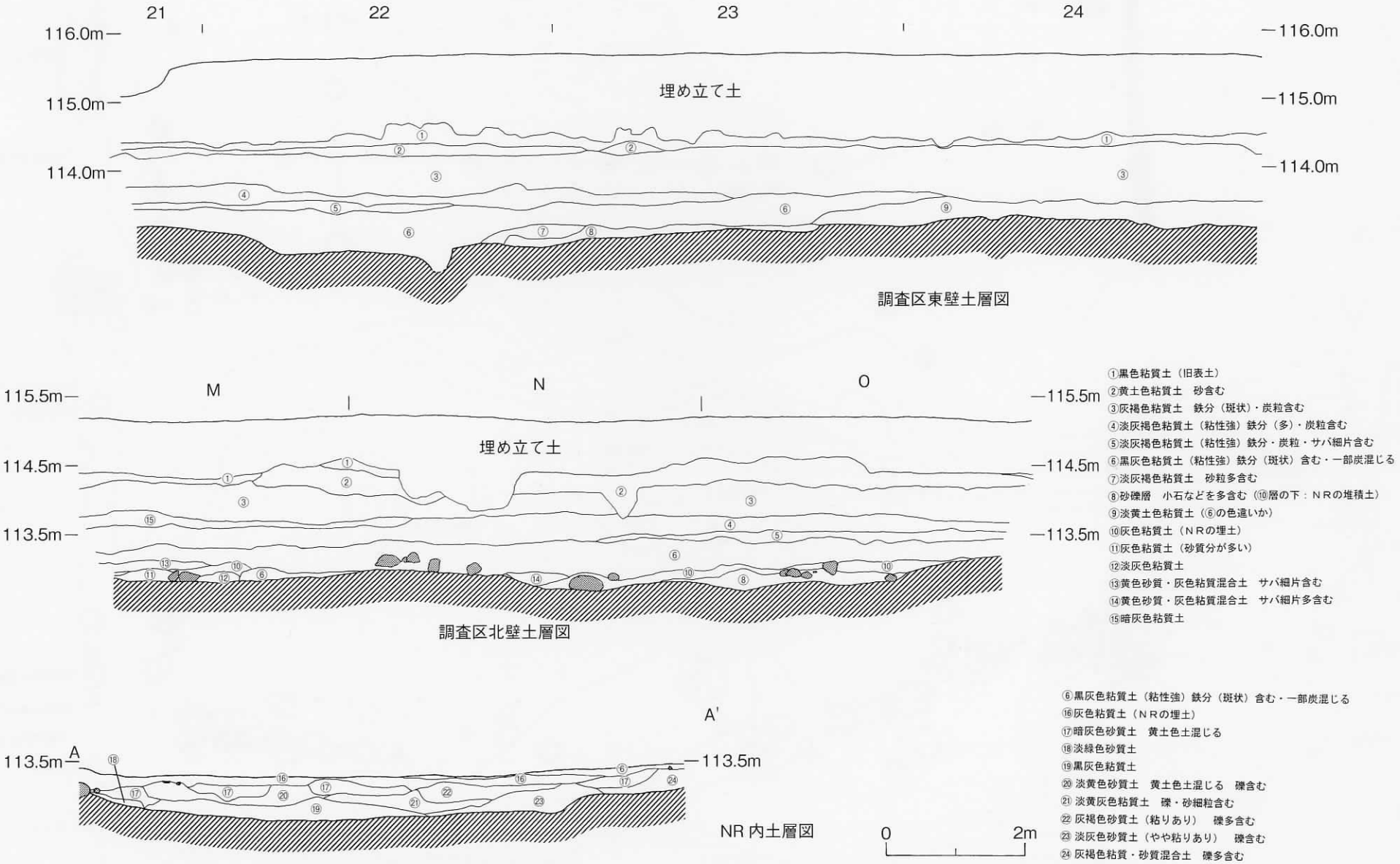
また、馬具が出土していることから、被葬者はこの地域の有力者であった可能性が考えられる。

杉ヶ洞 3 号墳の西側には、竪穴住居跡 2 軒が検出されているが、遺物等が出土していないことから、年代や状況等は明確になっていない。

さらに南側には杉ヶ洞 5 号墳が存在し、調査の結果、7 世紀前半の円墳で、直径約 18 m、無袖式横穴式石室（全長 5.4 m、最大幅 1.6 m、盗掘、天井石なし）が現存し、石室内からは金環（1 個）・刀子・鉄鏃などが出土している。



第 13 図　平成 14 年度調査区平面図



第14図　平成14年度調査区土層図

第３節　遺構と遺物

１．層　序

平成 13 年度試掘・確認調査（第１次調査）を実施した範囲の南側に当たるため、現況地表面から 1.2 ～ 1.5 m下まで掘り下げる必要があるとの認識で作業を開始したが、実際には宅地造成に伴う造成土が 1.5 mほど存在し、それを重機で取り除く必要があった。（この埋土内部から遺物等は発見されなかった。）

その後、地山面に到達するまで約１ mにわたって４層に及ぶ堆積層がみられた。上部から人力で層ごとに掘削を進めると、地山直上の暗又は黒灰色粘質土（⑥層）から須恵器、白瓷を中心とした土器片が多量に出土した。これは前年の調査で確認された遺物包含層（第５図④層）と同様の層と思われる。また⑥層の上にあった③層からは山茶碗、施釉陶器の破片など、比較的新しい時代の土器も出ている。

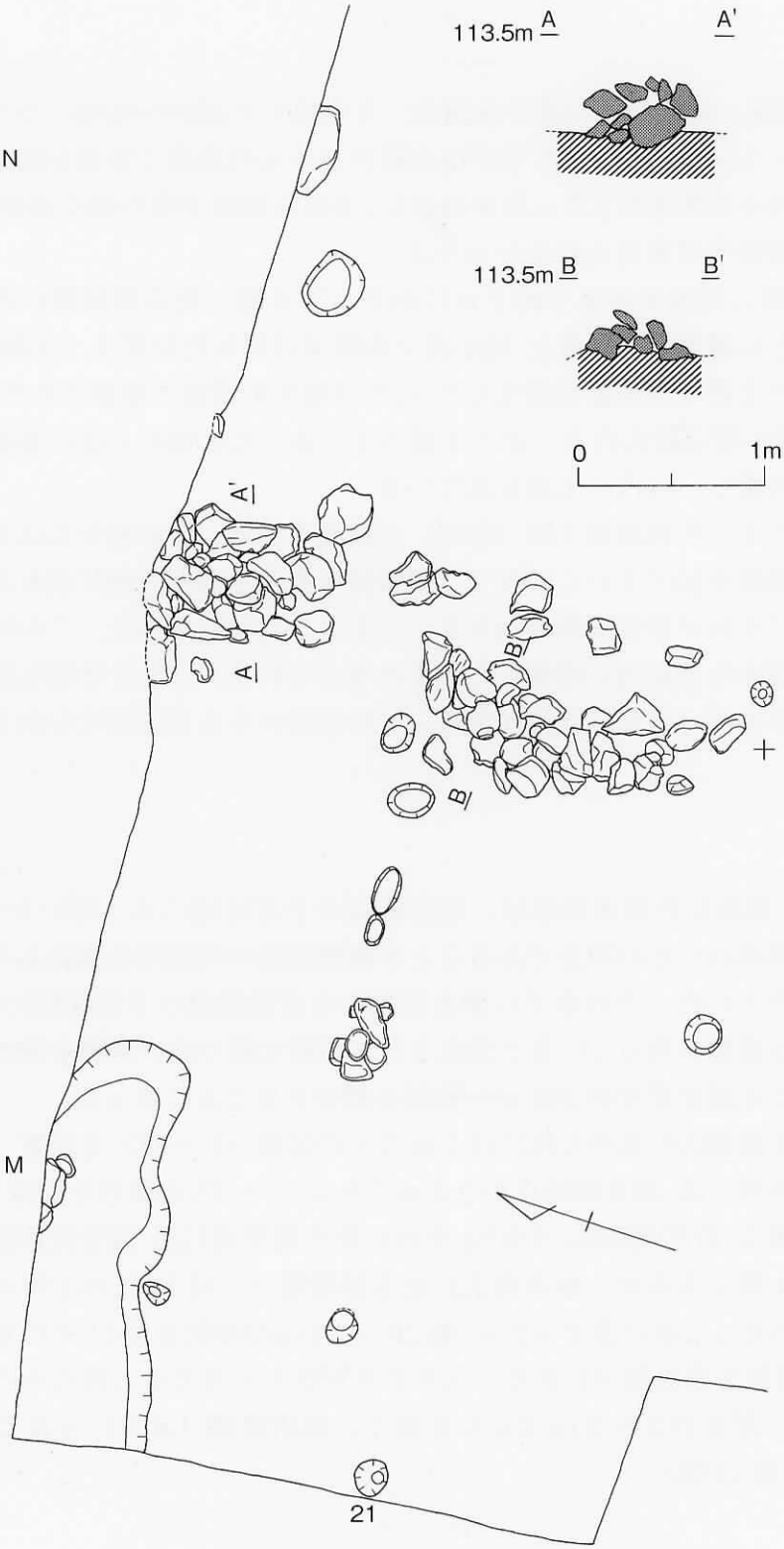
⑥層を除去した下に灰色粘質土層（⑩層）が検出された。この層からは須恵器が出土しているが、調査範囲を拡げていく過程で、調査区中央部を南北方向に流れる溝状遺構が確認され、最終的にそれが自然流路跡（ＮＲ）であることがわかった。この地山とは異なる⑩層は、その範囲からＮＲ内に堆積した埋土と考えられる。さらに⑩層を除去した後には⑧層（砂礫層）があり、ＮＲの底部に至る。この⑧層からも須恵器片が出土している。

２．遺　構

平成 14 年度に実施した調査範囲は、道路建設の予定区域に入っていたが、平成 13 年度調査が試掘・確認のための調査であることや調査期間の時間的な制約もあって、作業が実施されず残されていた。それまでの調査結果から市道建設の予定区域には「柿田遺跡」の一部と思われる遺構が残っていると想定され、可能な限り広い範囲を調査すべきと判断し、南側に連なる未調査部分約 360 ㎡の範囲を調査することになった。

前年に引き続き調査区の東西方向には５ mごとの区画（Ｌ～Ｏ）を設定（前年の調査区に対応）し、南北方向には、調査開始点から５ mごとに 21 ～ 25 の番号を設定した。（第２図）

確認された遺構は、自然流路跡（ＮＲ）とそれに伴う護岸用石組、調査区西側（ＮＲの西岸）に点在するピット群であるが、地山面上に至る前段階で、Ｍ 24 区の⑥層からはベルト状の痕跡が検出された。これは長さ 4.2 m、幅 20 ～ 30 ㎝の帯状を呈し、その東端と西端（約１ m）に多くの炭粒を含む部分がある。大きさや形状から考えると何らかの遺構ではないかと思われたが、深さが３～５㎝ほどしか無く、溝状遺構（ＳＤ）と言えるほどのものでは無かった。（第 13 図）



第 15 図　ＬＭ 21 区内護岸石組 2 実測図

ここからは、個々の遺構について述べる。

ＮＲ（第13図）

調査範囲内を南北方向に流れ、約18ｍにわたる。幅は南北で若干異なり、北側（21～23区）は約7ｍ、南側（24～26区）は約4ｍとなる。

特に北側部分に関しては、検出時点で幅が広く、蛇行しながら流れる位置が変わったために広い流域幅となった可能性も考えられたが、ＮＲ内にサブトレンチを設定し（22区の南側のラインに沿って北へ幅50㎝を掘り込む。）、ＮＲの埋土の層位を確認した結果、流路中央部に砂質土の隆起した部分があることが判明した。元々2つの異なる流路が南に向かう過程で合流して1本の流れになった可能性も考えられる。また断面を観察すると、ＮＲ内部に堆積した埋土がほぼ同じ状態であることがわかった。

埋土である⑩層を掘りすすめたところ、約10㎝下げたところで砂礫層（⑧層）がみられた。上部の⑩層同様に須恵器片、白瓷、木片（木の皮の堆積も含む）などが出土した。さらにこの砂礫層を取り除いていくと、その下から青灰色粘質土の面が出た。ここが流路の底部と考えられる。この面から遺物は出土していない。

このことから、流路内の堆積は2層で、出土した遺物は、流路内部に廃棄された土器片と護岸用の杭列で使われていた木製品や流木の残存物であったと考えられる。

護岸石組（第15～17図）

ＮＲに関連する遺構として東西両岸で護岸用の石組と思われる遺構が検出された。

東岸にあたるＮＯ21･22区、ＮＯ23･24区、西岸であるＬＭ21区の計3ヶ所で確認され、部分的にしか残存していなかったが、ＮＲの流路の形を規定し、その岸を護るように配置されていたと考えられる。

ＮＯ21･22区のある護岸石組1は長さ4ｍ、幅1ｍである。大きさ40㎝台の礫を組み合わせ、直線的な配置がなされている。

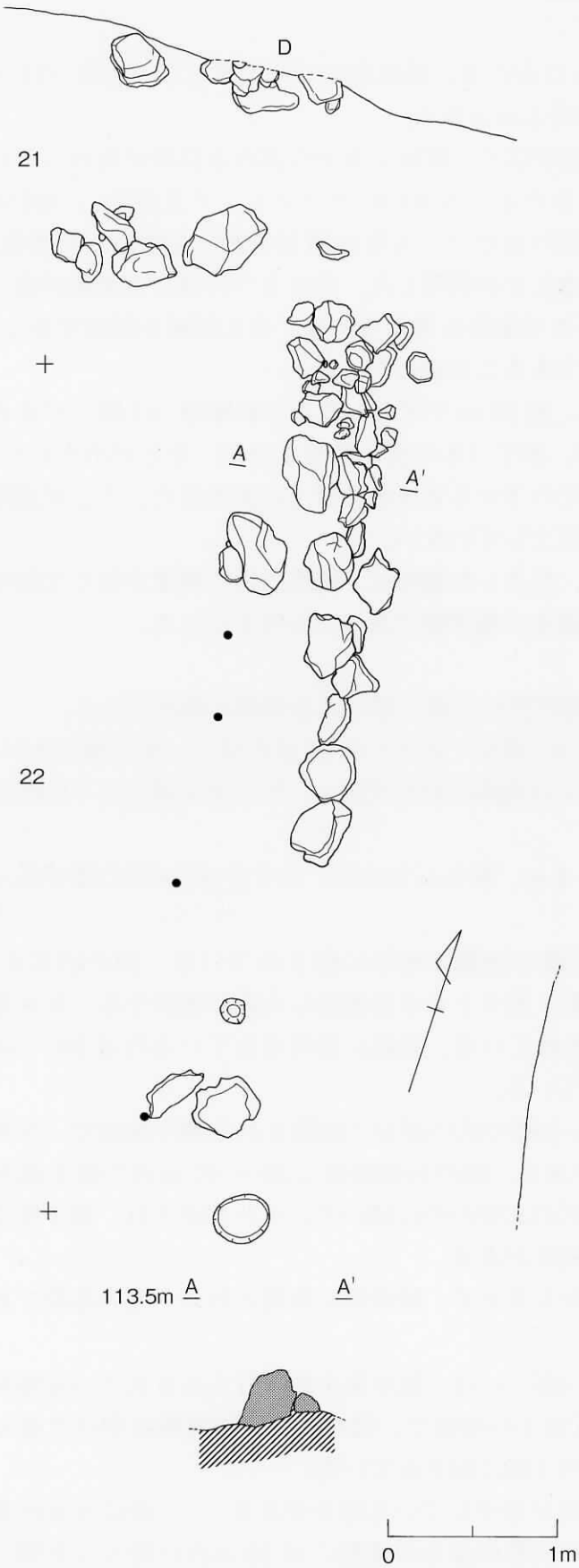
ＮＯ23･24区の護岸石組3は、護岸石組1同様に東岸に配されている。長さ約8ｍ、幅は最も残りの良い部分で約1.8ｍである。元々1と3は連続した護岸施設であったと思われるが、Ｎ22区の中央あたりで分断されている。石組に使用されている石は20～40㎝台の礫で、流れに合わせて石が配されている。

ＬＭ21区の護岸石組2は、ＮＲのもっと幅の広い部分に設置された護岸施設で、ＮＲの西岸に位置し、長さ約3ｍ、幅1ｍである。他の石組同様に20～40㎝台の礫を組み合わせて造られている。この石組は調査区の北壁の中に続いていると想定され、護岸施設自体が北側の調査区外へと続いている可能性がある。

検出された3ヶ所の石組は、その用途から考えて、同時期に敷設された一連の施設であると考えられる。

またこの護岸石組の周辺（ＮＲの流域内部）には、杭が集中的に打ち込まれている場所が存在する。護岸石組1の南側と護岸石垣3の南側で、杭が直線的に間隔を空けて並んでいる。その杭列はおおよそＮＲの岸に沿う形に配されている。

加えて、調査区南端の西岸部に同様の杭が集中している部分がある。1ヶ所はＮＲ内部の岸で10本ほど杭が密集している。この杭集中部分の南側には20㎝台の礫3つを用いた石組がみられ、ＮＲ西岸の護岸石組であった可能性が考えられる。



第16図　ＮＯ21・22区内護岸石組１実測図

もう１ヶ所は、Ｍ25区中央部にあり、ＮＲの流域から西方向（西岸の高い位置）に直線的に並ぶ９本の杭が検出された。なお、ＮＲ内部にはこの他にも何本かの杭が打ち込まれた部分があり、それはＮＲ西岸に沿うようなものが多いと思われる。

ＳＡ１・２（第13図）

13年度調査と比較すると、ピットの検出数は少ない。特にＮＲの東側ではほとんどピットが確認されず、ＮＲ西側の流路から若干離れた高い場所でいくつかのピットが検出されている。

ＬＭ22～24区で確認された一連のピット群は平面的に観察すると、南北方向に直線に並んだ配置であることがわかる。ピット内部に杭と思われる木片が伴うものがあるが、方形をなすような配置ではないことから、建物跡というよりもＮＲに関連した施設として建てられた柵ではないかと推測される。

この一連のピット群をＳＡ１とする。ＳＡ１は長さ約12ｍ、９個のピットを配し、間隔は60㎝から数ｍと等間隔ではない。Ｍ24区にあるピット（ＳＡ１の中央部）は比較的間隔が近く、それ以外の部分のピットは１ｍ以上の間隔がある。ピットの径も比較的差があり、均一ではない。ＮＲとは平行するように配され、ＮＲ西岸からは２～３ｍ離れた位置にある。

また、ＳＡ１に直交する位置関係で３つのピットの並びが観察された（Ｍ22区）。これをＳＡ２とする。

ＳＡ２は、ＳＡ１同様にＮＲ西岸に存在する。本来は、ＮＲに関連した施設であることが考えられる。ＮＲ内部を東西方向に横切るような配置を確認することはできなかったが、一連のピット群として、ＮＲ内に堰のような機能をもった柵列であった可能性が考えられる。

この２つの柵列は、ＮＲが存在する地山面を掘り込んで造られていることから、ＮＲが活用されていた時代の施設であると考えられ、ＮＲ内部から出土した様々な遺物（主として８世紀代の須恵器）から想定される年代に造られたと思われる。

調査により判明した護岸石組、柵列などから、ＮＲが利用されていた時代に本格的な治水用の施設が造られていたと思われる。南方向の谷奥から流れてきたと思われるＮＲについては、その規模や前年の調査結果から鑑みるに、このあたり一帯の水源として生活用水や農業等の生産活動に積極的に利用されたと考えられる。

また本年の調査区から、住居跡等は確認できなかったが、治水を主たる目的とした技術が本格的に導入されていたことから、県の実施した「柿田遺跡」に関連する遺跡であり、周辺部の調査を継続していくことで、その実態が次第に明らかになると考えられる。

３．遺　物

地山直上の黒灰色粘質土層（⑥層）からは多量の須恵器、白瓷、山茶碗、木片（木の皮も含む）などが出土した。⑥層の直上にある③層との境から出土する遺物の量が増加し、⑥層と地山との境までこの傾向が続く。（第14図）

特に調査区南側にあるＮＯ 24・25区では、遺物が集中的に出土する面が検出された。⑥層と地山面の間にあたる部分で、全体に砂質土や石・礫が混じる。須恵器、白瓷、山茶碗の破片、流木や木製品の破片などが集中しているが、土器に関してはいずれも完形ではなく、土器などの道具類を廃棄した場所ではないかとも考えられるが、正確なところは不明である。

⑥層を取り除いた後に検出されたのは灰色粘質土層（⑩層）で、そこからも須恵器片がまとまった量で出土した。これらの遺物は遺構の年代を推測する上で重要な要素となる。⑩層は自然流路跡（ＮＲ）の内部に堆積した層（埋土）で、この下には底部までさらに砂礫層（⑧層）があり、⑧層からＮＲ底部までの間からも須恵器片が出土している。

遺物の出土状態はほとんどが破片で、器種を特定できないものが多い。洗浄後、ある程度接合を行ったが、器種を確認できるものは少数で、その一部を図化し掲載した。以下に詳細を述べる。

土師器（遺物番号 123 ～ 129・表 2）

出土した層は遺物包含層である⑥層とその下にある⑩層である。掲載した遺物は特にＭ 24・25区の遺物が集中的に出土した部分に含まれる。この場所は須恵器や白瓷、木片など他にも多くの遺物が出土している。

器種としては、5世紀前半の高坏（123）の脚部、甕、甑の把手などがあるが、調査区の北端からは土錘（128）も出土している。6世紀後半から7世紀にかけてのものが多いと思われるが、遺構に伴うものではないので、流れ込みの遺物である可能性が高い。

須恵器（遺物番号 130 ～ 169・表 2）

14 年度調査（第 2 次調査）においても、最も多く出土した遺物は須恵器である。調査区内の全体から出土し、主に⑥層と⑩層及び⑧層（ＮＲの埋土）に含まれる。須恵器の破片だけで数千点に及ぶが、遺構に関連したものはその一部となる。

報告書に掲載した遺物は、坏身（130 ～ 144）、坏蓋（145 ～ 157）、鉢（158 ～ 160）、壺（161）、甕（165 ～ 168）などで、坩（162）、瓿（164）といった器種もみられた。

須恵器の時期は主に 8 世紀代と思われ、奈良時代のものが傾向として多い。

中世以降の比較的新しい遺物（後述する）を含む包含層内から出た須恵器も多いが、ＮＲ内からまとまった量が出土している。このことから、少なくとも 8 世紀にはこの一帯にＮＲが存在し、それが水源として活用されながら、周辺に人間が生活するエリアが存在していたことが想像される。特にＮＲ内から出土した遺物に関しては、何らかの理由で廃棄された（もしくは流れ込み）と考えられ、その分量や時代の変遷から少なくとも古代から中世の時代にわたって、この場所に人間が活動していたことを裏付ける結果を得ることができた。

須恵器：墨書（遺物番号 170 ～ 178・表 2）

13 年度調査に比べ掲載した遺物の数は少ないが、須恵器の出土品の中から一定数が確認された。掲載した遺物は、坏身（170 ～ 175）と坏蓋（176 ～ 177）である。

坏身は底部外面や内部に墨で何らかの単語が書かれているのが基本であるが、171 は例外的で「林」の 1 文字が口縁部から体部の部分に書かれていた。底部外面のものとしては 173（ヘラ記号「×」もあり）、174 も底部外面で「垣田」と記されていた。これに関してはＮＲ底部直上の砂礫層より出土している。その他には 175 の底部外面に「室」に似た文字が書かれていた。

坏蓋はその天井部内面に文字が書かれているのが基本となるが、掲載できたものは少数で、書かれた文字は不鮮明で解読することが難しいものが多い。176 に関しては天井部外面に「町」に似た字が書かれていたが詳細は不明である。時期に関しては、どちらも 8 世紀代で、墨書以外の須恵器と大きく異なるものない。

白瓷（遺物番号 179 ～ 184・表 2）

遺物量としては比較的少なく、基本的には⑩層より上の層に含まれるが、須恵器に混じってＮＲの埋土の最下部である⑧層に混じることもあった。器種はほぼ椀と皿で、時期は 10 世紀代のものと考えられる。出土状況から判断すると、ＮＲ内で出土したものは他の遺物同様に流れ込みであり、低い層（⑧層）で見つかったものに関しては、原位置というより、時間の経過の中で動いた可能性が高い。なお、墨書と思われる遺物は存在しなかった。

山茶碗（遺物番号 185 ～ 201・表 2）

報告書に掲載した遺物は碗（輪花碗）、皿（小皿）の 2 種類であるが、実際に出土した遺物もこの 2 種類に分類される。主に⑥層より上の層で出土し、調査区の全域にわたる。一部がＮＲ内の⑩層に混じるが、流れ込みと思われる。200 と 201 の 2 点が墨書である。

出土遺物は 12 世紀代のものと推定されるが、墨書 2 点と 199 の 3 点が 13 世紀前半のものと思われる。

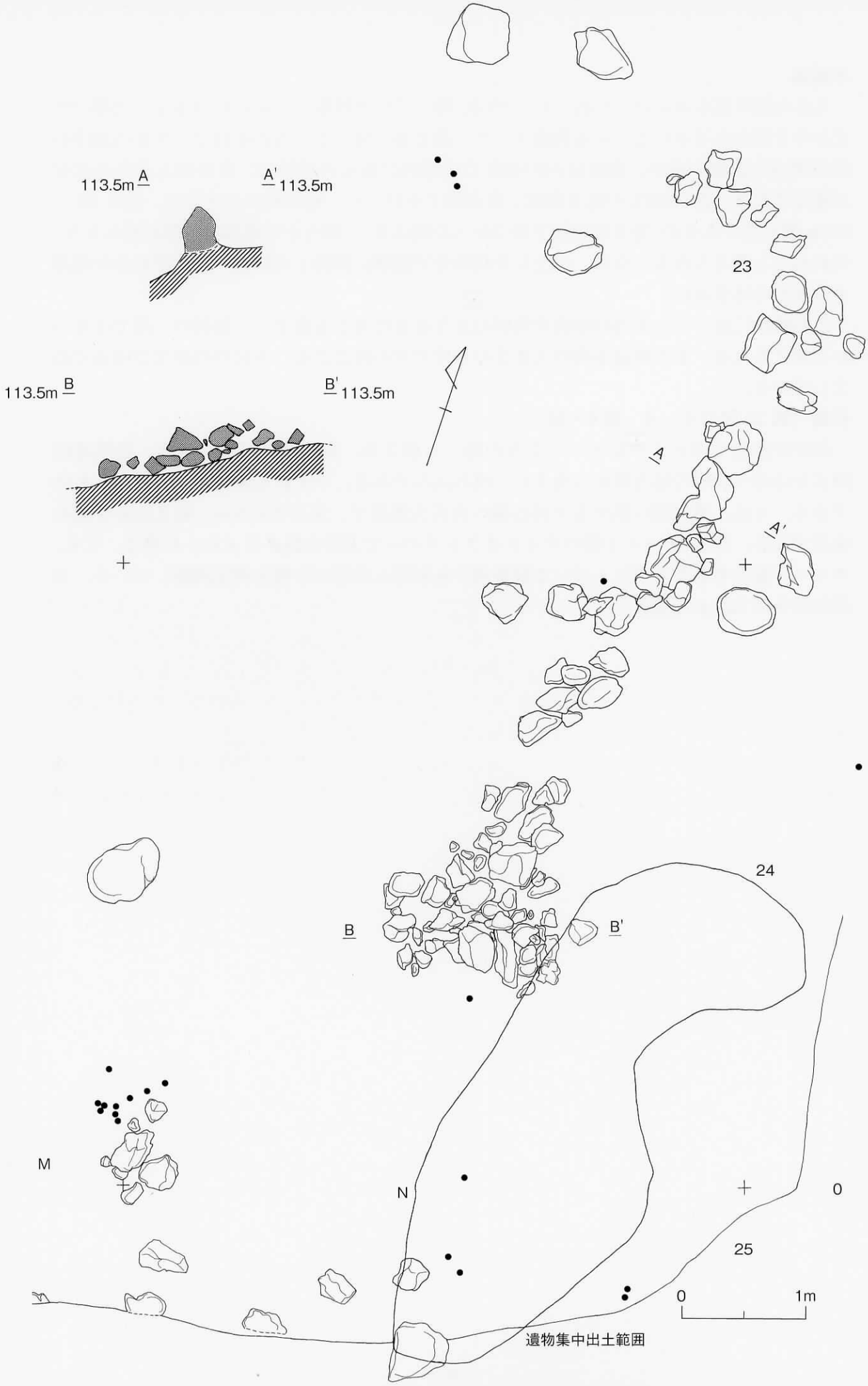
木製品

ＮＲの護岸部を中心とした杭、ピット内に残っていた柱痕、なんらかの木片、火種の燃えかすと思われる木片などが多数出土した。最も多く見つかったのが杭で、ＮＲの護岸石組の周辺や流域の西岸、調査区内の各所で規則的に並んだ状態で、先の加工された木材が確認された。20 本以上の杭を回収し保存加工を行った。検出時の大きさは、長さ 20 ～ 60cm 弱と差があるが、完全な状態で見つかった杭はなく、何らかの原因で上部が折れたり、失われたと考えられる。なお、出土した杭の中で遺構に関連した位置・時代であるか確認されたものは少ない。

このほかには、ピット内の柱痕や角材のような木片なども出土し、柱材の一部ではないかと考えられる。また用途不明の大きさの木片や木の皮なども、ＮＲの内部及び周辺で出土している。

石器（第 33 図の４～６　表４・5）

有舌尖頭器１点とスクレイパー２点の他、石核３点、剥片２点が出土した。自然流路跡または⑥～⑩層の包含層から出土し、流れ込みである。いずれも縄文時代に属するものである。４は、草創期に属する下呂石製の有舌尖頭器で、現存長 5.8cm、幅 2.6cm を測る成品である。５は、チャート製のサイドスクレイパーで刃部の長さは 4.7cm を測る。６も、チャート製のサイドスクレイパーで縦長剥片を利用し長辺の片側を押圧剥離している。刃部の長さは 5.2cm を測る。



第 17 図　ＮＯ 23 ～ 25 区内護岸石組 3 実測図

第4節　ま　と　め

平成13年度に実施した試掘・確認調査と連続する範囲（若干南東方向に傾いている）ということで、関連性が期待された。

市道建設範囲全体を最初から調査対象区として掘削作業を実施したが、現況地表面から地山までの距離があることなど、近接した場所でありながら条件が異なる部分も見られた。

結果として、調査区内で最も大規模な遺構は南側の谷から流れ込んできたと思われる自然流路跡であり、調査区はその流れの一部を切り取るような形となった。

13年度調査と同様に、豊富な遺物を含む包含層からは須恵器、白瓷、山茶碗、近世陶器などが出土し、前年までと同じように時代的には幅がある状況である。

流路内部からは須恵器片、白瓷、少量の土師器片、流木、木片（木製品の破片）が出土した。流路内ということで、遺物の大半が流れ込みと考えられるが、遺構の時期としては、出土した須恵器から、奈良時代後半から平安時代初頭（8世紀後半から9世紀の初頭）と思われる。出土した土器に関しては、その種類、器種、法量等から、県の実施した「柿田遺跡」や13年度に当市が実施した試掘・確認調査の結果とも共通する部分が多く、このことから、少なくとも8世紀には調査区域の周辺で人々の活動があったと考えられる。

また今回の調査では、この流路の両岸（東西の岸）に石組による護岸施設の残骸が確認され、その周辺からは護岸に関連したと考えられる杭も多数出土した。加えて西岸の地山面からは柵列に伴うと思われる柱穴の跡が検出され（ＳＡ１とＳＡ2）、大規模な治水用の施設が存在すると考えられることから、周辺一帯の水源として、生活用水や農業等の生産活動に積極的に利用されていたと想像される。

なお、平成13年度調査の際に発見された掘立柱建物や多くのピット（それによって構成される可能性がある建物群）、溝状遺構なども今回の流路の存在と結びついていると考えられる。

第３章　第３次調査

第１節　調査の経緯

１．試掘・確認調査の経緯と経過

平成16年度5月より可児市柿田地内で、柿田地区市道16号線整備事業が実施されることとなり、平成16年3月に、可児市都市計画課より試掘調査申請書が提出された。

市道建設が予定されている区画は、以前岐阜県文化財保護センター等が行った調査の結果判明した周知の埋蔵文化財包蔵地「柿田遺跡（21214-08846）」の存在する範囲内にある可能性が高いため、その一部に関して平成13年度、平成14年度の2回にわたり、試掘・確認調査を実施してきた。過去2回にわたる調査の結果、農道建設範囲内より古代から近世にかけての多数の遺構及び良質な遺物包含層が確認されている。

よってこの開発事業に関しても、その予定地内について事前の試掘・確認調査が必要と判断した。その旨、関係各所との協議を行った後、試掘・確認調査を実施した。なお、平成16年度実施の調査対象範囲は、14年度試掘・確認調査の対象範囲の南側に隣接している。

今回の事業で農道建設の対象となった範囲内の東端に幅2ｍのトレンチを設定し、重機と人力で地山面まで掘り下げたところ、地山直上の層から須恵器等多数の土器が出土し、良好な遺物包含層が残存していることがわかった。また、この包含層の下から溝状の砂礫層が検出されたことから、何らかの遺構がある可能性が高いと判断した。そこで開発予定地内にさらに3本のトレンチを設定し、最終的に4本のトレンチを設定、掘削作業を行った。

結果として他のトレンチからも、最初のトレンチ同様に遺物包含層と溝状の砂礫層を検出した。この溝状の遺構は自然流路跡である可能性があり、他の遺構との関連が考えられたため、開発予定地内全体を対象とした調査を行う必要があると判断した。残されたトレンチの間の部分についても掘削作業を行うことにし、まだ掘削していない部分については本発掘調査の対象とすることとなった。

試掘・確認調査の期間は平成16年4月1日から平成16年6月14日まで、約370㎡の調査を実施した。

調査は、吉田正人が担当した。

2．本発掘調査の経緯と経過

試掘・確認調査の結果を受けて、市道16号線建設予定地の残りの部分を掘り下げる作業を、本発掘調査として引き続き実施することになった。調査地は、試掘・確認調査と同様に可児市柿田字馬乗洞675番地8外2筆である。

試掘時点で、トレンチの中間として残されていた土手部分を地山面まで掘り下げ、市道建設予定地内の全体を調査対象とし、調査区内の遺構の全容を解明することとなった。

試掘時点でも確認された自然流路跡は、調査区中央部に存在する段丘斜面の北側を東西方向に横断するような形で存在することが確認され、また調査区北側には別の流路が存在することも確認された。この2つの自然流路跡の間には、砂礫層の上に人工的に叩き締めて造成されたと思われる整地面も確認された。

なお、自然流路跡の周辺部からはピットが多数確認され、その一部には柱そのものが残存しているものもあった。これらの検出されたピットは掘立柱建物跡の一部と考えられる。その他にも杭列等も検出され、自然流路跡を中心にその周辺部に建物や治水に関わる施設が確認され、昨年までの調査結果と合致する状況がみられた。

本発掘調査期間は平成16年6月15日から平成16年6月30日まで、約777㎡の面積について調査を実施した。

調査を担当したのは、試掘・確認調査に引き続き、吉田正人である。

関係法令等に基づく試掘・確認調査の諸手続きは以下のとおりである。

原因者発	平成16年3月18日	都計第141号	市教委宛	試掘調査申請書
	平成16年3月18日	都計第142号	県教委宛	埋蔵文化財発掘通知
市教委発	平成16年4月6日	教文振第214号	県教委宛	同通知進達
県教委発	平成16年4月12日	社文第32号の2	市教委宛	指示通知
市教委発	平成16年6月15日	教文振第51号	県教委宛	試掘調査の終了報告
市教委発	平成18年6月18日	教文振第52号	県教委宛	発掘調査着手報告
市教委発	平成16年7月1日	教文振第63号	県教委宛	発掘調査の終了報告
市教委発	平成16年7月1日	教文振第64号	事業者宛	発掘調査の終了報告
市教委発	平成16年7月2日	教文振第65号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
市教委発	平成16年7月2日	教文振第65号	県教委宛	埋蔵物保管証
県教委発	平成16年7月15日	社文第38号の14	市教委宛	文化財認定（通知）
市教委発	平成18年6月20日	教文振第67号の8	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成18年7月13日	社文第138号の14	市教委宛	出土品譲与通知

第 18 図　平成 16 年度調査区位置図

第2節　遺跡の立地と環境

1．立地と環境

可児市北東部の端に位置し、御嵩町に隣接している。北側を流れる可児川により形成された沖積平野と南側にある浅間丘陵地の麓に広がる扇状地上に存在する。沖積平野の北側には御嵩山地が連なり、南側の浅間丘陵地と挟まれるような形で、緩やかな勾配の平野が広がっている。

可児市から御嵩町にかけてのこの一帯は、古代において美濃国可児郡に属していたとされ、7 世紀後半には行政区画として存在していたことが明らかになっている。「郡家」、「駅家」と呼ばれた郷が存在したことから、当時の行政拠点が置かれていた可能性が考えられる。現在の御嵩町字顔戸が郡家郷に比定されることから、東山道が近くを通っていたことが想定されている。

調査区の北側の御嵩町内には平成9年に調査された「顔戸南遺跡」が存在し、古墳時代から中世にかけての集落跡、水田、道路状遺構（古代）が発見されている。さらに北側の可児川対岸には「金ヶ崎遺跡」が存在し、平成12年度の調査により、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などと並んで多くの墳丘墓が発見され、「顔戸南遺跡」に関連した墓域であったと考えられている。

調査区西側では、平成11～13年にかけて東海環状自動車道可児御嵩インターチェンジ建設の際に行われた発掘調査で「柿田遺跡」が発見された。この遺跡からは集落跡、旧河道跡、水田等の遺構が検出され、縄文～近現代にかけて各時代の様相を確認することができる様々な遺物が出土している。またこれは、北側に存在する「顔戸南遺跡」と一体の遺跡であると考えられ、特に弥生時代から古墳時代にかけての集落や水田の様子を知る上で非常に貴重な成果となった。南側には、「神崎山古墳」、「前山2号墳」、「杉ヶ洞古墳群」（いずれも古墳時代後期）等が存在し、古墳時代を中心に当時のこの地域の様子を窺い知ることができる様々な遺跡が確認されている。

過去2年にわたり行われた試掘・確認調査の範囲からさらに南側に拡げる形で行われた本年度の調査は、広大に広がる沖積地とその背後に存在する丘陵地の裾部にどのような人間活動の痕跡が存在していたかを考える上で重要である。

参考文献　財団法人岐阜県文化財保護センター　『顔戸南遺跡』　2000
財団法人岐阜県教育文化財団　『柿田遺跡』　2005
可児町教育委員会　『可児町神崎山古墳発掘調査報告書』　1976
可児市　『可児市史』第1巻　通史編　考古・文化財　2005

第3節　遺構と遺物

1．層　序

平成16年度で調査の対象となった範囲は、平成13・14年の実施した調査範囲のさらに南に位置する。調査区の北側はなだらかな沖積地で、以前は水田として利用されていたが、現在は荒蕪地となっている。対して調査区南端部は、南に広がる丘陵の裾部分にかかるため、一部が大きく隆起し、平坦な沖積地部分との比高差は約1.5 mである。そのため調査区内の状況は場所によって大きく異なる結果となった。

調査は試掘から本調査へと2段階で進められたが、調査対象範囲の西端に2 m幅のトレンチを掘削したところ、南側1/4が丘陵部分にあたり、その部分に関しては現況地表面から30～70 cm掘り下げたところで、丘陵部分の地山に相当する凝灰岩の岩盤に達した。この部分に関しては複雑な層位はみられず、畑の耕作土一層であった。

これより北側の部分に関しては沖積地（旧水田）となり、これまで2回にわたって行わ

れた過去の試掘・確認調査の範囲で確認された層位とほぼ同様の状況にあり、現況地表面から遺物を含む地山直上の層である灰色系粘質土層（④、⑨層）までの深さは1.3～1.4 mであった。

これらの層（④、⑨層）からはこれまでの調査同様に多くの遺物が出土した。須恵器（一部同時代の土師器）、白瓷、山茶碗などで、中世から近世にかけての土器・陶器の破片が中心となる。

また遺物を多量に含んだ包含層である灰色系粘質土層の下に、砂礫層（遺物を含む）が検出されたことから、昨年同様に自然流路跡（ＮＲ）が残存している可能性が高いと判断し、調査範囲内にさらにトレンチを掘ることで、全体の状況を確認することになった。さらに東へ向かって同様のトレンチを掘削したところ、調査区内を東西方向に流れる自然流路跡を検出することになった。

また試掘の初期段階では、過去の調査で確認されたピットやその他の遺構は確認されなかったが、流路跡が検出されたこと、豊富な遺物を含む層が確認されていることなどから、試掘段階では掘り残されていた部分についても拡張し、検出された流路跡以外の遺構の有無を確認することにした。その結果として、調査区北側に人為的に叩き締めて造成された整地面が存在することが判明し、その上に掘立柱建物跡などが検出された。

２．遺　構

平成16年度に対象となった範囲は、平成14年度までに可児市教育委員会によって行われた試掘・確認調査の区域に連続し、その南側にあたることから、さらに何らかの遺構が発見される可能性が高いと考えられた。

今回の調査で実施した範囲は、道路建設の計画に伴い南東方向に若干傾斜しており、そのまま南へ進むと段丘部へと至る。ただ調査区の大半が平坦な沖積地で、その範囲には未調査の遺構があるとの判断から調査を開始した。

市道建設範囲の西端から２ｍ幅のトレンチを設定した。また、対象範囲の南北方向に約50 ｍにわたって重機を用いて掘削を行った。最初のトレンチ内部からは、遺物を多く含む灰色系粘質土層（④層ないしは⑨層）がまず検出された。加えてその下には砂礫層が確認されたので、以前の調査と同様に自然流路跡（ＮＲ）が存在することが想定された。そのため同様のトレンチを東へ拡張していき、調査区内にトレンチを３本追加し（トレンチとトレンチの間に２ｍの間隔をとる）、計４本のトレンチを調査した。（トレンチ名は西から、西、中西、中東、東とした。）

追加で掘削した部分についても、遺物包含層とその下の砂礫層を確認した。状況としては調査区を横切るように東西方向に流れるＮＲが存在していると考えられた。またＮＲ以外の地山部分からピットなども検出されたことから、遺構がある程度残存していると考えられたので、引き続き掘削する範囲を拡げることになった。

掘削されていないトレンチとトレンチの間にあたる部分を掘り下げ、調査区全体の遺構を検出する作業を行った。（この作業以降を本発掘調査とする。）道路建設予定範囲全体を掘削したことで、残存している遺構の全容を確認することができた。

検出された主な遺構は、自然流路跡（ＮＲ）２ヶ所、自然流路跡に近接する位置に掘立柱建物２棟、調査区内の２本の流路跡をつなぐ役割で造られた溝とそれに伴う杭列、大小のピットである。

この後の部分では、検出された遺構について個別に述べる。

ＮＲ１（第19図）

調査区のほぼ中央に位置し、掘削範囲を東西方向に横切るような形で存在する。幅は５～６ｍと比較的大規模なもので、深さは浅い部分で約50㎝、深い部分では1.3ｍほどに達した。東端の壁の土層を観察したところ、流路内は砂質土（砂礫）の層と粘質土の層が重なり合うように堆積し、それが幾つかのブロックに分かれていることがわかった。一定の期間で流路が流れを変えたことでできた堆積層と思われる。

ＮＲ１の埋土（堆積層）内から多数の土器片が出土していることから（特に南岸の一部に集中的に遺物を含む砂礫層がある）、流路跡付近に人間が生活していた空間が存在し、当時使用されていた道具類がこの流路内に投棄されていたと考えられる。

検出されたＮＲ１の形状は、１本の大きな流路が蛇行しながら流れることで、比較的広い流域となってできあがったものと見ることができる。しかし、調査南東側（丘陵部裾の隆起部分のすぐ横）で検出された比較的浅い溝状の遺構（川底の幅約２ｍ、なだらか形状をしている）を含めて考えると、元々は２本の異なった流路が存在し、調査区中央部付近で合流していると見ることもできる。

過去の調査範囲とそこから検出された流路跡の状況を鑑みるに、このＮＲ１がそれまで検出された流路跡の上流部分に当たる可能性が高い。

遺構の周辺及び内部の埋土からは、土師器・須恵器・白瓷などの土器類、石器類、杭などの木製品や流木などが出土した。いずれも投棄ないしは流れ込みによるものと考えられるが、出土した土器から奈良時代後半から平安時代初頭にかけての遺構であると考えられる。

ＮＲ２（第19図）

調査区北西部分で検出されたＮＲ２は、その一部が調査区にかかった状態であり、今回の調査では全容を解明できていない。北西－南東方向に屈曲しながら流れ、幅は最も広いところで６ｍ、ＮＲ１と同じ大きさではあるが、全般に浅く、川というより沢の跡のようにみえる。内部の直径２ｍ程の岩が数個転がっている状態である。

この遺構に関しては、ＮＲ１に比べてその機能や性格を明確に捉えることができるような検出状況ではなかったが、ＮＲ１とＮＲ２の間にバイパス用の溝が通っていることや中間に掘立柱建物跡２棟を伴うことから、ＮＲ１と同時代の遺構で、２つが関連していたと考えられる。

ＳＨ１・２（第19図）

調査区全体を掘削したことで、ＮＲ１とＮＲ２の間に人工的に整地された面があることがわかった。遺物包含層の下にはＮＲの埋土として砂礫層が存在するが、その砂礫層の上に厚さ20㎝ほど土を盛って叩き締めることで造成された整地面が存在し、ＮＲ１の北岸からＮＲ２の南岸までの間がそのような人為的な造成を受けていた。

この整地面上から多数のピット（柱穴）が検出された。このピット群に関しては、大半がランダムな位置関係にあり、明確な性格を見出すことができなかったが、一定の間隔で

方形に配置されているものが２ヶ所で確認された。

同一平面上にあるバイパス用溝の西側（調査区中央部分）に位置している。ＮＲ１に近くより西に位置する掘立柱建物跡をＳＨ１、バイパス用溝にかかるような位置に確認された掘立柱建物跡をＳＨ２とする。

ＳＨ１は長軸（北西―南東方向）が2.0ｍ間隔でピットが並び、短軸（北東―南西方向）は1.5ｍ間隔であった。建物跡と考えられるピットは計９ヶ所で、2×2間の掘立柱建物跡（長方形）である。

ＳＨ２は長軸（北西―南東方向）が1.8ｍ間隔、短軸（北東―南西方向）は1.5ｍ間隔でピットが並んでおり、確認されたピットは計６ヶ所であるが、東側の柱が立っているはすの位置にバイパス用溝がある。ＳＨ１同様に2×2間の掘立柱建物跡（長方形）である。

ＳＨ１及びＳＨ２はその規模が似通っているだけでなく、建物の軸の方向も同じで、周辺から出土した遺物（須恵器片等）から同じ時期に建てられたと考えられる。時期は遺物から奈良時代で、整地面を含めたその時代の土木工事の跡ということになる。

また、ＳＨ１がＮＲ１に隣接した場所に建てられていることや、ＳＨ２がバイパス用溝の上に重なるような位置関係で存在することから、住居跡や貯蔵用施設などではなく、水利に関連した特殊な施設であった可能性が考えられる。

バイパス用溝（第19図）

ＮＲ１の北に位置する整地面上に、北側のＮＲ２の流れとＮＲ１の流れをつなげるための斜めの溝状遺構が検出された。この溝は、人工的に造成された整地面を後から掘り込んで造られ、北西―南東方向に斜めに設定されている。ＮＲ１との接点は調査区外なので確認できなったが、ＮＲ２の流れに接続している状況は確認することができた。なお、内部より出土した土器類から、この遺構は平安時代のものと考えられる。

またこのバイパス用溝を横切るような形で杭列が確認されているが、この杭列がバイパス用溝に伴って敷設されたものかどうかは不明である。

その他の遺構

ピットについては、調査区北東部に集中して出ている。ただし、ＳＨのような明確な配置を伴うものはほとんど無く、建物跡と考えることができるものはなかった。

３．遺　物

遺物が多く出土したのは、地山面の上に存在する暗灰色系粘質土層（⑨層）で、須恵器を中心に土師器、白瓷、木片（加工されたものも含む）などが出土した。

流路跡内からは土師器、須恵器などの土器が多く出土しているが、その他に杭や木片、流れ込んだ木の残骸と思われる木材なども出土している。流路全体を人工的に造成したと思われる痕跡は確認できず、柿田遺跡や顔戸南遺跡などの流路跡でみられた水制遺構は設置されていなかったと思われる。

出土遺物の大半は、地山直上の暗灰色粘質土層（⑨層）とその下から検出された中央部のＮＲの埋土（⑩層）以下から出た多量の須恵器、白瓷などである。⑨層の直上にある⑧層やその上の⑬層からは山茶碗や近世以降の土器が出土している。（第20図）

ＮＲ１・ＮＲ２ともに、流路内は砂礫層と粘土質の層が重なり合うように堆積し、その中に須恵器を中心とした遺物が含まれていることから、投棄ないしは流れ込みによるものと思われ、ＮＲ底部直上の⑯層まで至る。

遺物の出土状態はほとんどが破片で、器種を特定できないものが多い。また洗浄後、ある程度接合を行ったが、器種を確認できるものは少数で、その一部を図化・掲載した。以下に詳細を述べる。

土師器（遺物番号 202 ～ 206　表 3）

出土した層は遺物包含層である⑨層より上であるが、一部⑮・⑯層のようなＮＲ１内部の堆積層からも出土している。掲載した遺物のうち 202 は埋甕として埋設された土器で、Ｍ 33 区で出土している。周りに数ヶ所のピットを伴うことや埋甕であることから祭祀に関連した施設である可能性がある。時期は古墳時代と考えられる。他には 203 の手捏ね土器でＮＲ１内部から出土しているが、流れ込みと考えられる。204 から 206 については⑨層内からの出土である。5 世紀頃と考えられるが、206 は 7 世紀代で若干時代が異なる。

須恵器（遺物番号 207 ～ 228　表 2）

調査区内の全体から出土し、主に⑨層（遺物包含層）と⑩層及び⑮層（ＮＲ１の埋土）と 34、35、36 層（ＮＲ２の埋土）にも含まれる。須恵器の破片だけで数千点に及ぶが、遺構に関連したものはその一部となる。

報告書に掲載した遺物は、坏身（207 ～ 215）、坏蓋（216 ～ 222）、高坏（223）、蓋（224・225）、長頸瓶（226）、甕（227・228）などで、特殊な器種のものは含まれなかった。

須恵器の時期は主に 8 ～ 9 世紀代と思われ、奈良時代のものを中心に比較的幅が広い。

⑨層内から出た須恵器が多く、ＮＲ１・２内からまとまった量が出土している。このことから、少なくとも 8 世紀には今回の調査で検出されたＮＲが存在し、それが水源として活用されながら、周辺に人間が生活していたことが想像される。

須恵器：墨書（遺物番号 229 ～ 232　表 2）

これまでの調査の中でも出土した遺物の数が少ない。掲載した遺物は、坏身（229 ～ 231）と坏蓋（232）である。

坏身は底部外面に墨で何らかの単語が書かれているが、掲載した坏身に関しては書かれた文字を釈読できる状態のものは無く、231 の坏蓋については天井部内面に「垣田」と記されていた。これは⑬層より出土し、8 世紀前半のものと考えられる。

白瓷（遺物番号 233 ～ 253　表 2）

須恵器に比べると出土量は少ないが、⑨層より下の⑩層、㉞層などのＮＲの埋土にも含まれる。器種は主に椀（233 ～ 242）と皿（243 ～ 248）であるが、長頸瓶（249）も出土している。時期は 10 世紀代を中心に 11 世紀前半のものもある。出土状況から判断すると、⑨層より上の面からも出土していることから、ＮＲ内で出土したものは他の遺物同様に流れ込みである。なお、墨書は 4 点（250 ～ 253）が出土し、器種はいずれも椀である。底部外面に墨で何らかの文字か記号が書かれているが、251 の「×」の字以外は不鮮明な状態で、具体的には判別不可能であった。

山茶碗（遺物番号 254 ～ 272　表 2）

報告書に掲載した遺物は碗（輪花碗）、皿（小皿）の 2 種類である。主に⑨層より上の⑧層、⑬層内で出土し、調査区の全域にわたる。一部がＭ 27・28 区のＳＤに伴う遺物として出

土している（257・265・268・269）。262 ～ 266（碗）と 272（小皿）の 6 点が墨書である。遺物の年代はおおよそ 12 世紀代のものであるが、13 ～ 15 世紀にかけてのものもみられ、比較的幅のある状況であった。

墨書に関しては、265（大碗）の底部外面に「大」と書かれているものや文字自体は不鮮明ながら 262 のように「○」の中に何らかの文字を伴うものなどがあった。

その他の陶器（273・274　表 3）

掲載した遺物は、273 が汁次、274 は緑釉陶器の底部である。出土した地点が大きく異なり時代について明確ではないが、273 が②層であることから撹乱に含まれた新しい時代のものと考えられる。274 については、須恵器片が多く出土した④層や⑨層で出土しているが、流れ込みと考えられる。

木製品

調査区内で何ヶ所かの杭列が検出され、取り上げ可能な杭に関してはそれを掘り出し、30 点を超える杭を回収した。ＮＲに関連して護岸のために埋められたものや 2 つのＮＲをつなぐバイパス用溝を横切るような位置で埋め込まれていた杭列などが特徴的である。ただし杭列全てがＮＲや溝に伴うものかどうかは判然としていない。ピット内に残っていた柱痕、板状や角材といった柱材の残存物、しゃもじ形や円形（出土したものは半円）の木片、形状を確認できない状態の木片も多く出土している。その中で火種を移すための木片ないしは火付け棒として使われたと思われる木片が多数出土した。はっきりとわかる（燃えた跡が残る）もので 40 点以上あり、これらの木片はただ木材が燃えた後に廃棄されたものではなく、何らかの祭祀に関連して意図的に作られ、使用した後、ＮＲ内部や使用した場所の周辺に投棄した結果、残されたものと考えられる。調査区内でもＮＲに関連した水辺で多く見つかっていることから、特定の条件の立地に施設を造り、専門に祭祀を行っていた可能性が考えられる。今回の調査区範囲の中から住居跡等の生活に関わる遺構が検出されていないことや、比較的大規模なＮＲ（2 ヶ所）があることと大きな関連のある遺物の出土例であると思われる。

石器（第 33 図の 7 ～ 18、表 4・5）

第 3 次調査では、有舌尖頭器 2 点と石鏃 4 点、スクレイパー等 5 点、打製石斧 1 点の他、石核 49 点、剥片 68 点が出土した。いずれも遺構に伴うものではなく、⑨・⑩・⑬層または自然流路跡の包含層から出土しており、流れ込みである。いずれも縄文時代に属するものと思われる。（表 4）

7 はチャート製のスクレイパーで、刃部は両刃に剥離されている。8 と 9 は、草創期に属するチャート製の有舌尖頭器の成品で、8 は長さ 3.3cm、幅 1.4cm と小型品、9 は現存長 5.2cm、幅 2.4cm を測る。10 ～ 13 はチャート製で、スクレイパーもしくは石器の未成品と思われる。14 と 16 は下呂石製、15 と 17 はチャート製の石鏃で、15 のみが凸基、残りは凹基である。破損しているものもあるが成品である。18 は粘板岩製の打製石斧で、長さ 10.1cm、幅 4.2cm を測る短冊形のものである。明瞭な使用痕はない。

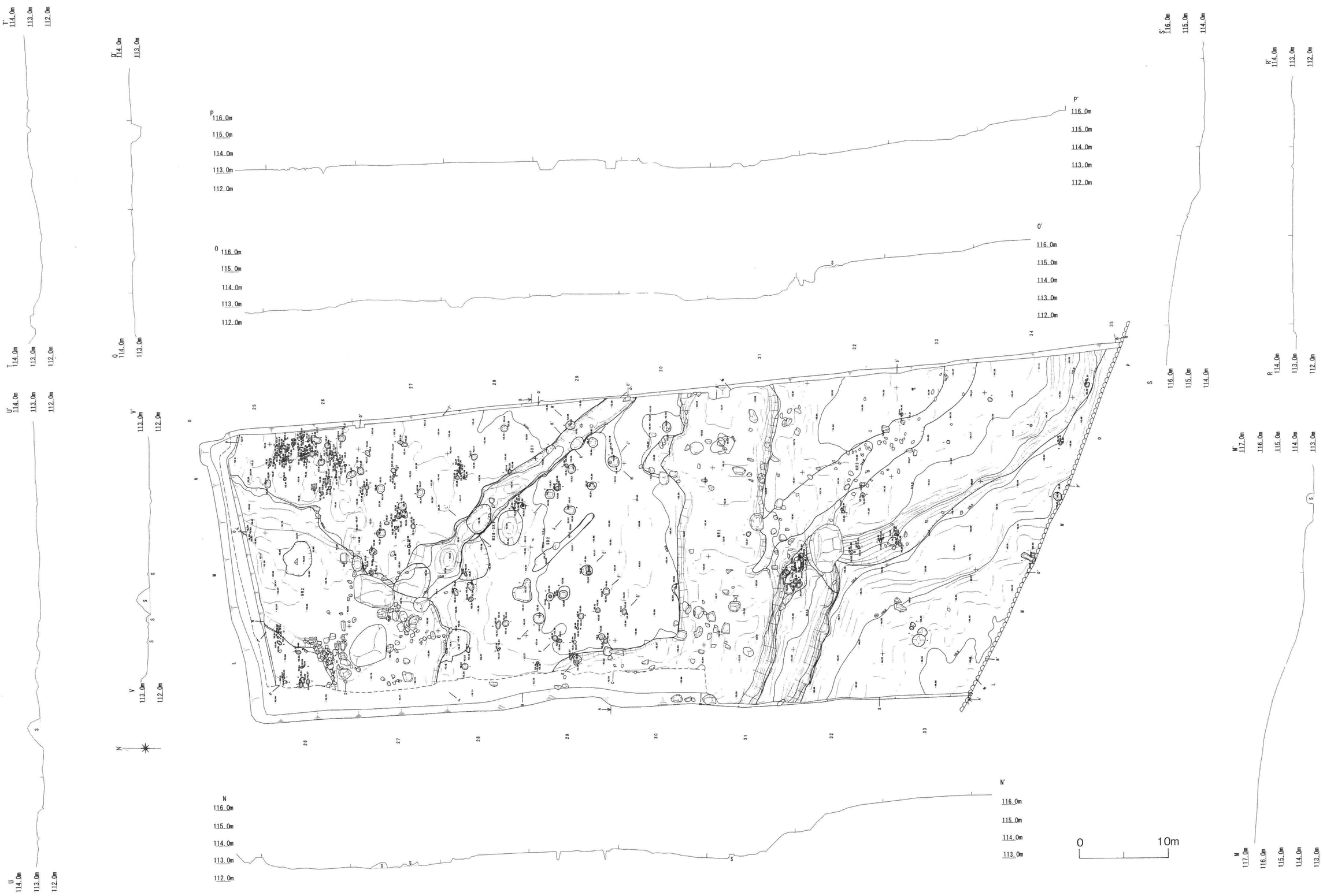
石核や剥片は図示しなかったが、ほぼ全ての石材がチャートであり、それらの多くは灰色～暗灰色～黒灰色を呈し、ごく少数は赤色や緑灰色を呈する。また、剥片の中には 10 点程、二次的な加工によるものらしき細かな押圧剥離がみられる。（表 5）

これらの石器をみると、成品だけでなく石核や剥片、未成品が多く見受けられることか

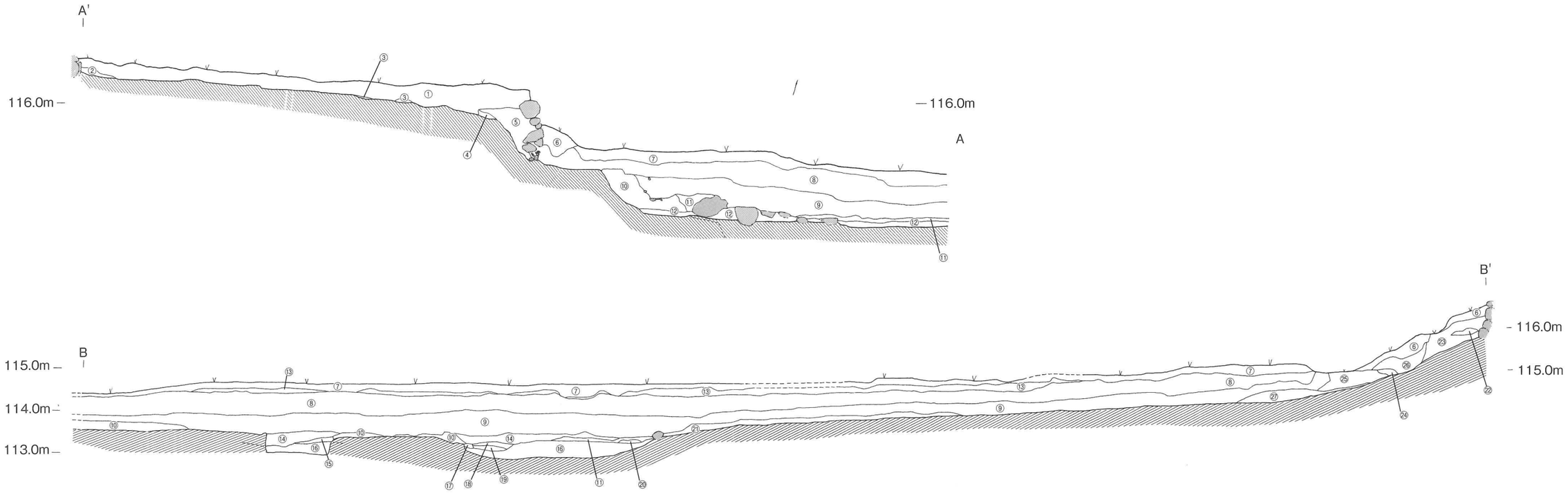
ら、石材採取や石器製作の場であったことが分かる。しかし、自然流路跡や包含層出土という「流れ込み」の状況があり、その製作の場や生活の場は、この第３次調査区にやや近いものの、より上流もしくは斜面であるものと推定される。おそらく、この小谷に流れる小川や岸辺が石材採取や荒割り～形割り～整形の場であり、少し奥の斜面か岸辺に生活の場があったのではないかと思われる。

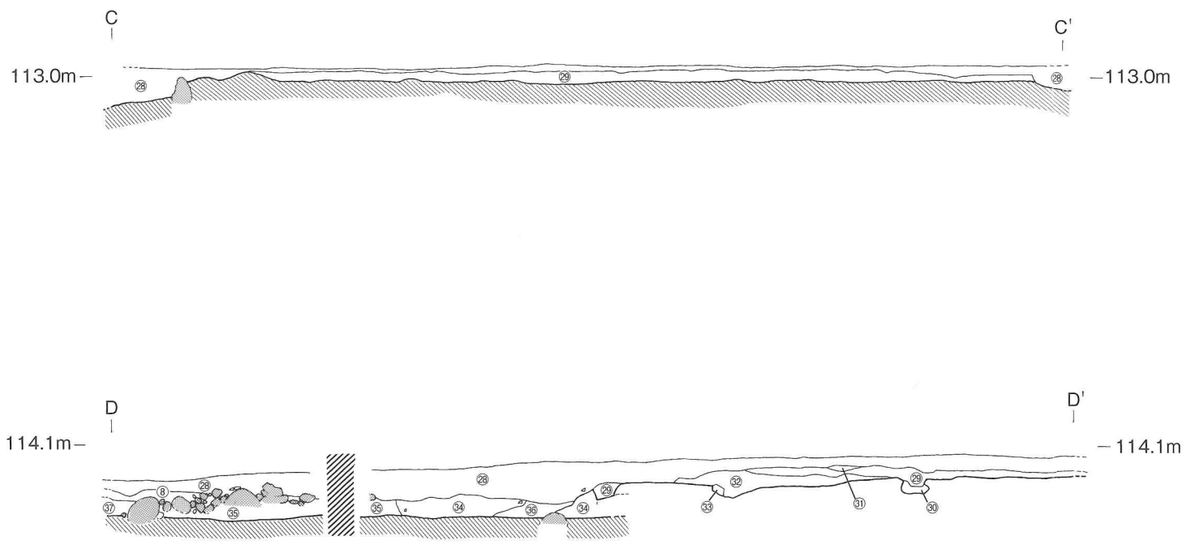
参考文献

可児市教育委員会　『川合遺跡群』　1994
可児市　『可児市史』第１巻　通史編　考古・文化財　2005
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『廻間遺跡』　1990
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『松河戸遺跡』　1994
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　『志賀公園遺跡』　2001
赤塚次郎・早野浩二「松河戸・宇田様式の再編」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第２号　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　2001
財団法人　岐阜県教育文化財団　『柿田遺跡』　2005



第19図　平成16年度調査区平面図





①黄土色粘質土　しまる（畑の耕作土）
②暗黄土色粘質土　サバ粒混じる
③褐色粘質土
④暗灰褐色粘質土　サバ粒混じる
⑤暗褐色粘質土　よくしまる　サバ粒混じる（盛土）
⑥黒褐色土　パサパサ（表土）
⑦灰黒褐色粘質土（水田耕作土）
⑧灰褐色粘質土　鉄分混じる
⑨暗灰褐色粘質土　鉄分混じる　一部サバ粒含む
⑩灰黄土色粘質土　鉄分混じる
⑪灰褐色粘質土　鉄分混じる
⑫青灰色粘質土　やわらかい
⑬灰茶褐色粘質土　鉄分混じる
⑭暗灰褐色粘質土　鉄分混じる　サバ粒含む
⑮暗灰褐色粘質土　サバ粒含む
⑯黄土色砂質土　礫含む
⑰灰黄土色粘質土（青みがある）　鉄分混じる
⑱暗灰褐色粘質土　鉄分・黄土色砂混じる　サバ粒含む
⑲暗灰褐色粘質土　鉄分混じる　サバ粒含む
⑳灰褐色粘質土　鉄分・黄土色砂質土混じる
㉑暗白黄色粘質土　よくしまる　鉄分混じる
㉒淡黄色粘質土　やわらかい
㉓黄土色粘質土　硬い
㉔暗灰褐色粘質土　鉄分混じる
㉕淡灰褐色粘質土　砂粒混じる
㉖黄土色粘質土　サバ混じる　鉄分含む
㉗淡黄土色粘質土　しまる　鉄分混じる
㉘暗灰褐色粘質土　鉄分混じる
㉙灰褐色粘質土　鉄分・サバ粒混じる
㉚灰黄土色砂質土（粘性あり・やや緑）　鉄分・サバ粒含む
㉛灰褐色砂質土　粒が荒い
㉜灰黄土色粘質土　鉄分混じる
㉝暗灰色粘質土　やわらかい　鉄分・サバ粒含む
㉞黄土色砂質土　礫含む
㉟暗黄土色砂質土　礫含む
㊱青灰色砂利土　わずかに礫含む
㊲淡黄土色粘質土　礫含む

地山：黄土色粘質土　鉄分・サバ粒（やや大）含む　砂質分あり

0　2m

第20図　平成16年度調査区土層図

第4節　ま　と　め

過去2年度（平成13年、平成14年）に実施した試掘・確認調査の該当範囲から南側を拡張する形で行われた第3次調査については、地表面から1.3～1.5 m下に多くの遺物を含む包含層が確認され、さらにその下にある地山面から多数の遺構が出土した。

過去の調査時と同様に、ピットの配列を平面的に観察すると、少なくとも2ヶ所で掘立柱建物跡を確認することができた。建物規模、法量等については図版等を参照していただくが、多数検出されたピットには柱根を含むものもあり、この他にも何棟かの建物が存在した可能性が高い。

柱穴以外の遺構として特筆すべきは、調査区内を東西方向に横切る形で存在する自然流路跡で、過去に行われた調査区内で検出されている自然流路跡の上流部に位置する。

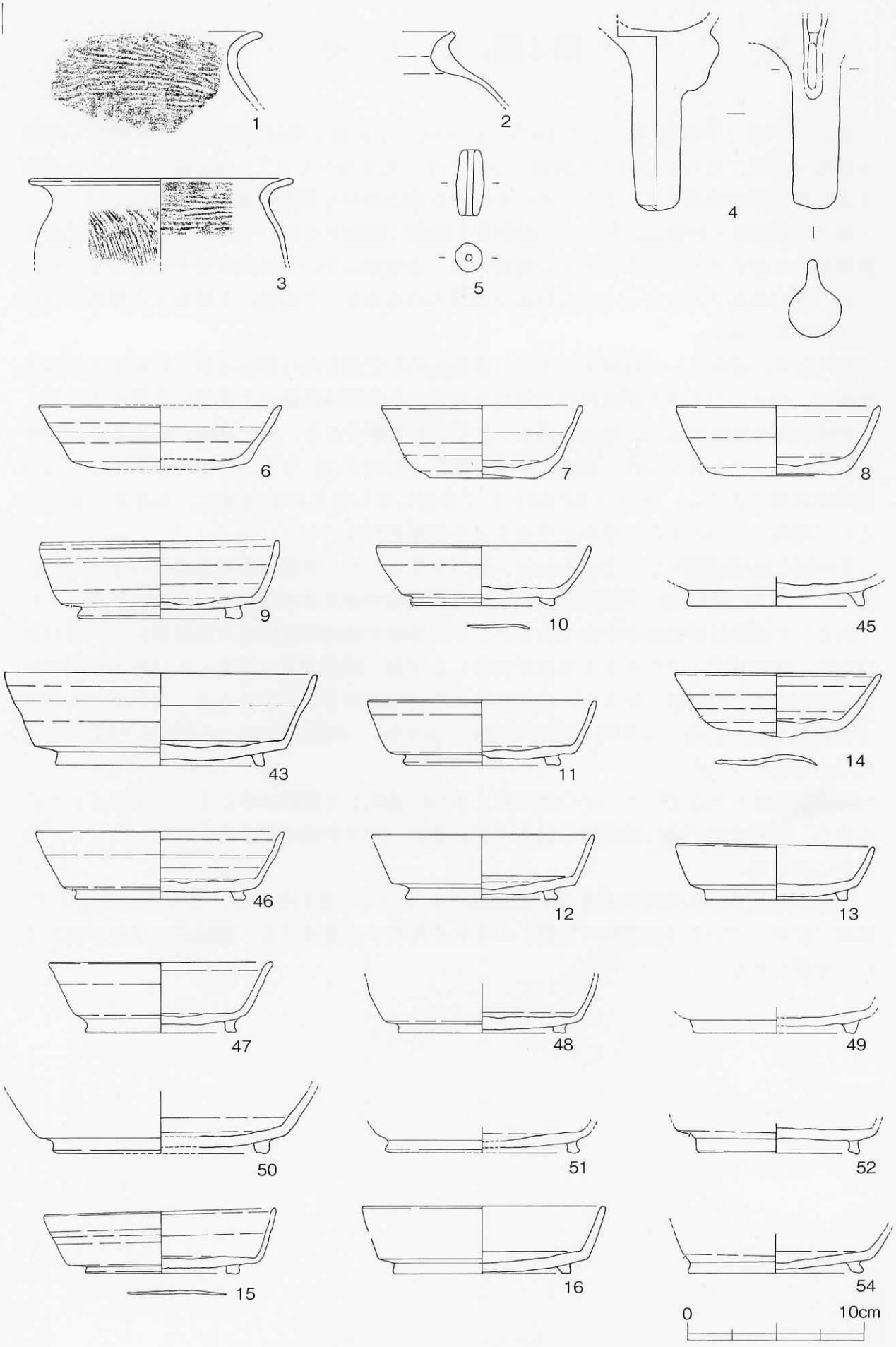
遺構の幅が比較的広く、過去の調査の結果から考察すると、長い期間にわたりこの場所に存在していたと考えられ、何度か流域が変化（蛇行する）することで、結果として広い流域が確保されたか、元々2本の川として存在していたものが合流し、大きな1本の川として機能していたかのいずれかであるように思われる。

その幅と流域面積から、このあたり一帯の水源として、生活用水や農業等の生産活動に関連した事柄に積極的に利用され、それに伴う技術が導入されていたと想像される。

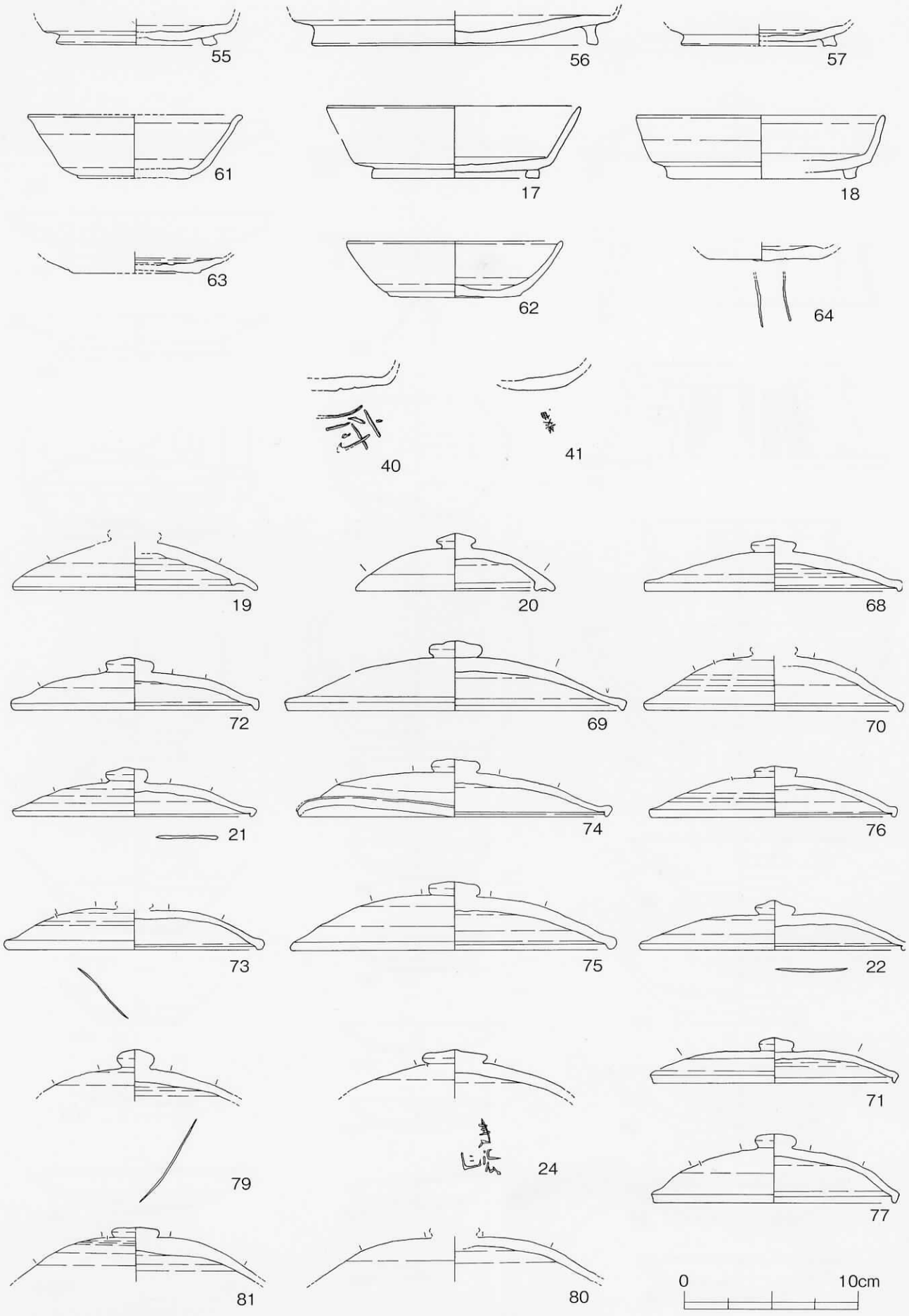
出土した遺物は須恵器が中心であるが、その器種や法量等観察される結果から、県の実施した「柿田遺跡」や昨年まで当市が実施した試掘・確認調査の結果とも共通する部分が多く、古くは古墳時代に始まり、概ね奈良～平安時代のものが中心となっている。また出土した須恵器、白瓷、山茶碗の中には墨書が含まれ、「垣田」といった単語が明記されたものも含まれていた。

自然流路跡を中心として、その周辺を土木的に造成した痕跡がまとまって発見されたことから、柿田地区一帯に建造物が建ち並び、それに伴う生活空間が存在していたことが明らかになった。

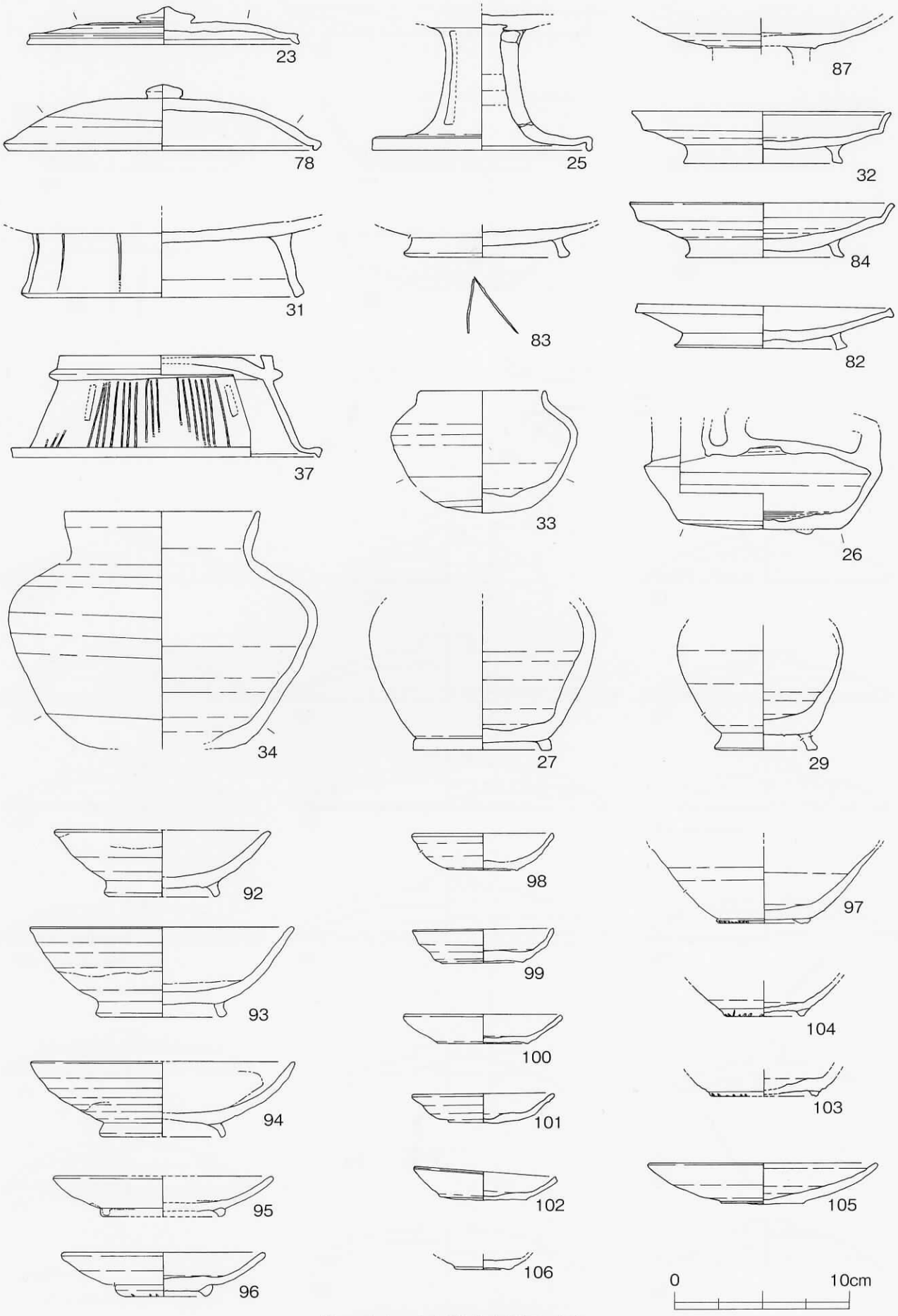
今後も開発等による環境の変化が随時進行していくと思われるが、可児市のみならず、広域で存在していた「美濃国可児郡」の実情を解明する意味でも、継続的な調査を続けていく必要がある。



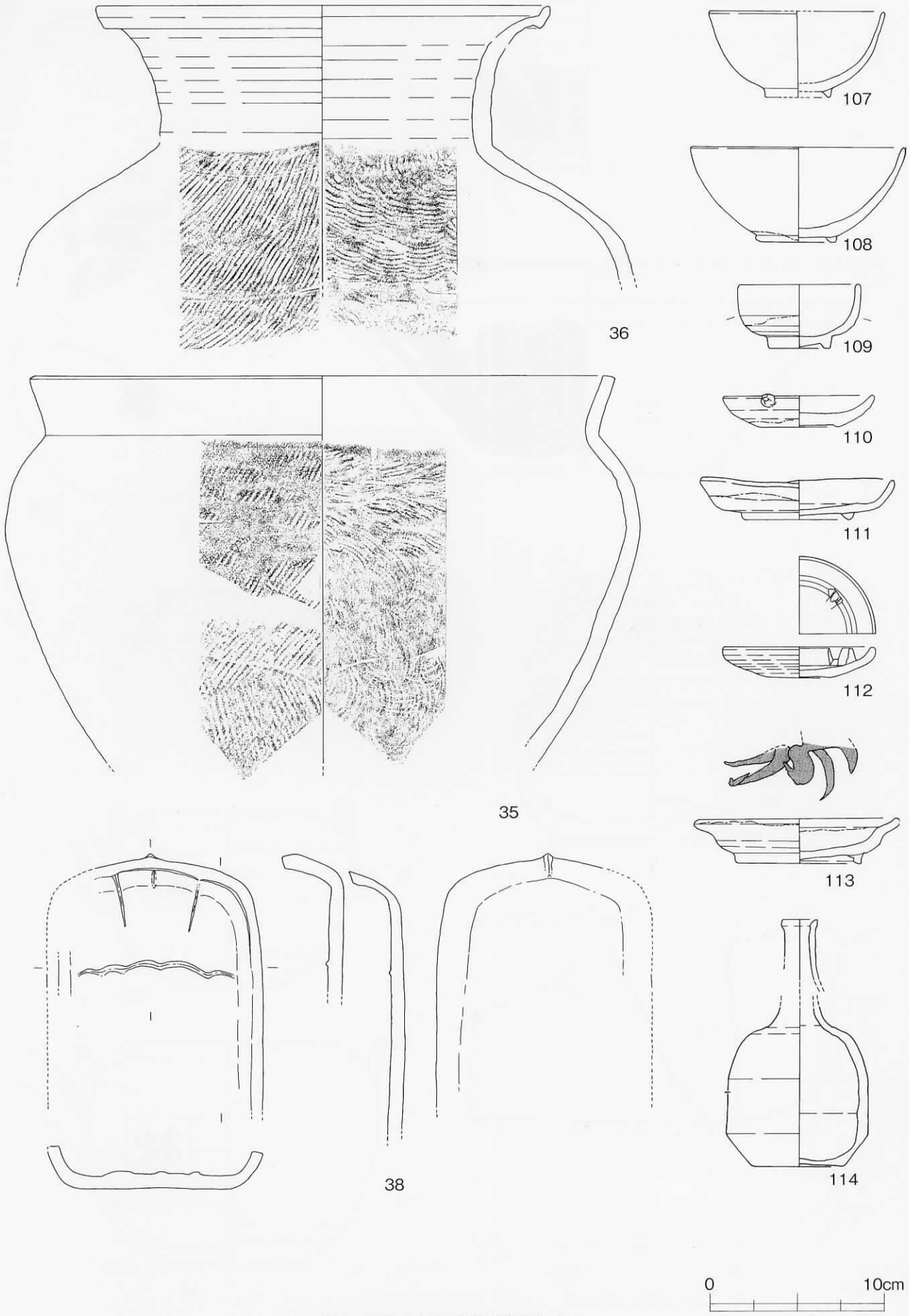
第 21 図　出土遺物実測図（1）



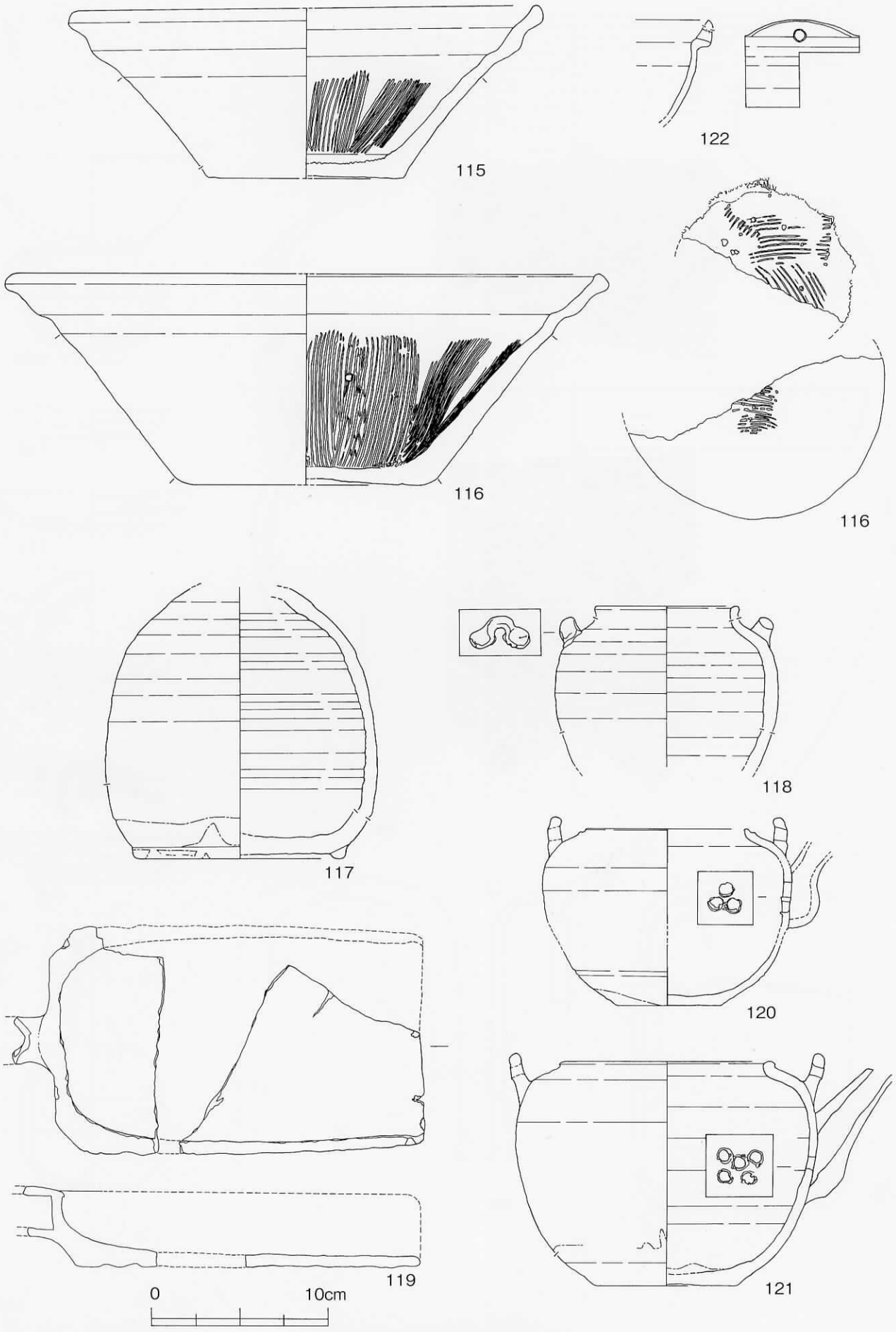
第22図　出土遺物実測図（2）



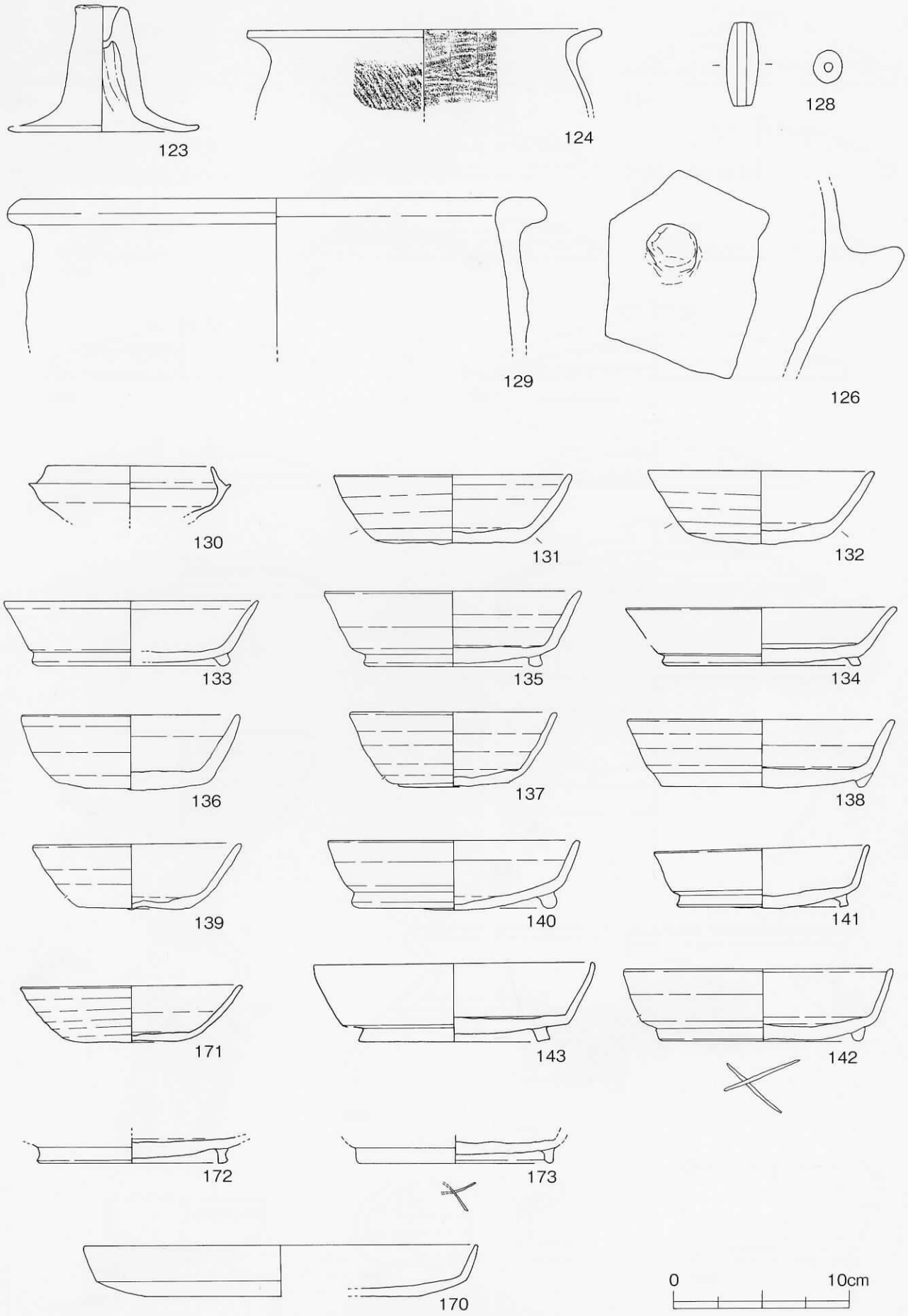
第 23 図　出土遺物実測図（3）



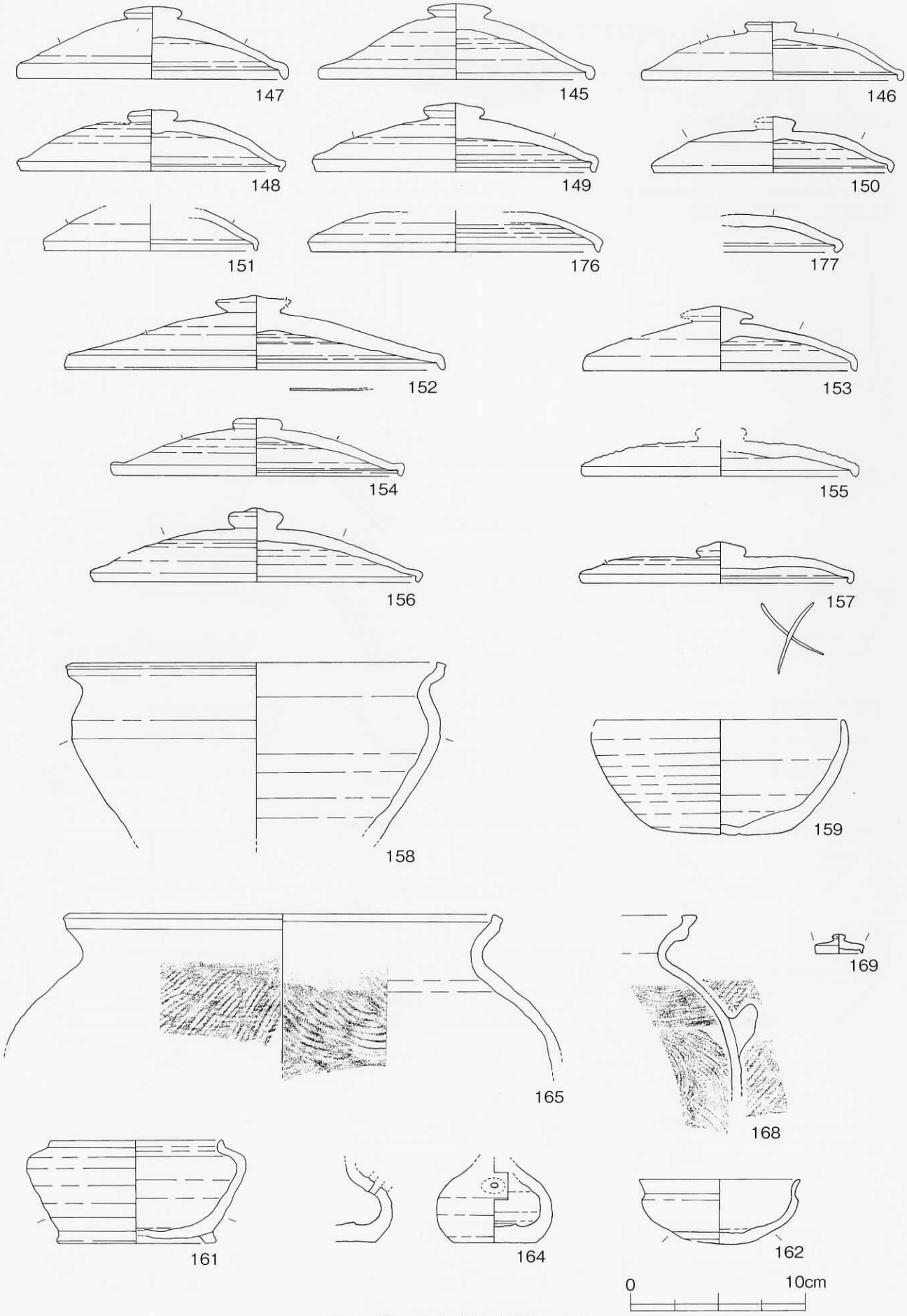
第 24 図　出土遺物実測図（4）



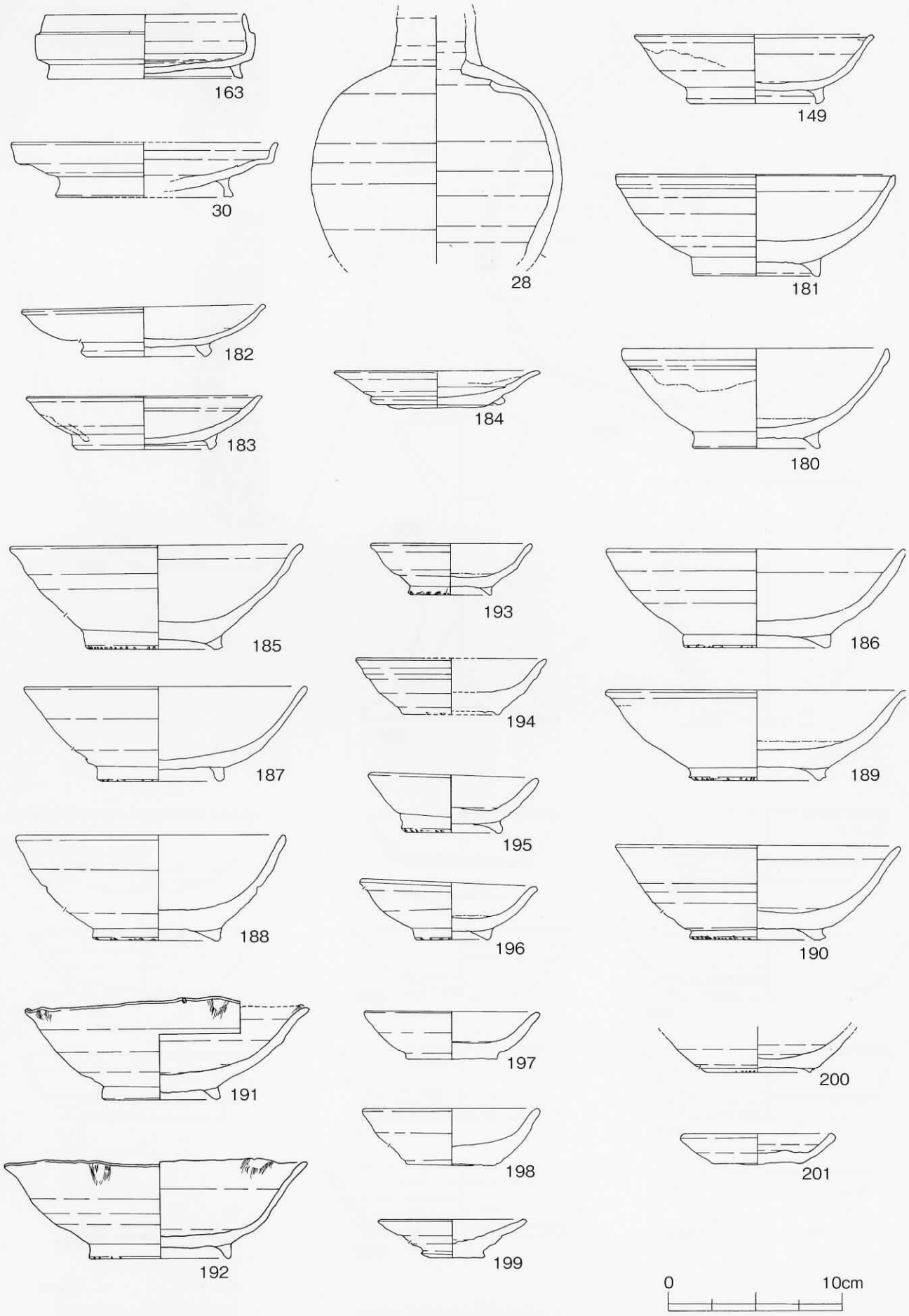
第 25 図　出土遺物実測図（5）



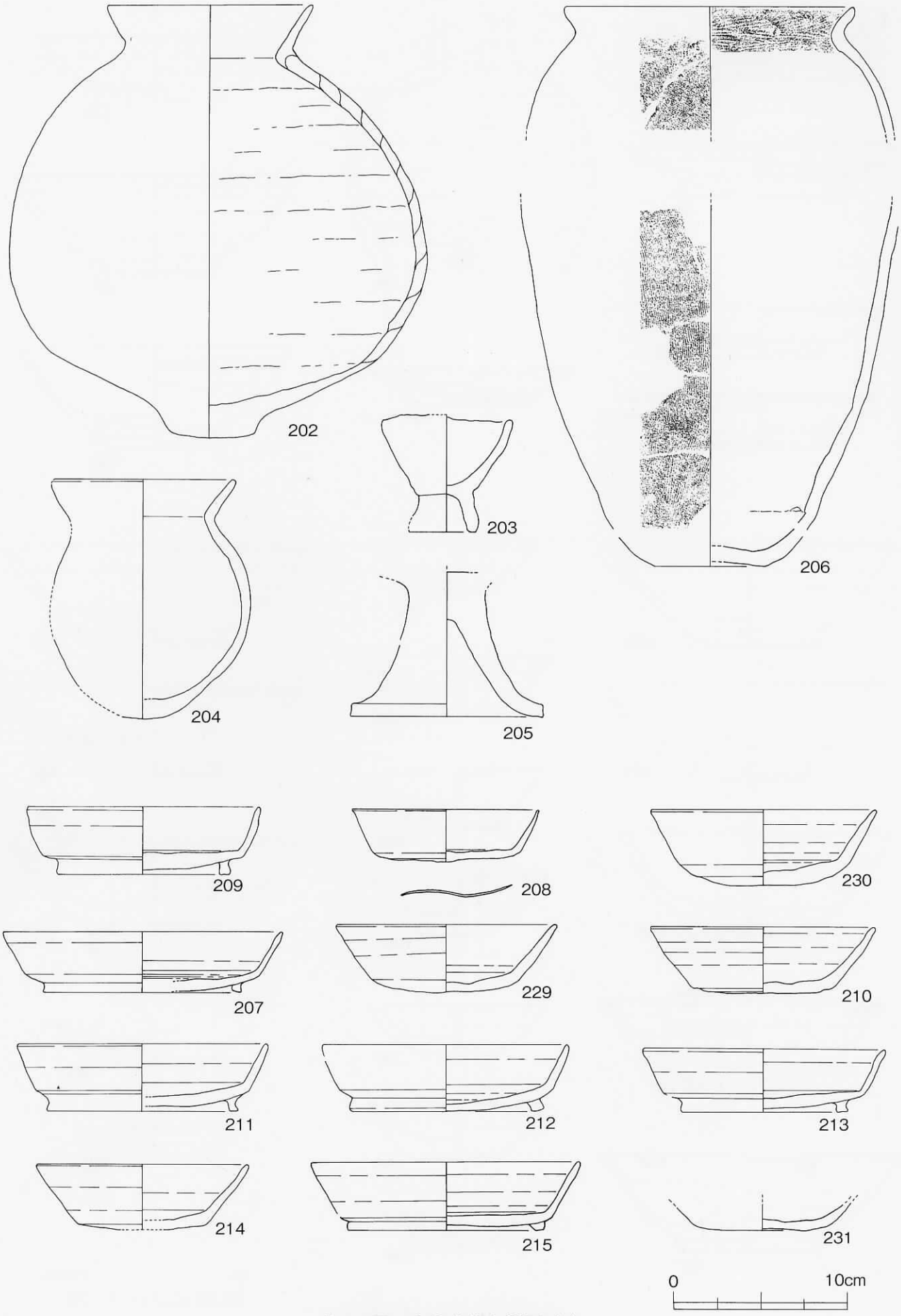
第 26 図　出土遺物実測図（6）



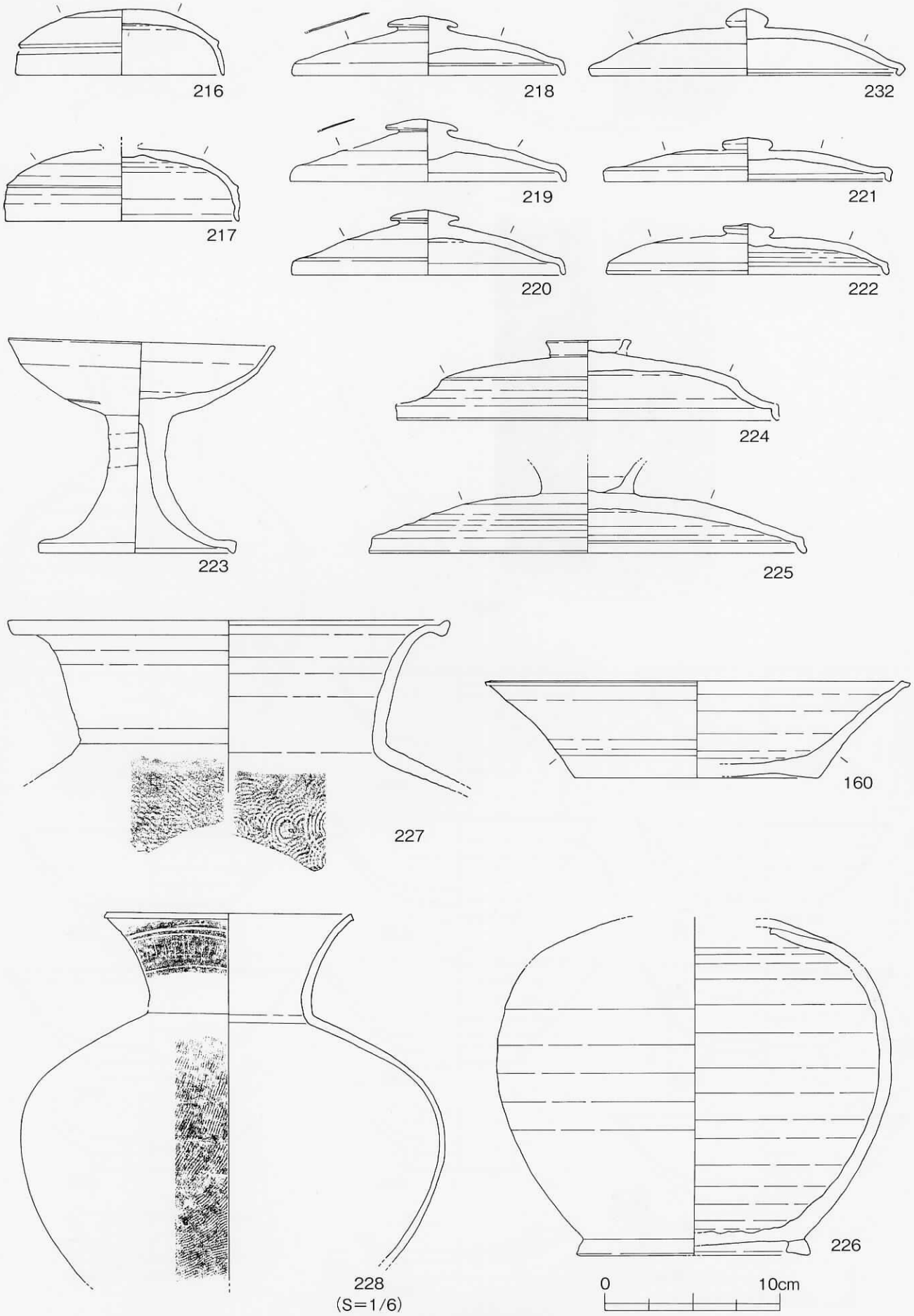
第 27 図　出土遺物実測図（7）



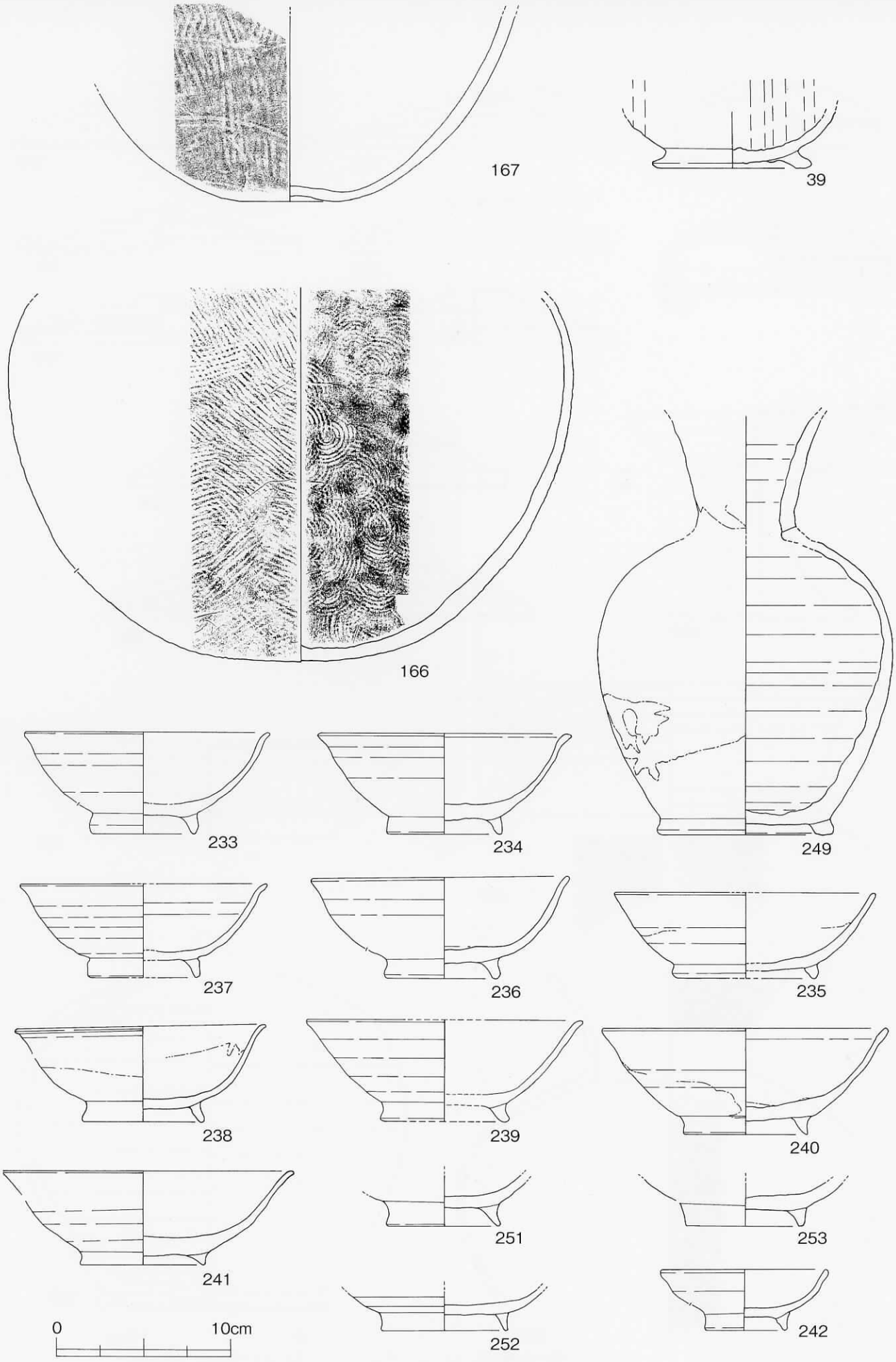
第 28 図　出土遺物実測図（8）



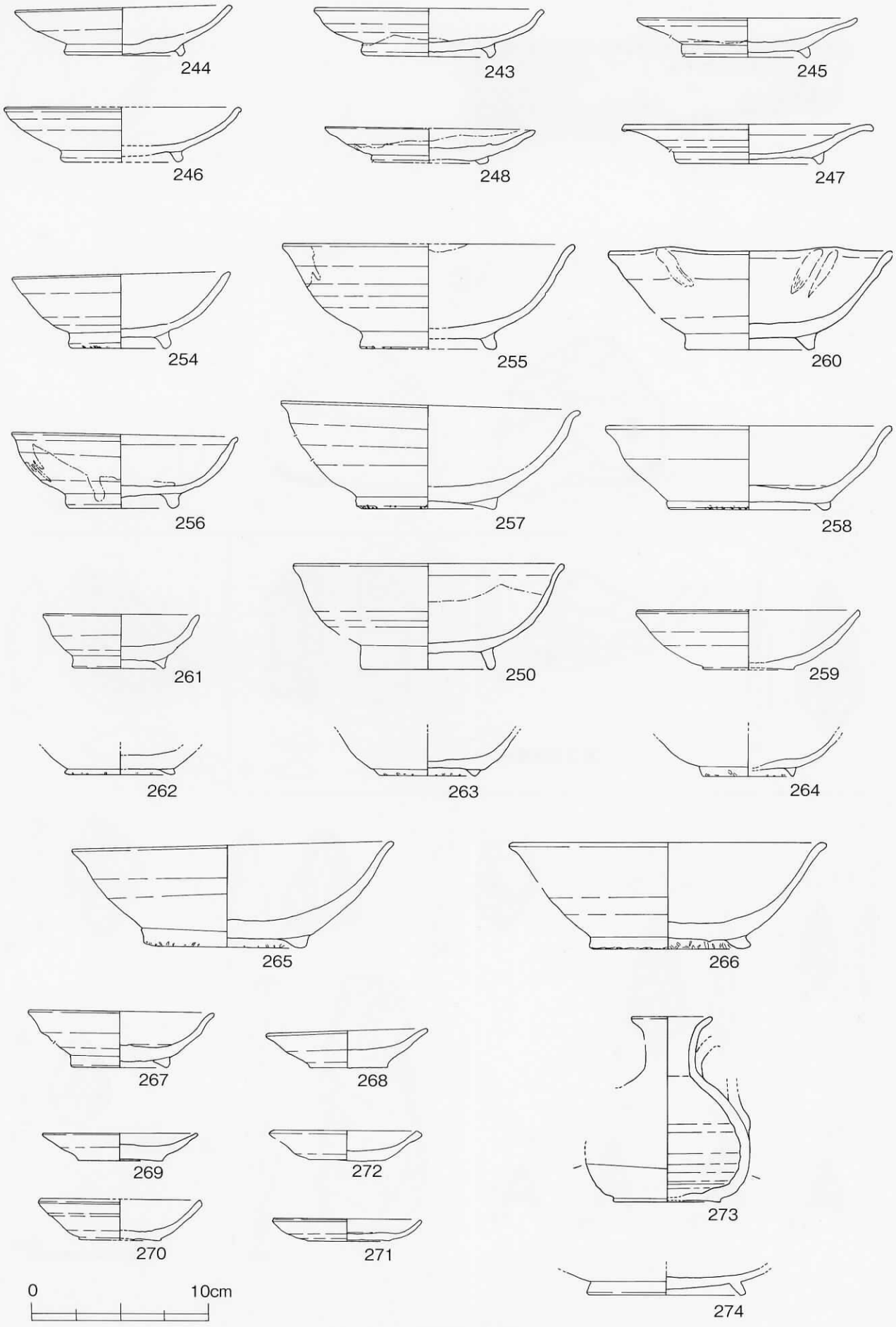
第 29 図　出土遺物実測図（9）



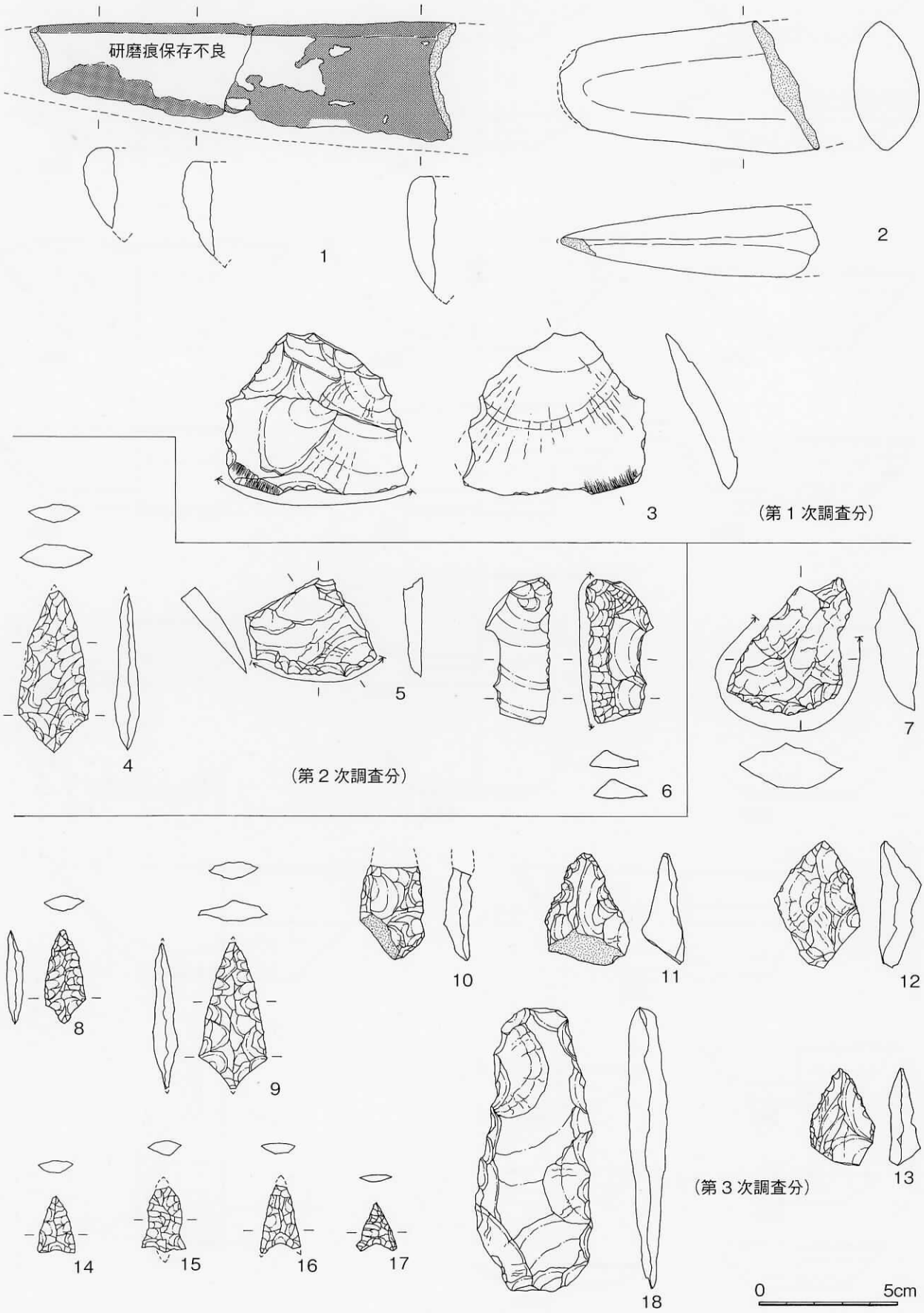
第30図　出土遺物実測図（10）



第31図　出土遺物実測図（11）



第32図　出土遺物実測図（12）



第33図　出土遺物実測図（13）

表1　平成13年度　出土遺物観察表

図番	グリッド	遺構	層序	種別	器種	法量			ロクロ	成・整・調整	色調	焼成	残存	特記事項	時期（推定）
						口径	器高	その他							
1	N16			土師器	甕	—	(4.0)	—	—	器表面及び口縁部内面ハケ調整、体部内面は横ナデ。	灰褐	やや不良	不明		6C
2	O15	SK		土師器	壺か甕	—	(3.8)	—	—	器表面及び体部内面ナデ。	黄白	やや不良	不明	調整痕はみられない。	6C後
3	N17		⑤層	土師器	甕	(14.4)	(4.6)	—	—	器表面ハケ目調整、体部内面ナデ。	灰白	やや不良	不明	口縁部内面に櫛描の線が巡る。	7C前
4	N16		④層	土師器	支脚	—	(10.8)	脚端部径1.7	—	ナデ。	灰白	やや不良	不明	（火舎か鉢の支脚か？）脚基部に耳がつき、端部付近は赤色被熱を受けている。	時期不明
5	L15			土師質	土錘	—	—	全長3.7 胴径1.6	—	ナデ。	灰白	やや不良	100	外面が一部黒く焼けている。外面にくぼみがみられるが、使用したかは不明である。	時期不明
6	O17		⑤層	須恵器	坏身	(13.4)	3.6	底径（6.8）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	20		Ⅳ第1小期　8C前
7	LM6		褐色粘質土	須恵器	坏身	(11.1)	4.1	底径6.1	左	底部外面ナデ調整、他は回転ナデ。	青灰	良	60		Ⅳ第1小期　8C前
8	O16		⑤層	須恵器	坏身	(11.4)	3.9	底径6.4	右	底部外面未調整、他は回転ナデ。	灰白	やや不良	60	焼きが甘く、全体的に磨耗。	Ⅳ第2小期　8C前～中
9	O17		⑤層	須恵器	坏身	(13.2)	4.4	高台径（8.8）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	70	付け高台。	Ⅳ第2小期　8C前～中
10	N14		④層	須恵器	坏身	(12.0)	3.4	高台径（7.8）	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	50	底部外面にヘラ記号あり（一本の線）。外面に一部自然釉が付着。付け高台（接合は粗い）。	Ⅳ第2小期　8C前～中
11	NO.3			須恵器	坏身	(12.6)	3.7	高台径（8.5）	左	底部外面回転ヘラケズリ後指押さえ、他は回転ナデ。	灰	良	50	付け高台。	Ⅳ第3小期　8C後
12	O22		⑤層	須恵器	坏身	(11.9)	3.2	高台径8.7	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	75	付け高台。	Ⅳ第3小期　8C後
13	O16		⑤層	須恵器	坏身	11.0	3.1	高台径7.9	左	底部外面静止ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	60	付け高台。	Ⅳ第3小期　8C後
14	O16		④層	須恵器	坏身	(11.4)	3.6	—	左	底部未調整。他は回転ナデ。	灰	良	50	底部外面にヘラ記号あり（一本の線）。	Ⅳ第3小期　8C後
15	L14		④層	須恵器	坏身	(13.0)	3.5	高台径（8.5）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	70	底部外面にヘラ記号あり（一本の線）。付け高台。	Ⅴ第1小期　9C前
16	N17		④層	須恵器	坏身	13.4	3.8	高台径9.9	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。底部内面ナデ調整。	灰	良	50	付け高台。	Ⅴ第1小期　9C前
17	O17		⑤層B	須恵器	坏身	14.1	4.1	高台径9.4	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	60	付け高台。	Ⅴ第1小期　9C後
18	M21		④層	須恵器	坏身	(14.0)	3.7	高台径（11.2）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	30	付け高台。	Ⅴ第1小期　9C後
19	M10		⑥層	須恵器	坏蓋	(13.8)	(2.7)	—	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	60	天井部が丸みを帯び、本来は鈕があったと思われるが欠損。口縁部にかえりあり。	Ⅲ期後半　7C後
20	O17		⑤層	須恵器	坏蓋	(11.0)	3.3	鈕径2.2	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	90	天井部外面ほぼ全体に緑色の自然釉がかかる。	Ⅲ期後半　7C後
21	M14		④層	須恵器	坏蓋	13.4	2.8	鈕径2.4	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	80	天井部内面にヘラ記号あり（一本の線）。	Ⅳ第3小期　8C後
22	N17		⑤層	須恵器	坏蓋	(14.9)	2.8	鈕径2.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	70	天井部内面にヘラ記号あり（一本の線）。天井部外面に緑色の自然釉がかかる。内面に墨のような痕跡あり。	Ⅳ第3小期　8C後

23	N16		④層	須恵器	坏蓋	15.3	2.1	鈕径 3.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	65		Ⅴ第１小期 9C 後
24	N17		—	須恵器	坏蓋	—	(2.7)	鈕径 3.6	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	10	天井部内面に刻印あり。刻印は不明。	時期不明
25	N15		④層	須恵器	高坏	—	(7.7)	脚端部 12.1	右	回転ナデ。	青灰	良	20	脚部には３方向の透かしが入る（推定）。残存部分では２つ確認できる。	Ⅳ第２小期　8C 前～中
26	N17			須恵器	平瓶	—	(6.8)	胴径 13.3 底径 9.2	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	80	外面上部全体に緑色の自然釉がかかる。底部には窯壁片（?）が融着。	Ⅳ第１小期　8C 前
27	O17		⑤層 B	須恵器	長頸瓶	—	(8.1)	高台径 7.6	左	体部外面下半～底部にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	30	底部内面の一部に土器片が融着し、青灰色を呈する。体部及び、高台には緑色の自然釉がかかる。付け高台。底部外面にヘラ記号のような線あり。	Ⅳ第３小期　8C 後
28	M15		④層	須恵器	長頸瓶	—	(13.8)	胴部径（14.3）	左	底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	不明	接合方法は三段構成。頸部付近に一部緑色の自然釉がかかる。	Ⅴ第１小期　9C 後
29	L15		④層	須恵器	ミニチュア長頸瓶	—	(6.8)	高台径（5.8）	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	20	胴部外面に墨が飛び散っている。底部内面にわずかに自然釉が付着。底部、高台にもわずかに墨がつく。	時期不明
30	M15		④層	須恵器	有台盤	(15.1)	(3.1)	高台径（10.0）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	25	付け高台。底部外面にヘラ記号のような痕跡あり。内面に重ね焼きのはがした痕跡あり。	Ⅳ第３小期　8C 後
31	M15		④層	須恵器	盤	—	(4.5)	高台径 15.4	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	25	付け高台。高台は欠損しているが、ヘラでほぼ等間隔に４本の線が入る。底部内面に他の土器の破片が融着。	Ⅳ第 3~ Ⅴ第１小期 8C 後 ~9C 前
32	遺物集中区内			須恵器	盤	14.6	3.0	高台径 8.9	右	底部外面回転ヘラケズリ、底部内面中央にナデ調整。他は回転ナデ。	青灰	良	90	付け高台。	Ⅴ第１小期　9C 前
33	LM6		褐色粘質	須恵器	壺	6.8	6.9	胴径 10.4 底径 4.9	左	体部外面下半～底部にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	褐灰	良	50	肩部に他の土器の土器片が融着。肩部から体部上半に緑色の自然釉がかかる。	Ⅳ第１小期　8C 前
34	M6			須恵器	壺	(10.7)	(13.5)	胴径 17.3	左	口縁部～体部下半は回転ナデ、底部は静止ヘラケズリ。	青灰	良	70	体部外面にロクロから離した時の指痕がみられる。	時期不明
35	M17		④・⑤層	須恵器	甕	(32.3)	(22.0)	胴径（36.2）	左	回転ナデ。内面は同心円当て具痕があり、部分的にナデ消している。底部外面は回転ヘラケズリ、体部外面には平行タタキの痕跡がのこる。	灰	良	不明	別破片で高台付きの破片あり。部分的に器表面がはがれる。	8C 後半（?）
36	M16		④層	須恵器	甕	(25.7)	(15.6)	—	右	回転ナデ。外面頸基部から体部は平行タタキ、内面は同心円当て具痕。	灰	良	不明	１ヶ所内面に指紋がみられ、口縁部内面にタタキ板の先端が１ヶ所あたった部分がみられる。	時期不明
37	L15		④層	須恵器	円面硯	(11.9)	5.7	高台径（17.1）	—	円面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	15	透かしが２ヶ所確認でき、ヘラによる沈線が現存で 17 本確認できる。口縁部は貼り付けている。使用したかどうかは不明。	時期不明
38	M14・15		④層	須恵器	風字硯	—	(3.5)	12.3 × 14.6 以上	—	端部が面取りされている。	灰	良	60	外面には緑色の自然釉が全体的にかかる。内面には５つの凸部があり、２本の凹線と１本の沈線がみられる。	時期不明
39	O16		⑤層	須恵器	瓶類の底部	—	(3.2)	高台径（8.4）	不明	回転ナデ。	灰	良	不明	内面の成形方向が下から上にではなく、横方向についている。内面に緑色の自然釉とボロが一部みられ、底部外面、高台の接合部分にも緑色の自然釉とボロがみられる。	時期不明
40	14 列		④層	須恵器	何かの底部	—	—	—	不明	回転ナデ。	青灰	良	不明	外面にヘラで「府」の文字。破片のため残存率は不明。高台の付かない坏身の底部か？	時期不明
41	L15		④層	須恵器	何かの底部	—	(1.1)	—	不明	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	不明	内面に「美濃」の刻印。破片のため、器種・残存不明。	時期不明
42	O16		⑤層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.3)	—	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	10	底部外面に墨書あり（釈読できない）。付け高台。	Ⅳ第２小期　8C 前
43	M17		⑤層	須恵器（墨書）	坏身	17.3	5.3	高台径 11.6	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。底部内面ナデ調整。	灰	良	35	底部外面に墨書あり（「垣田」の字）。付け高台。	Ⅳ第２小期　8C 前～中

44	O16		⑤層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.7)	高台径 9.4	右	底部外面回転ヘラケズリ、墨書部分は別方向のナデ調整。他は回転ナデ。	灰	良	20	底部外面に墨書あり（「垣田」の文字）。付け高台。	Ⅳ第２小期　8C 中
45	N14		③・④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.5)	高台径（9.8）	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	10	底部外面に墨書あり（「垣田」）。高台の接合は粗い。	Ⅳ第２小期　8C 中
46	O16		④層	須恵器（墨書）	坏身	(13.9)	3.8	高台径 9.4	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	50	底部外面に墨書あり（何か書いてあるが、釈読できない）。付け高台。	Ⅳ第３小期　8C 後
47	N区より東	SD8		須恵器（墨書）	坏身	(12.6)	3.9	高台径 8.4	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	40	底部外面に墨書あり（薄くて不鮮明なので釈読不明だが、２文字ある）。	Ⅳ第３小期　8C 後
48		SD4		須恵器（墨書）	坏身	—	(2.8)	高台径（9.2）	左	底部外面回転ヘラケズリ後、ナデ調整。他は回転ナデ。	青灰	良	20	底部外面に墨書あり（不鮮明だが、「垣田」と思われる）。	Ⅳ第３小期　8C 後
49	N16		④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.3)	高台径 9.0	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰白	やや不良	20	底部外面に墨書あり（「垣田」）。高台の接合は粗い。	Ⅳ第３小期　8C 後
50	N16		セイサ	須恵器（墨書）	坏身	—	(3.2)	高台径（11.8）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	やや不良	25	底部外面に墨書あり（垣田）。焼きが甘いのか全体的に磨耗している。付け高台。	Ⅳ第３小期　8C 後
51	M17		⑤層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.3)	高台径（10.4）	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	30	底部外面に墨書あり（欠損しているが、「垣」の字と思われる）。付け高台。	Ⅳ第３小期　8C 後
52	N17		⑤層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.5)	高台径（8.9）	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	青灰	良	40	底部外面に墨書あり（「垣田」）。付け高台。	Ⅳ第３小期　8C 後
53	N15		④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.3)	—	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	10	底部外面に墨書あり（部分的にしか残っておらず釈読できない）。付け高台だが粗く、部分的にしか残っていない。	Ⅳ第３小期　8C 後
54	L M14		焼木片集中	須恵器（墨書）	坏身	—	(2.2)	高台径 9.9	左	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	30	底部外面に墨書あり（「垣田」の文字）。付け高台。内面中央ナデ調整している。	Ⅴ第１小期　9C 前
55	M15		④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.5)	高台径 9.1	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	20	底部外面に墨書あり（欠損しているため部分的ではあるが、「垣田」と思われる）。	Ⅴ第１小期　9C 前
56	M15		④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.7)	高台径（16.3）	右	底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰白	やや不良	30	底部外面に墨書あり（「垣田」）。付け高台。	Ⅴ第１小期　9C 前
57	M15		④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.1)	高台径（8.8）	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	10	底部外面に墨書あり（釈読不明）。	Ⅴ第１小期　9C 前
58	N16		④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.4)	—	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	10	底部外面に墨書あり（部分的にしか残っておらず、釈読できない）。付け高台。	Ⅴ第１小期　9C 前
59	N17		④・⑤層	須恵器（墨書）	坏身	13.3	3.2	底径 7.3	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	30	底部外面に墨書あり（「垣」の字）。底部外面に布目状圧痕。	Ⅴ第１小期　9C 前
60	O21		⑤層上	須恵器（墨書）	坏身	(12.9)	(3.5)	底径（7.4）	左	底部外面未調整、口縁部～体部は回転ナデ。	青灰	良	20	底部外面にヘラ記号と墨書あり（墨書は線のみで不明）。	Ⅴ第１小期　9C 前
61	N17		⑤層	須恵器（墨書）	坏身	(12.2)	3.6	底径（6.4）	右	底部外面不整なナデ調整、他は回転ナデ。	青灰	良	25	底部外面に墨書あり（「田」のような字がみられる。）	Ⅴ第１小期　9C 後
62	M15		④層	須恵器（墨書）	坏身	(12.2)	3.1	底径（7.3）	右	底部外面不整なナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	30	底部外面に墨書あり（「垣田」の文字）。胎土が粗い。（Ⅳの第３小期の可能性あり）	Ⅴ第２小期　10C 前
63	N15		④層	須恵器（墨書）	坏身	—	(0.9)	底径（6.8）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	褐	やや不良	不明	焼きは甘いが、外面が一部黒く焼ける。底部外面に墨書あり。（２文字あり、一文字は「田」。もう一文字は不明。）	時期不明
64	M15		④層	須恵器（墨書）	坏身の底部	—	(0.7)	底径（6.2）	不明	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	10	底部外面に墨書あり（「垣」の字は明瞭で「垣」の字の下に横棒が見えるため、おそらく「垣田」）。底部外面にはヘラ記号（２本の線）がみられる。	時期不明
65	N17		④層	須恵器（墨書）	坏身の底部	—	(2.0)	—	不明	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰白	良	5	底部外面に墨書あり（「田村」の意味か？）。	時期不明

66	M14		④層	須恵器（墨書）	坏身の底部	—	(1.6)	—	不明	底部外面回転ヘラケズリ後、ナデ調整。他は回転ナデ。	灰白	やや不良	5	底部外面に墨書あり（「寸」のような字で向きは不明。「村」か？）。	時期不明
67	M15		④層	須恵器（墨書）	坏身の底部	—	(0.7)	—	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	不明	底部内面に墨書あり（「垣田」の文字）。	時期不明
68	N16	SK1		須恵器（墨書）	坏蓋	14.6	3.0	鈕径 2.5	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	95	外面に自然釉が付着。天井部内面に墨書あり（薄いが垣田）。	Ⅳ第 1~2 小期　8C 前
69	N15		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	18.9	4.0	鈕径 3.0	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	50	天井部内面に墨書あり（字は明瞭だが、釈読不明）。	Ⅳ第 2 小期　8C 前 ~ 中
70	O16		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	(14.7)	(3.1)	—	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	40	ツマミ部剥落痕あり。天井部内面に墨書あり（不鮮明、「○田」か？）。	Ⅳ第 2 小期　8C 前 ~ 中
71	LM15		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	13.6	2.6	鈕径 2.0	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。天井部内面ナデ調整。	青灰	良	60	天井部内面に墨書あり（3 文字あり、「石井以」とみえる。）	Ⅳ第 3 小期　8C 後
72	M14		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	14.0	3.0	鈕径 2.7	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	70	内面に自然釉が付着。口縁から体部外面に墨書あり（「垣田」）。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
73	N15			須恵器（墨書）	坏蓋	(14.7)	(2.3)	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	40	天井部内面に墨書（不鮮明）とヘラ記号あり。つまみは剥落。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
74	M15		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	17.8	3.3	鈕径 2.7	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	70	天井部内面（口縁より）に墨書あり（「垣田」）。内面に不定方向の調整がみられる。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
75	N15		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	18.0	3.8	鈕径 2.8	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	80	天井部内面に墨書あり（「垣田」）。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
76	M15		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	(14.1)	2.9	鈕径 2.4	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	30	天井部内面に墨書あり（「田」）。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
77	N 区より東	SD4		須恵器（墨書）	坏蓋	(13.5)	3.9	鈕径 2.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	50	内面に自然釉が付着。内面全体にうすく墨が付着。	Ⅳ第 3~ Ⅴ第 1 小期 8C 後半 ~ 9C 初
78	L14		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	17.2	3.8	鈕径 2.1	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。天井部内面ナデ調整。	青灰	良	95	天井部内面に墨書あり（「垣田」の文字）。	Ⅴ第 2 小期　10C 前
79	N14		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	—	(2.5)	鈕径 2.1	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	30	天井部内面にヘラ記号と墨書あり（「垣田」）。	時期不明
80	L15		④層	須恵器（墨書）	坏蓋	—	(2.2)	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	10	天井部内面に墨書あり（「垣」）。ツマミ部剥落痕あり。	時期不明
81	N15		⑤層	須恵器（墨書）	坏蓋	—	(3.0)	鈕径 2.6	右	天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整。他は回転ナデ。	灰白	良	50	天井部内面に墨書あり（「得」の字か？）。	時期不明
82	L15		④層	須恵器（墨書）	埦	14.2	2.4	高台径 9.6	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	60	底部外面に墨書あり（2 文字で「高家」）。底部内面にも墨書あり（「易」に似た字）。付け高台。	Ⅴ第 2 小期　10C 前
83	M15		④層	須恵器（墨書）	盤	—	(1.9)	高台径（9.3）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	20	底部外面に墨書（薄いが「垣田」）とヘラ記号（「く」の字）あり。付け高台（接合が粗い。）	Ⅴ第 1 小期　9C 前
84	M15		④層	須恵器（墨書）	盤	14.6	3.1	高台径 8.8	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。底部内面ナデ調整。	青灰	良	70	底部外面に墨書あり（「垣田」の字）。付け高台。	Ⅴ第 2 小期　10C 前
85	O16		⑤層	須恵器（墨書）	盤	(15.3)	(2.8)	高台径（9.4）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	60	底部外面に墨書あり（釈読できない、にじんでいる様子。墨痕？）付け高台。	Ⅴ第 2 小期　10C 前
86	M16		④層	須恵器（墨書）	何かの底部	—	—	—	左	底部外面回転ヘラケズリ。	青灰	良	不明	底部内面に墨書あり（文字ではなく、二重丸みたいな形が描かれる）。	時期不明
87	M15		④層	須恵器（墨書）	高坏	—	(1.7)	—	不明	坏底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	不明	坏底部内面に墨書あり（「酒（？）」の文字）。坏部と脚部の接合痕がみられる。	時期不明
88	M17		⑤層	須恵器（墨書）	破片	—	—	—	不明	墨書・ヘラのある部分にはロクロとは別方向のナデ。	灰	良	不明	外面に墨書あり（「垣田」の文字。「垣」の字は一部欠ける。）ヘラ記号もある（一本の線）。	時期不明
89	M17		④層	須恵器（墨書）	破片	—	—	—	右	外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	青灰	良	不明	内面に墨書あり（「垣田」の文字）	時期不明

90	O16		④層	須恵器（墨書）	破片	—	—	—	右	外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	黄灰	やや不良	不明	内面に墨書あり（「垣」の字と考えられる）。	時期不明
91	N15		③・④層	須恵器（墨書）	破片	—	—	—	左	外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	青灰	良	不明	内面に墨書あり（「田」の文字と思われる）。	時期不明
92	N14		③層	白瓷	椀	(11.8)	3.7	高台径（6.0）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	50	内面全体、外面は口縁部～体部にかけて施釉。内面は全体に緑色の自然釉がかかる。	大原二　10C 前
93	N15		③・④層	白瓷	椀	14.6	5.1	高台径 6.8	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰白	良	80	底部外面糸切痕あり。口縁部～体部内面に緑色の自然釉がかかり、内面には重ね焼きをはがした痕跡がみられる。	大原二　10C 前
94	LM13		⑥層	白瓷	椀	(14.7)	4.3	高台径 6.7	左	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	25	内面に重ね焼きをはがした痕跡あり、緑色の自然釉もかかる。	虎渓山一　10C 後
95	M14		④層	白瓷	皿	(12.1)	2.3	高台径 6.6	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	淡緑灰	良	20	内・外面ともに口縁部～体部まで施釉。素地は灰色。内面に重ね焼きの痕跡あり。付け高台。	大原二　10C 前
96	N14		④層	白瓷	皿	(11.2)	2.5	高台径（4.7）	左	底部外面未調整、他は回転ナデ。	灰白	良	45	内面全体、外面は口縁部～体部にかけて施釉。	丸石二　10C 後
97	M10		褐色土層（上方）	山茶碗	碗	—	(4.5)	高台径 5.0	右	回転ナデ。	灰	良	30	付け高台に籾殻痕、底部外面に糸切痕あり。内面に重ね焼きをはがした痕跡があり、黒色の付着物に他の土器片が融着している（黒色の付着物は断面にも見られる）。	明和 1 13C 後 ~ 14C 初
98		SD10		山茶碗	小皿	7.8	1.9	底径 4.0	右	回転ナデ。	黄白	やや不良	50	底部外面に糸切痕あり。	丸石 3 12C 末 ~ 13C 初
99	N14		③・④層	山茶碗	小皿	7.8	1.9	底径 4.5	右	回転ナデ。	灰	良	95	底部外面に糸切痕あり。内面に部分的に緑色の自然釉がかかる。	白土原 1　13C 前 ~ 中
100	M10		褐色土層（上方）	山茶碗	小皿	8.7	1.6	底径 5.1	右	回転ナデ、底部内面に指ナデ。	青灰	良	95	底部外面に糸切痕あり。わずかだが、内面に緑色の自然釉がかかる。	大畑大洞 4　14C 前
101	M6・7	SE1	①・③・④層	山茶碗	小皿	7.9	1.6	底径 4.0	左	回転ナデ、底部内面は指押さえした後にナデ。	灰	良	100	内面は口縁部、外面は口縁部～体部にかけて部分的に緑色の自然釉がかかる。底部外面の糸切痕は粗い。	大畑大洞 4　14C 前
102	M6・7	SE1	①・③・④層	山茶碗	小皿	7.9	1.7	底径 4.8	右	回転ナデ、底部内面に指押さえ。	灰	良	100	底部外面に糸切痕あり。内面と口縁部に部分的に緑色の自然釉がかかる。	大洞東 1　15C 前
103	M17		④層	山茶碗（墨書）	碗	—	(1.4)	高台径（6.0）	不明	底部外面糸切後ナデ調整。	黄白	良	不明	底部外面に墨書あり（一部なので不明）。付け高台で籾殻痕あり。	明和 1 13C 後 ~ 14C 初
104	M13		③・④層	山茶碗（墨書）	碗	—	(1.9)	高台径（4.2）	右	底部外面ナデ調整、他は回転ナデ。	黄白	良	不明	底部外面に墨書あり（一部なので不明）。付け高台で籾殻痕あり。	大畑大洞 4　14C 前
105	N 区より東		③・④層	山茶碗（墨書）	碗	(13.1)	(2.3)	底径（4.7）	左	回転ナデ。	灰白	良	35	底部外面に糸切痕。底部外面に墨書あり（文字は見えるが釈読できない）。	脇之島 3　15C 中
106	M6・7	SE1	②層	山茶碗（墨書）	小皿	—	(0.6)	底径（3.1）	不明	回転ナデ。	灰白	良	不明	底部外面に糸切痕あり。底部外面に墨書あり（「A」のような文字）。	時期不明
107		SD10		陶器	長石釉呉須絵丸碗	(10.1)	4.9	高台径（3.6）	不明	回転ナデ。	青灰	良良	40	長石釉が全体にかかり、内面（一本の線）及び外面（家や雲）に呉須で絵付けが施される。	第 2 段階第 6 小期 18C 前
108		SD10		陶器	柳茶碗	12.2	5.4	高台径（4.2）	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良良	75	全体的（高台付近以外）に長石釉がかかり、鉄絵で柳の模様が描かれる。素地は黄白色。付け高台。	第 3 段階第 8 小期 18C 後
109		SD10		陶器	小碗	(6.7)	3.7	高台径 3.5	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	緑灰	良良	50	削り出し高台。内面全体及び外面口縁部～体部まで灰釉を施釉。素地は黄白。	17C 中 ~ 後
110		SD10		陶器	灰釉灯明皿	8.4	1.8	底径 4.5	左	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	黄緑	良良	90	内面全体及び外面口縁部～体部にかけて黄緑の灰釉を施釉。素地は黄白色。削り出し高台。	第 2 段階第 6 小期 18C 前
111		SD10		陶器	灰釉皿	10.9	2.2	高台径 6.0	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	黄白	良良	95	内面全体及び口縁部外面に灰釉を施し、底部内面に灰釉で絵を描く。付け高台。	第 2 段階第 7 小期 18C 中

112		SD10		陶器	錆釉灯明皿	8.7	1.7	底径 3.7	左	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	茶褐	良良	95	内・外面全体に錆釉がかかる。底部外面付近は一部ぬぐう。	第 3 段階第 8 小期 18C 後
113	LM13		サバ上層	陶器	灰釉折縁皿	(11.7)	2.5	高台径（7.2）	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良良	50	内面に長石釉をかけ、口縁部に灰釉をかける。内面に鉄絵が施される。	大窯 4 末　16C 末
114		SD10		陶器	鉄釉徳利	2.0	(12.5)	底径 5.2	左	胴部～底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	茶褐	良良	40	底部外面も丁寧にヘラケズリされている。素地は黄白色。	連房Ⅳ　18C 後
115		SD11		陶器	錆釉擂鉢	27.0	9.5	底径 11.1	左	体部～底部外面にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	茶褐	良良	60	一単位 12 ～ 14 本の擂り目の入った擂鉢であり、底部内面にも擂り目が入る。底部外面及び内面の擂り目が摩滅していることから使用されたと考えられる。内面は施釉されているが、外面は一部のみで焼き締められ、淡い茶褐色を呈する。	連房Ⅲ　18C 前
116		SD10		陶器	錆釉擂鉢	(34.2)	11.8	底径（13.2）	左	体部～底部外面にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	暗褐	良良	40	内・外面に錆釉を施す。一単位 16 ～ 19 本の擂り目を施し、底部内面にも擂り目がみられる。底部内・外面が磨耗していることから使用されたと考えられる。底部外面には一部糸切痕がみられる。	第 3 段階第 9 小期 19C 前
117		SD10		陶器	錆釉徳利	―	(15.1)	胴径（15.2）、高台径（11.4）	左	底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	暗茶褐	良良	30	高台は削り出し高台。釉薬は体部下半まで施釉され、高台部分は一部のみかかる。底部外面にも錆釉が一部かかり、他の土器片のが融着してはがれた痕跡が 4 ヶ所みられる。	連房Ⅲ　18C 初
118		SD10		陶器	飴釉有耳壺	(8.2)	(9.0)	胴径（12.6）	不明	回転ナデ。	黄褐	良良	30	耳が一つ残存。素地は赤褐。	連房Ⅳ　19C 前
119		SD10		陶器	鉄釉十能	(17.3)	(4.5)	幅（12.8）	―	回転ナデ。	茶褐	良良	60	内・外面ともに鉄釉。	江戸中・後期 詳しくは不明。
120		SD10		陶器	鉄釉土瓶	(8.9)	(9.1)	胴部径（14.0）底径（5.8）	左	体部下半から底部外面回転ヘラケズリ後、ナデ調整。他は回転ナデ。	茶褐	良良	不明	内・外面ともに鉄釉。一部釉がはげて、青灰色の素地がみえる。	江戸後期
121		SD10		陶器	錆釉土瓶	(12.1)	13.1	底径 8.0	左	体部～底部外面にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	茶褐	良良	50	外面は口縁部～体部まで、内面は底部内面以外に錆釉を施釉。	江戸時代後期？
122		SD10		陶器	鉄釉釜（？）	―	(5.6)	―	右	胴部外面回転ヘラケズリ、他はナデ。	暗褐	良良	不明	口縁部に一箇所 1.0cm 弱の円孔をうがつ。器種、時期不明。	

表2　平成 14 年度　出土遺物観察表

図番	グリッド	遺構	層序	種別	器種	法量			ロクロ	成・整・調整	色調	焼成	残存	特記事項	時期（推定）
						口径	器高	その他							
123	N25		⑥層	土師器	高坏	—	(7.0)	脚端部径 10.7	—	脚柱部内面は絞込みの痕跡がみられる。外面は調整痕は確認できず。	淡黄褐	やや不良	40	残存状況から坏部と脚部を接合する際に脚部中央に粘土を付け足している。脚部内面にシボリ痕あり。	5C 前
124	N24		⑥・⑩層	土師器	甕	19.7	(4.5)	—	—	ナデ成形。頸部付近に内・外面ハケ目調整。	暗灰褐	やや不良	不明	口縁部から頸部まで残存。内面には指押さえ痕のようなものもみられる。	古墳前期（?）
125	N25		⑥層	土師器	甕	—	—	—	—	ナデ成形。体部外面ハケ目調整、口縁部内面板ナデ整形。	灰白	やや不良	不明	体部外面に黒く焼けている部分がある。	7C 後（?）
126	N25		⑥層	土師器	甑の把手	—	(10.5)	—	—	ナデ。	褐	やや不良	不明	内面に指押さえの痕跡はみられるが、調整痕はみられず。	時期不明
127	N24		⑥層	土師器	手捏ね土器	(4.8)	6.2	—	—	ナデ。	灰褐	やや不良	不明	器形は小型丸底壺形。内面にも調整痕がみられる。（器種が異なる可能性あり）	時期不明
128	M22		⑥層	土師器	土錘	—	4.8	厚さ 1.8	—	ナデ。	灰褐	やや不良	95	管状の土錘。	時期不明
129	No.304			土師器	甕か鍋	(28.6)	(8.2)	—	—	ナデ。	黄灰	良	不明	口縁部は貼り付けられ、内・外面ともに部分的に黒く焼けている。（清郷型か？）	時期不明
130	N24		⑩層	須恵器	坏身	(9.1)	(3.0)	受け部径 (11.2)	左	回転ナデ。	赤灰	良	20	底部が欠損しているため、底部の調整は不明。赤みを帯びている。	TK43 6C 後半
131	M23			須恵器	坏身	13.1	3.9	底径 8.0	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	85		Ⅳ第 1 小期　8C 前
132	N24		⑩層	須恵器	坏身	12.5	4.2	底径 7.4	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整。他は回転ナデ。	灰	良	85		Ⅳ第 1 小期　8C 前
133	M24		⑩層	須恵器	坏身	(14.1)	3.7	高台径（11.1）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	25	付け高台。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
134	N24		⑥層	須恵器	坏身	(15.0)	3.3	高台径 11.0	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	60	付け高台。胎土は粗め。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
135	N24		⑩層	須恵器	坏身	(14.2)	4.2	高台径（9.6）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	30	付け高台。	Ⅳ第 2 小期 8C 前 ~ 中
136	N24		⑩層	須恵器	坏身	12.1	4.2	底径 8.0	右	底部外面未調整、他は回転ナデ。	灰白	やや不良	95	底部内面及び口縁付近に部分的に黒色有機物（漆か？）が付着。底部内面に指押さえの痕跡が多く見られる。	Ⅳ第 2 小期 8C 前 ~ 中
137	O24		⑧層	須恵器	坏身	(11.4)	4.2	底径 6.5	右	底部外面未調整、他は回転ナデ。	灰	良	70	内面に黒色の付着物がわずかにみられる。	Ⅳ第 2 小期 8C 前 ~ 中
138	N24		⑩層	須恵器	坏身	15.0	3.8	高台径 11.4	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	85	内面に部分的に黒色有機物が付着（漆か？）。付け高台で接合は粗い。	Ⅳ第 2 小期 8C 前 ~ 中
139	N24		⑩層	須恵器	坏身	(11.5)	3.7	底径 6.1	右	底部外面未調整、他は回転ナデ。	灰白	不良	65	焼きが甘く、全体的に磨耗し、内・外面ともに黒ずんでいる部分あり。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
140	O23		⑩・⑧層	須恵器	坏身	(13.9)	3.9	高台径（10.8）	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	暗灰	良	45	付け高台。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
141	O21		⑩層	須恵器	坏身	11.8	2.3	高台径 9.5	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	80	付け高台。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
142	N24		⑩層	須恵器	坏身	(15.0)	4.0	高台径（11.0）	左	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整。他は回転ナデ。	灰	良	60	付け高台は粗め。底部外面に「×」の字のヘラ記号あり。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
143	O23		⑩層	須恵器	坏身	15.5	4.4	高台径 10.7	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	70	付け高台。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
144	O23		⑩層	須恵器	坏身の口縁部	—	(3.3)	—	右	回転ナデ。	灰白	良	不明	外面に「美濃」の刻印。	時期不明

145	N24		⑩層	須恵器	坏蓋	15.3	4.3	鈕径 3.6	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	60	天井部外面に一部緑色の自然釉がかかる。	Ⅳ第 1 小期　8C 初
146	M23		⑧層	須恵器	坏蓋	(14.7)	3.3	鈕径 2.9	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	60	天井部外面に工具痕のような痕跡がみられる。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
147	N24		⑩層	須恵器	坏蓋	15.2	4.1	鈕径 3.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	50	外面に一部緑色の自然釉がかかる。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
148	M22		⑧層	須恵器	坏蓋	(14.8)	3.5	鈕径 2.9	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰白	良	50	内面に器壁が膨れている部分がみられる。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
149	N25		⑧層	須恵器	坏蓋	15.7	3.9	鈕径 3.4	右	天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	75	内面に黒色の付着物がみられる（漆か？）	Ⅳ第 2 小期　8C 前～中
150	O23		⑩層	須恵器	坏蓋	13.4	3.2	鈕径 2.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	80		Ⅳ第 2 小期　8C 前～中
151	L24		⑧層	須恵器	坏蓋	(12.2)	(2.3)	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	25		Ⅳ第 2 小期　8C 前～中
152	N25		⑩・⑧層	須恵器	坏蓋	(21.5)	4.2	鈕径 4.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	50	天井部内面にヘラ記号あり（一本の線）。外面全体に暗灰褐色の自然釉が付着。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
153	N25			須恵器	坏蓋	15.3	3.7	鈕径 3.6	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	65	天井部内面に器ぶくれあり。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
154	N23		⑩層	須恵器	坏蓋	(16.3)	3.3	鈕径 2.8	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	暗灰	良	35	天井部外面にヘラ記号あり（一本の線）。重ね焼きしているため、口縁部のみ色調が異なる。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
155	N25		⑩層	須恵器	坏蓋	(15.5)	(2.0)	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	30	ツマミ部剥落痕あり。外面全体にボロが付着し、部分的に緑色の自然釉がみられる。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
156	O21･22	NR	⑩層	須恵器	坏蓋	18.3	4.2	鈕径 3.0	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	60	口縁部が一部白く焼けている。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
157	O23		⑧層	須恵器	坏蓋	(15.2)	2.3	鈕径 2.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整。他は回転ナデ。	青灰	良	40	天井部内面にヘラ記号あり（「×」の字）。天井部外面には緑色の自然釉がかかる。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
158	O23			須恵器	鉢	(21.4)	(10.0)	胴径 20.8	右	体部外面下半～底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	40		Ⅳ第 2 小期　8C 前～中
159	N24		⑥層	須恵器	鉢	13.9	6.6	底径 7.6 胴径 14.6	右	底部外面はナデ調整、他は回転ナデ。	青灰	良	70		Ⅳ第 1 小期　8C 前
160	N24			須恵器	鉢	(23.2)	11.2	底径（10.4）	左	底部外面端を静止ヘラケズリし、底部外面はナデ調整。他は回転ナデ。	灰	良	30	N27NR2 出土片（⑮層）と接合。体部外面には不定方向のナデの痕跡がみられる。	Ⅳ第 2 小期　8C 前～中
161	N24			須恵器	壺	(9.7)	5.9	胴径 12.4 高台径 9.0	右	体部外面下半～底部にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	35	内面と口縁部付近が赤く焼けている。付け高台。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
162	N24		⑧層	須恵器	坩	(9.0)	3.7	胴径（9.0）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	暗灰	良	50	胎土は粗めであり、火に何度かさらされている可能性あり。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
163	N24		⑩層	須恵器	合子か？	(11.2)	3.7	高台径 10.1	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	40	器種・時期不明。（仏器関係か？）付け高台。	時期不明
164	N23		⑧層	須恵器	甕	—	(4.5)	胴径 6.6	右	体部外面下半～底部にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	35	底部内面及び肩部外面に部分的に緑色の自然釉がかかる。注口のはがれた痕跡がのこる。	時期不明
165	N24		⑥・⑩層	須恵器	甕	(24.1)	(9.0)	—	左	回転ナデ。内面には同心円当て具痕。体部外面には平行タタキの痕跡が残る。	灰白	やや不良	不明	焼きが甘い。	時期不明
166	N24		⑥・⑩層	須恵器	甕	—	(20.6)	胴部径 32.5	不明	外面タタキ、内面当て具痕。	灰白	良	30		時期不明
167	N24		⑩層	須恵器	甕の底部	—	(10.7)	—	右	回転ナデ。外面は平行タタキ、内面には一部同心円当て具痕が確認でき、不整方向のナデによって整形される。	青灰	良	不明	底部付近はタタキの後、ナデをしている可能性あり。	時期不明

168	M26			須恵器	甕	—	(9.6)	—	右	回転ナデ。体部内面には当て具痕あり、頸部～体部外面には平行タタキが施される。	灰	良	不明	把手付（指ナデの痕跡がみられる）。	時期不明
169	L24		⑥層	須恵器	蓋	2.7	1.1	鈕径 0.8	左	回転ナデ。	灰	良	90	鈕が付いている蓋のミニチュア品。	時期不明
170	O23		⑧層	須恵器（墨書）	坏身	21.8	2.9	底径 15.2	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	10	底部外面に墨書あり（欠損しており、1 文字のみで「厨」である）。	Ⅳ第 2~ 第 3 小期 8C 前 ~ 後
171	O22		⑩層	須恵器（墨書）	坏身	12.2	3.2	底径 6.0	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	60	口縁部～体部（側面）に墨書あり。（「林」の一文字）。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
172	N23		⑩層	須恵器（墨書）	坏身の高台	—	(1.4)	高台径 10.2	右	底部外面回転ヘラケズリ後、ナデ調整。他は回転ナデ。	青灰	良	30	底部外面に墨書あり（2 文字あり。釈読できない）。付け高台。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
173	O24		⑥層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.3)	高台径（11.2）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	20	底部外面にヘラ記号（「×」）と墨書あり（不鮮明）。付け高台。	時期不明
174	N21		⑧層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.3)	—	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	10	底部外面に墨書あり（「垣田」）。付け高台	時期不明
175	O22		⑩・⑧層	須恵器（墨書）	坏身	—	(0.9)	—	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	10	底部外面に墨書あり（「室」という字に似ている）。	時期不明
176	N24		地山上	須恵器（墨書）	坏蓋	(16.8)	(2.2)	—	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	35	天井部外面に墨書あり（2 文字ありそう。「町」の字に似ており、「田村」か？）。	Ⅳ第 2 小期　8C 前 ~ 中
177	O23		⑧層	須恵器（墨書）	坏蓋	—	(2.1)	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	10	天井部内面に墨書あり（墨書は不鮮明）。	Ⅳ第 2 小期　8C 前 ~ 中
178	O23	NR1	⑩層	須恵器（墨書）	—	—	—	—	不明	回転ナデ。	灰	良	5	内面に墨書あり（「垣」の字であり、おそらく「垣田」と書いてあったと思われる）。	時期不明
179	N23		⑩層	白瓷	椀	(13.5)	3.9	高台径（7.2）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	30	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内面に一部緑色の自然釉が付着。	光ヶ丘一　9C 後
180	N22		⑥層	白瓷	椀	(14.9)	5.7	高台径 6.9	右	回転ナデ。	灰	良	35	底部外面糸切痕あり。玉縁状口縁で内・外ともに口縁部に施釉し、内面には緑色の自然釉がかかる。	西坂一　11C 前 ~ 中
181	N23		⑩層	白瓷	椀	(15.6)	5.7	高台径（7.0）	右	底部外面糸切痕をナデ消、他は回転ナデ。	灰	良	30	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内面には一部緑色の自然釉も付着。	西坂一　11C 前 ~ 中
182	N24		⑥層	白瓷	皿	(13.6)	2.9	高台径（6.7）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	30	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内面に一部緑色の自然釉が付着。	大原二　10C 前
183	N23		⑩・⑧層	白瓷	皿	13.1	3.0	高台径（7.5）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。底部内面の指押さえ。	黄灰	良	40	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内面に重ね焼きをはがした痕跡あり。	大原二　10C 前
184	N22		⑧層	白瓷	段皿	11.4	2.2	高台径 6.8	右	回転ナデ。	灰白	良	85	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。底部が高台より下に出る（調整不足？）。底部外面に糸切痕あり。	虎渓山一　10C 後
185	M21		⑥層	山茶碗	碗	(16.4)	5.9	高台径 7.3	右	底部外面の糸切痕をナデ消す。他は回転ナデ。	灰白	良	50	付け高台に籾殻痕あり。外面が一部黒く焼けている。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
186	N21		⑥層	山茶碗	碗	(16.8)	5.6	高台径 7.8	左	回転ナデ。	灰白	良	50	付け高台に籾殻痕あり。内面に緑色の自然釉がかかる。底部外面に糸切痕あり。外面が一部黒く焼ける。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
187	M23		⑧層	山茶碗	碗	(15.8)	5.3	高台径 6.7	左	底部外面の糸切痕をナデ消す。他は回転ナデ。	黄白	良	60	付け高台。底部を除いた内面全体に釉がかかる。底部内面には重ね焼きをはがした痕跡がみられる。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
188	N23		⑧層	山茶碗	碗	(15.3)	5.9	高台径 7.2	左	回転ナデ。	灰白	良	45	底部内面に黒色有機物（漆か？）が付着。内面に一部自然釉も付着。底部外面に糸切り痕。高台部分に籾殻痕がみられる。均質。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
189	N23		⑩層	山茶碗	碗	(16.9)	5.1	高台径（7.1）	左	底部外面糸切後ナデ消し、他は回転ナデ。	灰	良	45	付け高台に籾殻痕あり。重ね焼きしているため、外面の口縁部と体部の色が異なる。底部内面に黒色の付着物あり（漆もしくは墨）。体部内面に緑色の自然釉がかかる。	浅間窯下 1　12C 後

190	N22		⑩層	山茶碗	碗	(16.0)	5.3	高台径 7.1	右	底部外面糸切後ナデ消し、他は回転ナデ。	灰	良	60	付け高台に籾殻痕あり。底部内面付近に緑色の自然釉が付着。	浅間窯下 1　12C 後
191	N23		⑧層	山茶碗	輪花碗	(16.1)	5.3	高台径 6.7	左	回転ナデ。	灰白	良	50	内面に一部自然釉と重ね焼きの痕跡あり。付け高台。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
192	N22		⑧層	山茶碗	輪花碗	17.2	5.5	高台径 8.0	右	回転ナデ。	灰白	良	90	底部外面に糸切痕あり。付け高台に籾殻痕あり。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
193	M22		⑩層	山茶碗	小皿	9.0	2.9	高台径 4.5	右	回転ナデ。	灰	良	85	付け高台に籾殻痕あり。底部外面に糸切痕あり。内面半分ほどに緑色の自然釉がかかり、重ね焼きの痕跡が残る。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
194	N21	NR	⑩層	山茶碗	小皿	(10.6)	3.2	高台径 5.5	左	回転ナデ。	灰白	良	25	付け高台。内・外面に部分的に自然釉がかかる。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
195	N24		⑩層	山茶碗	小皿	9.3	3.4	高台径 5.3	右	回転ナデ。	灰	良	95	付け高台に籾殻痕あり。底部外面に糸切痕あり。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
196	N23･24		⑩層	山茶碗	小皿	(9.8)	3.2	高台径 4.0	左	回転ナデ。	青灰	良	50	底部外面ヘラ切り未調整。付け高台に籾殻痕あり。内面には緑色の自然釉がみられ、黒色の付着物（漆）がみられる。	谷狭間 2　12C 前 ~ 後
197	N23		⑩層	山茶碗	小皿	(9.8)	2.8	底径 5.1	左	回転ナデ。	白	不良	50	焼きが甘く、全体が白い。底部外面糸切痕も磨耗。	浅間窯下 1　12C 後
198	M23		⑥層	山茶碗	小皿	(9.8)	3.2	底径 4.9	左	回転ナデ。	灰	良	50	底部外面に糸切痕あり。内面に部分的に緑色の自然釉がかかる。	浅間窯下 1~ 丸石 3 12C 後 ~ 13C 初
199	O21･22	NR	⑩層	山茶碗	小皿か仏共	(8.0)	2.2	底径 3.0	左	回転ナデ。	灰	良	45	底部外面に糸切痕あり。	白土原 1　13C 前 ~ 中
200	N24		⑥層	山茶碗（墨書）	碗	—	(2.3)	高台径 6.0	不明	回転ナデ。	灰白	やや不良	30	底部外面に糸切痕。高台に籾殻痕がみられるが、高台はほぼはがれている。底部外面に墨書あり（「そ」）。均質。	白土原 1　13C 前 ~ 中
201	N22		⑥層	山茶碗（墨書）	小皿	8.8	1.8	底径 5.0	不明	回転ナデ。	灰白	良	95	底部外面に糸切痕と墨書あり（不鮮明）。均質。	明和 1　13C 後 ~14C 初

表３　平成 16 年度　出土遺物観察表

図番	グリッド	遺構	層序	種別	器種	法量			ロクロ	成・整・調整	色調	焼成	残存	特記事項	時期（推定）
						口径	器高	その他							
202	N33			土師器	甕	11.5	24.7	底径 4.7 胴径 23.7	—	ナデ。	黄白	やや不良	90	器表面が荒れているが、一部ハケ目のような調整痕が確認できる。	4C 後
203	L29	NR1	⑯層	土師器	手捏ね土器	7.2	6.7	脚端部径 3.8、脚基部径 3.2	—	ナデ。	黄白	やや不良	90	器表面は荒れており、調整痕は確認できない。	4C 後 ~ 5C 前
204	O31		⑨層	土師器	壺	10.2	10.5	胴径 11.4	—	ナデ。	赤褐	やや不良	70	外面が一部黒く焼ける。	5C 前
205	O30		⑨層	土師器	高坏	—	7.2	脚端部径 10.9	—	ナデ。	赤褐	やや不良	不明	調整等は不明	5C 中
206	N30	NR1	⑨層	土師器	甕	(16.5)	(27.5)	底径（6.4）	—	ナデ。頸部内面板ナデ、体部内面ハケ目調整。	黄白	やや不良	40	体部外面は黒く焼けている。	7C
207	LM31	NR1	⑬・⑮層	須恵器	坏身	(15.7)	3.5	高台径 11.3	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	20	付け高台。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
208	M26	NR2	⑯層	須恵器	坏身	(10.6)	3.0	底径 6.5	左	回転ナデ。	灰	良	60	底部外面にヘラ切痕あり。底部外面にヘラ記号（一本の線？）あり。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
209	L31	NR1	⑧層	須恵器	坏身	(13.0)	3.9	高台径（9.7）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	60	付け高台。内面に他の土器片が融着（重ね焼きをしたためか？）	Ⅳ第 2 小期　8C 前 ~ 中
210	L31	NR1 T3	⑧層	須恵器	坏身	(12.6)	3.8	底径（6.4）	左	回転ナデ。	青灰	良	50	底部外面にヘラ切痕あり。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
211	M26	NR2	㉞層	須恵器	坏身	(14.1)	3.9	高台径 10.9	右	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ調整、他は回転ナデ。	灰	良	50	付け高台。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
212	O31	NR1	⑩層	須恵器	坏身	(13.9)	3.9	高台径 11.1	右	底部外面静止ヘラケズリ、他は回転ナデ。	暗灰	良	50	付け高台。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
213	N30·31	NR1	⑩層	須恵器	坏身	(13.7)	3.7	高台径 9.5	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	60	体部外面に少量の緑色の自然釉が付着。高台、底部と体部の境の 2 ヶ所に他の土器片が融着。	Ⅴ第 1 小期　9C 前
214	M25	NR2	㉞層	須恵器	坏身	(11.8)	3.8	底径（7.1）	右	回転ナデ、底部外面は不整方向のナデ調整。	灰	良	40		Ⅴ第 1 小期　9C 前
215	LM31	NR1	⑧・⑨層	須恵器	坏身	(15.1)	4.9	高台径 11.2	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	50	底部外面に糸切痕を残す。	Ⅴ第 1 小期　9C 後
216	L27	NR2	㊱層	須恵器	坏蓋	(11.7)	3.7	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	65		TK43　尾張 5 型式 6C 後
217	M31	NR1	⑨・⑩層	須恵器	坏蓋	(13.0)	(4.1)	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。天井部内面は指おさえ。	青灰	良	70	鈕欠損。	TK43　尾張 5 型式 6C 後
218	N30	NR1	⑨・⑩層	須恵器	坏蓋	15.2	3.4	鈕径 3.9	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	60	天井部内面に器膨れあり。天井部外面にヘラ記号がみられる（一本の線）。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
219	L26	NR2	㊱層	須恵器	坏蓋	(15.4)	3.5	鈕径 4.1	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	25	天井部内面に器膨れあり。天井部外面にヘラ記号あり（一本の線）。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
220	L26	NR2	㉟・㊱層	須恵器	坏蓋	(15.2)	3.7	鈕径 3.9	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	40	内面に器膨れが 2 ヶ所ある。	Ⅳ第 1 小期　8C 前
221	M31	NR1	⑨・⑩層	須恵器	坏蓋	(15.6)	2.5	鈕径 2.8	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	20	天井部内面にわずかだが、緑色の自然釉が付着。	Ⅳ第 3 小期　8C 後
222	MN27		⑬層	須恵器	坏蓋	(15.8)	2.9	鈕径 2.9	左	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	褐灰	良	35		Ⅳ第 3 小期　8C 後
223	O30	NR1	⑨層	須恵器	高坏	14.9	12.1	脚端部径 10.9、脚基部径 2.8	右	坏底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	90	脚部外面にはボロが部分的に付着。坏部、脚部ともに一部ひずむ。	Ⅲ期後半　7C 後

224	M31	NR1	⑨・⑩層	須恵器	蓋（埦の？）	21.4	4.6	鈕径 4.8	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	50	LM31NR1 ②・⑦層からもほぼ同数出土。天井部外面に緑色の自然釉が部分的にかかる。	Ⅳ第２小期　8C 前～中
225	L30	NR1	⑧層	須恵器	蓋（埦の？）	(24.6)	(5.1)	—	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	35		Ⅳ第３小期　8C 後
226	L31	NR1	⑧層	須恵器	長頸瓶	—	(19.1)	高台径（13.0）	右	回転ナデ。体部下半～底部回転ヘラケズリ。	暗灰	良	20	付け高台。三段構成。体部外面にタタキの痕跡が１ヶ所残る。	Ⅴ第１小期　9C 後
227	LM31		⑬・⑧層	須恵器	甕	(25.0)	(9.6)	—	左	回転ナデ。体部内面には当て具痕あり、頸部～体部外面には平行タタキが施される。	灰	良	不明	頸部及び口縁部外面には部分的に緑色の自然釉がかかり、頸部内面にも一部緑色の自然釉がかかる。	Ⅳ第１小期　8C 前
228	L30	NR1	⑩層	須恵器	甕	27.6	(39.6)	胴径 47.9	左	回転ナデ。体部外面平行タタキ。	暗灰	良	50	頸部外面に櫛描き列点紋が巡る。体部内面に当て具痕跡はみられない。体部外面に他の土器片が２ヶ所融着。	時期不明
229	M26			須恵器（墨書）	坏身	12.3	3.9	底径 6.9	左	回転ナデ、底部内面指おさえ。	灰	良	85	底部外面ヘラ切り未調整。外面側面に墨書あり（一文字で「津」の部首をとり、上に線を一本増やす字）。	Ⅳ第１小期　8C 前
230	M31	NR1	⑧・⑩層	須恵器（墨書）	坏身	(12.7)	4.3	底径（7.0）	右	回転ナデ、底部外面ヘラ切り未調整。	灰	良	50	底部外面に墨書あり（土器が欠損しているため釈読不明）。	Ⅳ第１小期　8C 前
231	O28		⑬層	須恵器（墨書）	坏身	—	(1.5)	—	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	青灰	良	不明	底部外面に墨書あり（欠損しているが、「垣田」の文字。）	時期不明
232	O27		⑬層	須恵器（墨書）	坏蓋	(17.4)	3.8	鈕径 2.3	右	天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。天井部内面はナデ調整。	灰	良	15	天井部内面に墨書あり（「垣田」）。	Ⅳ第３小期　8C 後
233	L29	NR1	⑨層	白瓷	椀	(14.0)	5.9	高台径（5.8）	右	底部外面ナデ調整、回転ナデ。	青灰	良	45	付け高台。釉がかかっているが、風化して薄い。	光ヶ丘一　9C 後
234	N31	NR1	⑩層	白瓷	椀	(14.2)	5.8	高台径（6.4）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	40	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内・外面に部分的に緑色の自然釉がかかる。底部内面には重ね焼きをはがした痕跡あり。付け高台。	大原二　10C 前
235	O30	NR1	⑩層	白瓷	椀	(14.7)	5.9	高台径 6.3	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	45	内・外面ともに口縁部～体部まで施釉。付け高台。	丸石二　10C 後
236	M30		⑨層	白瓷	椀	(14.8)	5.0	高台径 7.8	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	25	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内面に緑色の自然釉が部分的にかかり、重ね焼きをはがした痕跡がみられる。	丸石二　10C 後
237	L27	NR2	㉟・㊱層	白瓷	椀	(14.2)	5.4	高台径（6.1）	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	20	口縁部から体部にかけて施釉。外面に指紋がみられる。付け高台。	虎渓山一　10C 後
238	N30･31	NR1	⑩層	白瓷	椀	(14.2)	5.6	高台径 7.0	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	黄褐	良	50	口縁部内面及び口縁部～体部外面に施釉。付け高台。	明和二七　11C 前
239	N32		⑬層	白瓷	椀	(15.7)	5.8	高台径（7.0）	左	回転ナデ。	灰白	やや不良	30	無釉。底部がないため、底部の調整は不明。外面に墨書（？）の線あり。付け高台。	明和二七　11C 前
240	N30	NR1	⑩層	白瓷	椀	(16.3)	6.1	高台径 7.0	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	35	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内面に一部緑色の自然釉がかかる。	明和二七　11C 前
241	N26		⑨層	白瓷	椀	(16.6)	5.4	高台径（7.1）	左	回転ナデ。	灰	良	55	口縁部内・外面に施釉。体部内面に一部緑色の自然釉がかかる。底部内面に一部重ね焼きをはがした痕跡あり。付け高台は重ね焼きをはがした際に一部欠損している。	西坂一　11C 前～中
242	N32		⑬層	白瓷	小椀	9.5	3.5	高台径 4.6	左	回転ナデ。	灰	良	50	底部外面糸切痕あり。口縁部～体部にかけて施釉。内面に緑色の自然釉が部分的にかかる。	明和二七　11C 前
243	N31		⑨層	白瓷	皿	12.1	2.9	高台径 6.5	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	65	付け高台。口縁部の内面と外面に釉がかかる。釉はつけがけ。	大原二　10C 前
244	M31	NR1	⑬・⑨層	白瓷	皿	12.7	2.7	高台径 7.1	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰白	良	95	灰釉はつけがけ。内・外面に緑色の自然釉がわずかだが付着。付け高台。	大原二　10C 前

245	M27	NR2	㉞層	白瓷	皿	(12.4)	2.2	高台径 7.0	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	70	内面全体、外面に部分的に自然釉がかかる。付け高台。	大原二　10C 前
246	O28J			白瓷	皿	(13.1)	3.1	高台径（6.3）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	25	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。内・外面に部分的に緑色の自然釉がかかる。底部内面には重ね焼きをはがした痕跡あり。	虎渓山一　10C 後
247	M30		⑬層	白瓷	段皿	(13.8)	2.2	高台径 8.0	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	40	付け高台。釉はつけかけされ、内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。	大原二　10C 前
248	N31		⑬層	白瓷	皿	(11.7)	2.1	高台径（5.9）	左	底部外面糸切後ナデ消し、他は回転ナデ。	灰	良	45	内・外面ともに口縁部～体部にかけて施釉。緑色の自然釉もわずかに付着。底部内面に重ね焼きをはがした痕跡あり。	西坂一　11C 前～中
249	M31	NR1 T3	⑧層	白瓷	長頸瓶	—	(24.0)	高台径（10.2）	右	回転ナデ。体部下半～底部回転ヘラケズリ。	灰	良	30	頸部から体部外面に施釉を行い、その上に緑色の自然釉がかかる。付け高台にも外面一部自然釉がかかる。底部内面にも緑色の自然釉がかかる。	丸石二　10C 後
250	M31	NR1	⑨・⑩層	白瓷 (墨書)	椀	(15.0)	6.0	高台径 7.6	右	回転ナデ。	灰	良	45	底部外面に糸切痕と墨書あり（薄いため、釈読不明）。口縁部内・外面に施釉。体部内面に一部緑色の自然釉がかかる。底部内面に一部重ね焼きをはがした痕跡あり。付け高台。	大原二　10C 前
251	L31	NR1	⑧層	白瓷 (墨書)	椀	—	(2.9)	高台径（6.3）	左	底部外面ナデ調整、他は回転ナデ。	灰白	良	不明	底部外面に墨書あり（「×」の字）。底部内面に重ね焼きをはずす際に土器をはがした痕跡あり。付け高台。	明和二七　11C 前
252	LM31		⑬・⑮層	白瓷 (墨書)	椀	—	(2.4)	高台径（7.0）	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	灰	良	不明	底部外面に墨書あり（「○の中に曲線が入っている。釈読不明。）付け高台。※断面が摩滅し、摩滅した断面付近にリング痕がある。自然釉をはがすのに使用されたり、削器として使用された可能性あり。	西坂一　11C 前～中
253	O31	NR1	⑩層	白瓷 (墨書)	椀	—	(2.5)	高台径 6.5	右	回転ナデ。	灰白	良	不明	底部外面に糸切痕と墨書あり（七の下に口が二つ。釈読不明）。内面に黒色の付着物あり（墨？）。	西坂一　11C 前～中
254	M30	NR1	⑧層	山茶碗	碗	12.2	4.3	高台径 5.4	左	底部外面は糸切後、ナデ調整。他は回転ナデ。	灰白	良	100	内面が一部白く焼ける。付け高台。	谷狭間 2　12C 前～後
255	N31	NR1	⑧層	山茶碗	碗	(16.8)	6.0	高台径（7.4）	右	底部外面糸切後ナデ消し、他は回転ナデ。	灰	良	40	付け高台に籾殻痕あり。口縁部外面及び内面全体に緑色の自然釉がかかる。	谷狭間 2　12C 前～後
256	L29		⑬層	山茶碗	碗	12.7	4.2	高台径 6.0	左	回転ナデ。	灰	良	80	底部外面に糸切痕あり。口縁部～体部内・外面にかけて緑色の自然釉がかかる。	谷狭間 2　12C 前～後
257	M27	SD1	⑬層	山茶碗	碗	(16.7)	5.9	高台径 7.5	右	回転ナデ。	灰	良	65	底部外面に糸切痕、付け高台に籾殻痕あり。	谷狭間 2　12C 前～後
258	O27		⑬層	山茶碗	碗	(16.0)	4.8	高台径 8.6	左	回転ナデ。	灰白	良	35	底部外面に糸切痕あり。付け高台に籾殻痕あり。	丸石 3　12C 末～13C 初
259	N26		⑬層	山茶碗	碗	(12.4)	3.4	底径（5.0）	右	回転ナデ。	灰白	良	45	底部外面に糸切痕あり。付け高台。	脇之島 3　15C 中
260	M26			山茶碗	輪花碗	(15.8)	5.8	高台径 7.3	右	回転ナデ。	褐灰	良	50	底部外面に糸切痕あり。内面にボロと緑色の自然釉が一部みられる。付け高台。	谷狭間 2　12C 前～後
261	M25	NR2	⑦層	山茶碗	小皿	8.6	3.1	高台径 5.0	右	底部外面糸切後ナデ消し、他は回転ナデ。	灰	良	95	内面に緑色の自然釉がかかる。内面に重ね焼きをはがした痕跡あり。	谷狭間 2　12C 前～後
262	N28		⑬層	山茶碗 (墨書)	碗	—	(1.4)	高台径（5.8）	左	回転ナデ。	灰	良	不明	底部外面に糸切痕と墨書あり（土器が欠損しているため、釈読不明。「○」の中に文字が書かれる）。付け高台に籾殻痕あり。	窯洞 1　13C 前
263	2・3			山茶碗 (墨書)	碗	—	(2.4)	高台径（5.5）	右	回転ナデ。	灰	良	20	底部外面に糸切痕と墨書あり（土器が欠損しているため釈読不明であるが、残存部分は「＋」である）。内面に緑色の自然釉が部分的に付着。付け高台に籾殻痕あり。	大畑大洞 4　14C 前

264	LM31	T2・4		山茶碗（墨書）	碗	—	(2.3)	高台径（5.0）	不明	回転ナデ、底部内面は指おさえまたはナデ調整。	灰	良	不明	底部外面に糸切痕と墨書あり（土器が欠損しているため、釈読不明）。付け高台に籾殻痕あり。	大畑大洞４　14C 前～中
265	M27・28	SD1	⑨層	山茶碗（墨書）	大碗	17.8	5.9	高台径 9.1	右	回転ナデ。	灰白	良	90	底部外面に墨書あり（「大」の文字が墨書されている）。底部外面に糸切痕あり、付け高台に籾殻痕がみられる。	丸石３　12C 末～13C 初
266	M27			山茶碗（墨書）	大碗	(17.4)	6.0	高台径（9.0）	右	回転ナデ。	灰	良	65	底部外面に墨書あり（８のような形）。内面口縁部～体部にかけて部分的に緑色の自然釉がかかる。付け高台に籾殻痕あり。	窯洞１　13C 前
267	M26	NR2	㉞層	山茶碗	小皿	(10.3)	3.1	高台径（5.3）	右	底部外面糸切後ナデ消し、他は回転ナデ。	灰	良	65	口縁部～体部内面に緑色の自然釉が付着。付け高台。	谷狭間２　12C 前～後
268	M27・28	SD1	⑬層	山茶碗	小皿	8.8	2.2	底径 4.3	左	回転ナデ。	灰	良	100	底部外面に糸切痕あり。口縁部外面及び内面に部分的に自然釉がかかる。	浅間窯下１　12C 後
269	M28	SD		山茶碗	小皿	8.6	1.6	底径 4.8	右	回転ナデ。	灰	良	100	底部外面に糸切痕あり。	浅間窯下１　12C 後
270	N28		⑬層	山茶碗	小皿	(8.9)	2.3	底径（4.5）	左	回転ナデ。	灰白	良	30	底部外面に糸切痕あり。	窯洞１　13C 初
271	LM31	T2・4		山茶碗	小皿	(8.2)	1.3	底径 4.5	左	回転ナデ。	灰白	良	75	底部外面に糸切痕あり。	大谷洞 14　14C 後
272	M27		⑬層	山茶碗（墨書）	小皿	(8.0)	1.7	底径 4.2	右	回転ナデ、底部内面はナデ調整。	灰	良	20	底部外面に糸切痕と墨書あり（墨書は不鮮明で釈読できない）。底部内面はわずかに緑色の自然釉が付着。	白土原１　13C 前～中
273	N31		⑬層	陶器	汁次	(4.4)	10.5	底径 6.0	左	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	緑灰	良良	80	把手及び注口は欠損。底部以外の外面に灰釉がかかり、その上に緑色の自然釉がかかっている。口縁部・底部内面にも緑色の自然釉がかかる。素地は灰白色。	時期不明
274	トレンチ下段灰褐色と暗灰褐色との境			緑釉陶器	底部	—	(1.5)	高台径 8.6	右	底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	緑	良	不明	付け高台。内・外面に緑釉が施釉されている。	時期不明

表４　出土遺物（石製品）観察表

図　番	グリッド	遺　構	層　序	器　種	形　態	法　量			石　材	備　考	調査年次
						長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)			
1	M15		④層	石刀		(15.2)	(4.3)	(1.1)	粘板岩（黒灰色）	破損、磨製	H13
2	N15		③層	石剣		(9.2)	(4.7)	(2.5)	濃飛流紋岩	破損、磨製	H13
3	M13		③・④層	スクレイパー	両刃	5.8	(6.5)	1.0	黒灰色砂岩	部分磨製	H13
4	N24	NR		有舌尖頭器		(5.8)	2.6	0.8	下呂石（灰色）		H14
5	N21		⑥層下	スクレイパー	片刃	3.5	4.7	0.6	灰色チャート		H14
6	N24		⑧層	スクレイパー	片刃	5.2	2.4	0.7	半透明灰色チャート		H14
7	排土			スクレイパー	両刃	4.9	4.1	1.5	暗灰色チャート		H16
8	排土			有舌尖頭器		3.3	1.4	0.55	黒灰色チャート		H16
9	N32		地山直上	有舌尖頭器		(5.2)	2.4	0.8	黒灰色チャート		H16
10	N31	NR1	⑩層	スクレイパー		(3.3)	2.3	0.8	黒灰色チャート	未製品か	H16
11	L30	NR1	⑩層	スクレイパー		4.0	3.0	1.5	黒灰色チャート	未製品か	H16
12	N29		⑨層	スクレイパー		4.5	3.1	1.5	黒灰色チャート	未製品か	H16
13				スクレイパー		3.5	2.4	1.1	黒灰色チャート	未製品か	H16
14	N32		地山直上	石鏃		2.0	1.4	0.4	黒灰色下呂石	凹基	H16
15	N31		⑬層	石鏃		(2.3)	1.6	0.5	黒灰色チャート	凸基	H16
16	O32		⑨層	石鏃		(2.4)	(1.4)	0.35	下呂石（黒灰色）	凹基	H16
17	O25		⑬層	石鏃		1.7	1.5	0.25	暗灰色チャート	凹基	H16
18	M31	NR1	⑩層	打製石斧		10.1	4.2	1.4	粘板岩（暗灰色）	短冊形	H16

凡例：（数値）は現存値、ＮＲは自然流路

表５　出土した石器の集計表

名　称	個体数計	内　訳			
		H13年度	H14年度	H16年度	石材名
有舌尖頭器	7		1	6（4）	下呂石 1、チャート 5（内未成品 4）
石鏃	4			4	下呂石 2、チャート 2
スクレイパー	4	1	2	1	チャート 3、砂岩 1
磨製石刀	1	1			粘板岩
磨製石剣	1	1			濃飛流紋岩
打製石斧	1			1	粘板岩
砥石	2	2			砂岩 1、粘板岩 1
敲石	1	1			花崗岩
石核	52		3	49	チャート
剥片	70		2	68	砂岩 1、チャート 69（内 10 点は二次加工か）
合計	143	6	8	129	

第１次調査

調査前（北西から）

Ｍ 14 ～ 16 区トレンチ（北西から）

調査前（南西から）

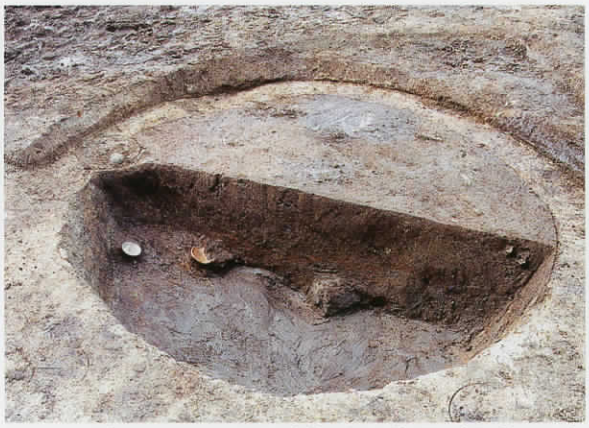
Ｍ 14 ～ 16 区トレンチ（北から）

Ｍ 14 ～ 16 区トレンチ（南東から）

Ｍ 14 区内ピット検出状況（西から）

Ｍ 14 ～ 16 区トレンチ（南から）

Ｍ 14 区内ピット検出状況アップ



Ｍ６・７内ＳＥ１　上層遺物出土状況（北東から）

Ｍ６・７内ＳＥ１　曲物完掘状況（西から）

Ｍ６・７内ＳＥ１　上層遺物アップ

Ｍ６・７内ＳＥ１完掘後（南から）

Ｍ６・７内ＳＥ１　曲物検出状況（北東から）

Ｍ10区　ＳＫ完掘後状況（西から）

Ｍ６・７内ＳＥ１　曲物検出状況

ＬＭ14～15区遺物集中地点（北東から）

ＬＭ 14 ～ 15 区遺物集中地点（西から）

Ｍ 13 区内　サバ盛土及び東壁（西から）

ＬＭ 14 ～ 15 区遺物集中地点アップ

Ｍ 16 区内　東壁（西から）

Ｍ 15 区内　盤出土状況（東から）

ＬＭ 14 ～ 16 区　トレンチ内完掘後（南から）

ＬＭ 13 区内　サバ土による盛土検出（南東から）

ＬＭ 14 ～ 16 区　トレンチ内完掘後（北から）

ＬＭ 14 ～ 16 区　トレンチ内完掘後（北西から）

Ｍ 14 区　ピット及び柱痕（南東から）

Ｍ 14 区　ピット内柱痕（南から）

Ｌ 13 区　ピット及び柱痕（西から）

ＬＭ８～９区　暗渠石組検出（西から）

ＬＭ８～９区　暗渠石組（南東から）

ＬＭ８～９区　暗渠石組検出（南から）

ＬＭ８～９区　暗渠石組内遺物（南西から）

Ｏ16～17区　東壁（西から）

ＬＭ８～９区　暗渠石組除去後（西から）

Ｍ17区　石組列（西から）

Ｏ17区　柱列検出状況（北西から）

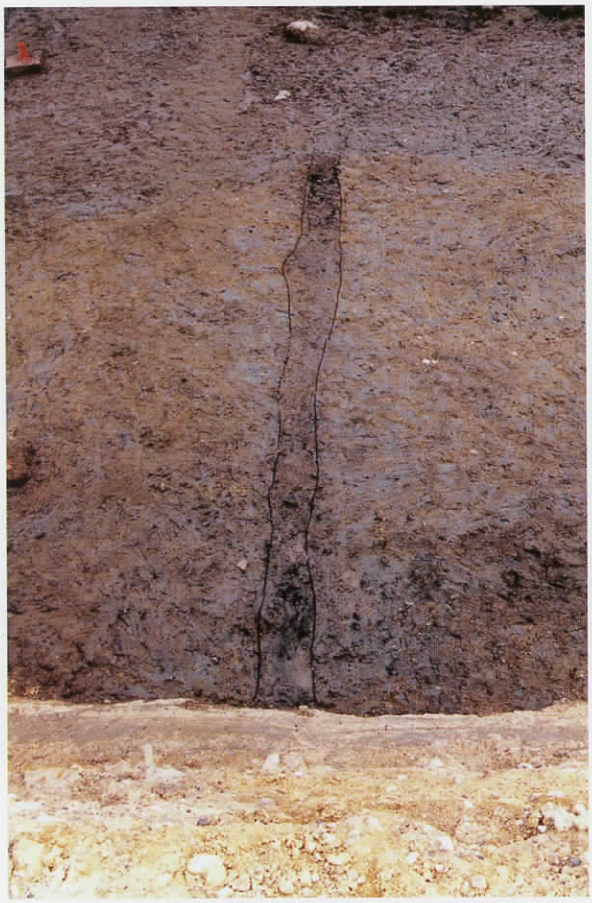
ＮＯ15～17区ピット群（北西から）

Ｎ17区　ＳＤ内提瓶出土（北から）

第２次調査

調査前全景

ＮＯ 24・25 区　遺物出土集中部分（東から）



ＬＭ 24 区表土除去後ベルト状の痕跡

ＮＯ 24・25 区　遺物出土集中部分アップ

ＮＯ 24・25 区　遺物出土状況

ＮＯ 24・25 区表土除去後遺物出土状況（東から）

調査区完掘状況全景（西から）

調査区内自然流路ＮＲ完掘（南東から）

ＮＯ区内ＮＲ全景（北から）

調査区北側完掘状況（南西から）

ＮＲ内サブトレンチ断面①（北から）

ＮＯ 21・22 区内ＮＲと護岸石組１（西から）

ＮＲ内サブトレンチ断面②（北から）

ＬＭ 21・22 区内ＮＲと護岸石組２（東から）

調査区南側完掘状況（北西から）

調査区南側ＮＲ全景（北西から）

ＬＭ 21・22 区内柵列ＳＡ１・２（西から）

ＮＯ 23 ～ 25 区内ＮＲと護岸石組３（西から）

調査区北壁土層（南から）

ＮＯ 23 ～ 25 区内ＮＲ全景（東から）

調査区東壁土層（西から）

ＬＭ 23 ～ 25 区内柵列（ＳＡ１）全景（北西から）

第３次調査

調査前全景

試掘トレンチ内出土遺物（須恵器）

試掘トレンチ全景（北から）

トレンチ内検出の溝状遺構

試掘トレンチ南側段丘部分（北から）

調査区完掘後　南側部分ＮＲ（北東から）

試掘トレンチ内出土遺物（須恵器）

調査区南側部分ＮＲ（南東から）

調査区中央ＮＲ１及び段丘内ＮＲ（北から）

中央部ＮＲ１底部アップ（西から）

中央部ＮＲ１（東から）

ＬＭ 30・31 区西壁断面（東から）

中央部ＮＲ１全景（北東から）

Ｎ 33 区内北側　埋納土器出土状況（南東から）

中央部ＮＲ１全景（南東から）

Ｎ 33 区内　埋納土器アップ（東から）

調査区北側バイパス溝と杭列（南から）

調査区南側完掘後全景（南東から）

バイパス溝と杭列（東から）

バイパス溝（南東から）

バイパス内杭列（南東から）

バイパス溝西側掘立柱建物跡（南東から）

調査区完掘後全景（南西から）

調査区完掘後全景（南東から）

調査区北側完掘後全景（南西から）

調査区北側ＮＲ２（南から）

調査区北側整地面　掘立柱建物跡 SH1（南西から）

北側ＮＲ２（東から）

調査区北側整地面　掘立柱建物跡 SH1（南東から）

調査区中央部東壁断面（西から）

土師器

1

2

3

125

124

129

127

126

4

上：5　下：128

202

204

203

須恵器

7

8

9

10

11

12

13

14

16

130

131

133

135

137

139

141

207

208

209

210

212

17

18

214

215

19

20

21

22

23

145

146

147

148

149

150

156

216

217

218

224

225

30

31

32

25

223

27

28

226

26

158

159

33

161

227

34

35

168

36

228

228

165

38

162

163

169

164

37

24

41

144

40

14

21

152

15

142

157

29

136

138

白瓷

94

95

96

174

179

180

235

237

238

240

241

242

243

246

248

184

247

226

山茶碗

97

98

99

100

102

185

190

191

192

195

199

254

258

259

269

271

272

189

196

188

近世陶器

113

110

112

107

273

274

117

111

108

121

118

116

115

109

114

119

120

122

墨書

42

43

44

46

45

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

59

57

58

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

170

171

172

173

174

175

176

177

178

229

230

231

232

墨書（白瓷・山茶碗）

103

104

105

106

200

201

251

252

253

262

263

264

265

266

272

報告書抄録

ふりがな	かきだいせきうまのりぼらちてん
書名	柿田遺跡馬乗洞地点
副書名	
巻名	
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	42
編集者名	松本　茂生
編集機関	可児市教育委員会
所在地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目1番地
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 面積	調査原因
柿田遺跡 馬乗洞地点 (1～3次)	第1次 可児市柿田字月田地内	21214	08846	35° 25' 33"	137° 06' 16"	20011001 ～ 20020131 630㎡	市道建設
	第2次 可児市柿田字前山675番1,675番3					20021015 ～ 20030124 360㎡	
	第3次 可児市柿田字馬乗洞675番地8外2筆					20050401 ～ 20050630 777㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柿田遺跡 馬乗洞地点	建物遺構 自然流路	奈良 中世～ 近世	掘立柱建物 自然流路 井戸・排水溝跡 散布地	土師器、須恵器、白瓷、山茶碗、陶器、柱根、杭、着火用木片	奈良時代を中心に護岸を伴う自然流路とその周辺に掘立柱建物が存在。「垣田」と書かれた須恵器片が出土。

可児市埋文報告 42

柿田遺跡馬乗洞地点

平成 21 年 3 月 28 日　印刷
平成 21 年 3 月 31 日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
〒 509-0292　岐阜県可児市広見一丁目 1 番地
Tel　0574-62-1111　Fax　0574-63-6751
印　　刷　丸理印刷株式会社